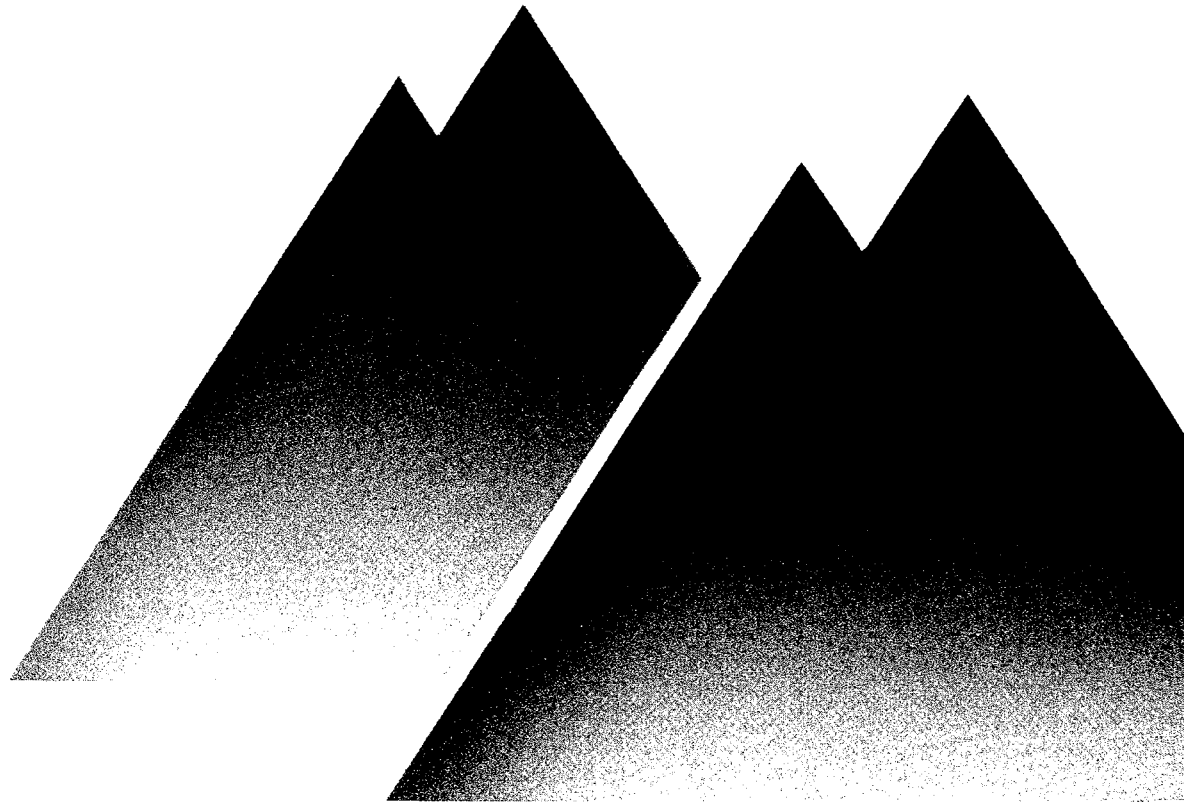


# 研究紀要

2021 Vol.28 Bulletin



富山県[立山博物館]

Tateyama Museum of Toyama

富山県[立山博物館]

# 研究紀要

第28号

2021年

## 目 次

木戸幸一の立山登山 —旧侯爵木戸家資料「明治四十四年 當用日記」に見る明治末期の登山—	岡 田 知 己	3
近世後期の立山における宿坊経営と戸銭収益 —岩嶺寺衆徒の収益をめぐって—	高 野 靖 彦	31
ニホンライチョウの巢の標本製作について	鈴 木 博 喬	53
海保青陵の立山資源開発提言に見える本草学との関わり —津田随分齋を中心に、本草家を介した情報交流の視点から—	吉 野 俊 哉	65
立山芦嶺寺の「佐伯武平」と両澤山大慶院（新潟県十日町市） —芦嶺寺の嬬尊と大慶院の大日姥婆尊の関係をめぐって—	細 木 ひとみ	85
〈研究ノート〉 立山曼荼羅における地藏菩薩の図像について —立山山中の賽の河原・地獄谷を中心に—	石 崎 康 弘	95



## 木戸幸一の立山登山 —旧侯爵木戸家資料「明治四十四年 當用日記」に見る明治末期の登山—

岡田 知己

### はじめに

木戸幸一(1889-1977)は、大正から昭和にかけての官僚・華族政治家である。その木戸が明治44年(1911)に立山を訪れ、登山の様子を日記に書き残していると、一般社団法人霞会館華族文化調査委員会研究員の松田好史氏から教示を得た。調べたところ、日記は、国立歴史民俗博物館が収蔵する「旧侯爵木戸家資料」に含まれる「木戸幸一日記」の中の「明治四十四年 當用日記」であることが判った。

一方、在地の資料にも木戸幸一の名は見え、木戸が立山登山を目的に芦峯寺を訪れたことは以前から知られていた。今回確認された日記は、この立山登山の内容を知ることのできる、他に得難い資料であった。

この報文では、当該日記に記された立山登山に関わる部分を翻刻し、記述内容の解説を試みる。登山の道中に、若き木戸は何を見、何を感じ、何を書き留めたのか。以下、木戸幸一の日記を読み解き、立山に登山し、北アルプスを横断した木戸の山旅をたどることにする。

### 1. 明治時代の登山事情と学生の登山

明治時代の到来とともに、外交官、政府招聘の技術者・研究者、布教目的の宣教師、商人などの外国人が近代登山を日本にもたらし、実践した。近代登山とは山へ登る行為そのものに意味を見いだすことであり、その意義や喜びが伝えられていった。そして、在日外国人(団体を含む)と日本人との交流が深まったことや、留学生の活動を通して、近代登山は、上流社会・知識階級へと次第に浸透してゆく。

明治27年(1894)に、日本近代登山史の黎明期を語るに欠かせない『日本風景論』が刊行された。本書は、地理学書、国土愛を説く思想書、当時唯一の登山案内書・登山技術解説書であり、本書の刊行が登山奨励の大きな契機を作ることとなる。著者は札幌農学校出身の志賀重昂。ここでは「山」というものを日本的情緒の伝統に讃美される山水美の象徴として据え、地理学を以て科学的論拠を与えている。附録に「登山の氣風を興作すべし」と題する登山案内・登山術解説を備え、知識階層を中心に広く受容され、登山普及の機運醸成に貢献することとなった。本書による登山勸奨の影響は大きく、刺激を受けた旧制中学の教師の指導によって生徒による最も早い組織作りがなされ、後述する日本山岳会も、先行する東京府立一中の日本博物學同志会を母体として生まれた。このように、登山愛好者を育てることに大きく貢献した本書は、各版毎に若干の増補を加えながら36年の15版まで出版された。

また、『日本風景論』刊行前後に、相次いで様々な紀行書が刊行されていく。戸隠山登山の興奮を率直に著した山田美妙の『戸隠山紀行』(明治23年)、奔放な旅の描写のうちに明治人の山水への親しみが滲み出た幸田露伴の『枕頭山水』(26年)、当時画期的といわれた紀行文「富士の高根」を収める遅塚麗水の『日本名勝記』(上・下、ともに31年)、増補版・続編併せて数十版を重ねるほど人気を集めた大橋乙羽の『千山萬水』(32年)、名登山紀行「雪の妙義山」を収める田山花袋の『南船北馬』(32年)、自然美の描写が高く評価される徳富蘆花の『青蘆集』(35年)等が知られるところであろう。これら紀行書に見られる日本の自然美に触れる喜びや郷愁の風景を情感豊かに描く文章は、近代化の進展とともに増え続ける都市生活者の心に響き、田園逍遙や登山の機運醸成に大きく寄与した。

明治30年代に入ると、前述の紀行文学を追うように登山家の著した山岳書の刊行が相次ぐ。その只中に

日本山岳会が設立され、その後の山岳書出版に大きく関わっていった。30年代後半以降の山岳書を列記すると、野中至の『富士案内』(34年)、エチ・ジー・ポンテングの『富士山』(38年)、高頭式の『日本山嶽志』(39年)、小島烏水著・丸山晚霞畫の『山水無盡藏』(39年)、丸山文台・高瀧胖園・野本紫竹の『槍が嶽乃美觀』(39年)、志村烏嶺・前田曙山の『やま』(40年)、大井冷光の『立山案内』(41年)、志村烏嶺の『高山植物採集及培養法』(42年)、日本山岳会編の『高山深谷第一輯～第八輯』(明治43—大正6年)、小島烏水の『日本アルプス』全4巻(明治43—大正4年)、志村烏嶺の『千山萬岳』(大正2年)等がある。このうち特筆すべきは高野鷹蔵を中心に日本山岳会が編集した『高山深谷』である。各輯とも山岳写真のオリジナル・プリントを貼付けたアルバム仕立てで、趣向を凝らした装丁の高価な写真集であった。

日本山岳会の設立は、近代登山を主導する組織の誕生であり、一般に広く門戸が開かれることとなった。早くも会設立の翌年、明治39年には会誌「山岳」が創刊される。会員には、各地で登山の唱導を担った旧制中学の教師や旧制高校の教授なども早くから所属していた。

明治時代の旧制中学・旧制高校の登山組織設立年を見ると、四高・遠足部の31年、東京府立一中・日本博物學同志会の34年、府立京都二中・登嶽部の39年、東京高等師範付属中学・山岳部の45年などである。また、40年代には長野中学舎友会など、山岳会と同様の活動を始める組織も出てくる。このように、四高遠足部以外はすべて旧制中学の事例が占めており、他の旧制高校と帝国大学においては、以前からあった教授や学生の私的活動は別として、明治期に登山組織は未設であった。

ここで、日本で最も早く設立された山岳団体と言われる四高遠足部(のち旅行部を経て山岳部)について、少々付言しておく。

四高旅行部が早くから旧制高校の山岳団体として活動できた背景には、「育ての親」といわれる同校教授、林並木の存在があった。当初、学校教育の一環として設立されたと見られる遠足部に、いち早く創造的登山精神を導入したのが林並木である。東京帝大英文科を明治31年に卒業し、35年に四高に赴任、翌36年には早くも遠足部第二代部長となった。遠足部は翌年旅行部となるが、林はその後も部長を長く務め、部員のみならず広く四高生に慕われたという。39年に林は日本山岳会に入会(会員番号49)、自ら登山のパイオニアワークを実践し、同年、鶴殿正雄に次ぐ穂高岳早期登頂者となるほか、各地の山岳に足跡を印した。在地の資料「泉蔵坊宿泊帖」にもその名を残している。一方、この林並木のもとからは多くの山岳家が育っており、たとえば、登山を伝統的な漂泊観に結びつけた「静観派」の田部重治や、劔岳民間人初登頂(42年)で知られる3名、吉田孫四郎・河合良成・野村義重がいる。河合良成は『明治の一青年像』(昭和44年)のなかで当時を回想し、「山岳通で日本に名の通った林並木先生。この先生は山岳熱を盛んにわれわれに吹きこんだ日本山岳界のパイオニアであった」、「林並木先生や田部隆次先生の影響を受け、立山、白山、医王山などへもしばしば登り…」と語っている。引用文中の田部隆次はラフカディオ・ハーン研究で知られた英文学者で、四高教授ののち学習院教授(明治40年)ほかを歴任した。その弟が田部重治で、後年、英文学者・登山家として活躍し、『山と谿谷』を著す。この表題は、昭和5年創刊の山岳雑誌「山と谿谷」の雑誌名になる。

このように、登山活動は旧制中学・旧制高校の生徒・学生から徐々に拡散浸透し、各地で一般の山岳団体設立の動きへとつながった。そして「大正登山ブーム」へと向かうのだが、明治末期はその前兆期といえよう。このような時代の気風を受け、様々な山岳団体の設立が始まった。地方の登山愛好団体を見ると、飛騨山岳会(明治41年)、名古屋愛山会(42年)、神戸草鞋会(43年)、信濃山岳研究会(44年、のちの信濃山岳会)と、徐々に設立されている。また、在日外国人による山岳団体設立の例も見られ、40年頃に結成された Mountain Goats of Kobe(M.G.K)は、H.E. ドントと J.P. ワーレンが中心となり精力的な活動を展開した。

次に、大正時代に入ってから旧制中学・旧制高校の山岳組織設立の事例を見ておくと、四高に続いて、大正2年(1913)、一高に陸上競技部の一部門として「山岳会」が発足し、翌年旅行部として独立した例がまず挙げられる。その後、三高山岳会の2年(12年に山岳部)、二高山岳会の3年と続き、4年には、京都府立一中山岳部、神戸高等商業学校山岳部、七高山岳部、八高山岳部などが設立された。四高を除く全ての

旧制高校の山岳組織は大正に入って以降の発足である。

次に、大学山岳部の設立について簡単に触れておく。大学については、制度上の属性が変遷して錯綜するため、ここではその点に触れない。旧帝大7校（内地）では、北大の札幌農学校時代にスキー部が最も早く大正元年に創部、のち15年に山岳部が分離独立する。これは、競技スキーが導入されたことでスキーと登山を分離することになったものである。他大学の山岳団体は、いずれも大正後期以降の創部となる。また私学では、それより早く、4年の慶應義塾山岳会、9年の早稲田大学山岳会設立の例がある。

一方、社会人の山岳団体は前述した団体のほかにも増え始め、登山スタイルの多様化も始まり、旧制中学教師による山梨山岳会（大正2年設立）のような職域団体も活動を始める。また、神戸では注目すべき状況があった。登山史研究家布川欣一氏の言葉を借りると、4年に開催された「日本山岳会関西大会を契機に、低山彷徨を楽しもうとする市民が地域の山に密着、アルコール会など風変わりな名の組織を多数生み、百花繚乱の状況を呈する」のである。活動の目的をより特化した団体も現れ、8年には「深林と谿谷」の漂泊を標榜して低山趣味に徹する霧の旅会が東京で発足し、13年に神戸では外国人達の岩登りに刺戟され、藤木九三を中心にロック・クライミング・クラブ（RCC）が設立された。このように、大正期に登山趣味は広く拡散浸透して大衆化し、登山観も多様化すると同時に深化していった。

この時期、産業構造の大きな変化は製造業とサービス業の就労人口を増加させた。報酬を得て衣食住が賄われる近代的な都市生活は、人々を自然から疎外することとなったものの、余暇・休日を得た人々は、山岳趣味や登山活動を求めるようになっていった。その背景には、第一次世界大戦で戦勝国となり、国際的な地位を高められたことによる経済発展と、明治期から続く産業の近代化があった。

## 2. 学習院の登山

学習院は、明治10年(1877)創立の華族学校として始まり、17年に宮内省直轄の官立学校となった。やがて、昭和22年(1947)に私立学校となり、現在に至っている。学習院は組織的な登山活動を他に先駆けて展開し、日本近現代登山史においては名門として名高いが、その登山活動の背景には幾つかの絡み合った要素が存在した。以下、『学習院登山史(Ⅰ)』を適宜参照しつつ学習院の野外活動の動向をたどる。

学習院には、「本院文武活動の中心」的機関として明治22年に設立された輔仁会という組織がある。在学生にとって様々な課外活動の拠り所であり、野外活動も輔仁会のもとに行われた。輔仁会旅行部（山岳部、スキー部）の正式な創部は大正8年(1919)と、他の旧制中学・旧制高校に比べて遅いが、それ以前にも登山活動は輔仁会のもとに行われていたという。創部以前から旅行部、山岳部、スキー部などの名称が学習院輔仁会誌に見え、創部は「輔仁会に承認されたという、手続き上の単なる通過点」と考えられている。輔仁会設立以前にも学習院関係者の登山活動はあったようで、何を以て、何時を以て、学習院輔仁会旅行部の活動開始とする、という時期の設定は困難であるとされる。それは、『学習院登山史(Ⅰ)』に、輔仁会誌「山桜」1号に収載された松方三郎の「随想」から引用して「学習院登山史を書くならば「学習院山岳部がいつできた等ということではなく、山岳部員のみならず、本院関係者が学習院登山史にどう関わり、院外の登山者ともいかなる交友を持ったかという史観に立つべきだ。」という点に凝縮される。」と記されている。

輔仁会誌に登場する学習院関係者の最初の登山記録は、明治20年の、田中阿歌麿と近衛篤麿がそれぞれヨーロッパアルプスに登頂したものである。「西部アルプス・サン・ゴタルード山群ピッツォ・セントラール」に登頂した地理学者の田中阿歌麿は28年から華族女学校の教官を務め、同女学校の学習院併合で39年から学習院で教鞭を執った。スイス、イタリアをトレッキングし「ヴェンゲルンアルプ、クライネシャイデック、エギッシュホルン」に登頂した近衛篤麿は、学習院の第7代学習院院長(28年～37年)を務めている。また、留学や様々な目的での海外渡航を経験した学習院関係者も珍しくなかったに違はなく、登山についても最新の海外動向・情報をもたらされたことであろう。

第10代院長（明治40年～大正元年）を務めた乃木希典は、海に山に野外活動を奨励した。赤禪の遠泳を課したり、後の学習院へのスキー導入につながるスキー熟達者レルヒ（オーストリア＝ハンガリー帝国陸軍少佐）のスキー講習受講（明治45年）を支援したりと、熱心に学生を野外へと導いた。乃木の真意は、将来この国を担うであろう皇族・華族の子弟の心身鍛練にあったと目されるが、登山にとっても有益となった。なかでもスキーの導入は、登山にとって対象の季節と地域の拡張を意味した。野外活動の先端にあった学習院旅行部は、大正期に入ると、板倉勝宣や松方三郎などが慶應義塾山岳部との交流を通してスキーや岩登りの技術を磨くことで「大正登山ブーム」の前衛となり、「岩と雪の時代」の登山を牽引することとなった。

ところで、ここで扱う日記を記した木戸幸一は、明治28年に学習院に入学。初等科・中学科・高等科と16年を過ごし、学習院生8名がレルヒからスキー術を受講する前年の44年4月に卒業、同年夏に立山を目指した。上述のように、学習院の登山活動は日本登山界の最先端にあり、木戸は、登山愛好の空気を身近に感じることでできる場に学んだことになる。実際に山へ登る機会もあったであろう。しかし、登山に対する想いが如何ばかりのものであったかを推し量ることは、かなり難しい。なぜなら、木戸の名前は、日本山岳会の会員名簿にも、「山岳」の記事の執筆者一覧にも見えないのである。

### 3. 官僚・華族政治家 木戸幸一

木戸幸一は、明治22年（1889）7月18日、侯爵木戸孝正の長男に生まれた。幸一の父・木戸孝正は、長州藩士・来原良蔵と、木戸孝允の妹・治子の長男で、弟に正二郎がいた。正二郎は木戸孝允の養嗣子となったが、24歳で死去したことから、長男の孝正が木戸家を継承することとなった。

明治44年4月学習院高等科を卒業、同年9月に京都帝大法科大学政治学科に入学。大正4年（1915）にこれを卒業し、同年に農商務省に入省するが、6年、父の死去により28歳にして襲爵、貴族院議員となった。昭和5年（1930）には、近衛文磨・岡部長景ほかの推めで内大臣秘書官長に就任、8年からは宮内省宗秩寮総裁を兼任するが、11年に内大臣秘書官長職を辞して宮内省宗秩寮総裁専任となった。

木戸幸一は、最後の元老西園寺公望の死後、首相指名の最重要人物として、第二次近衛内閣から幣原内閣までの7代6名〈近衛（第二次・第三次）・東条・小磯・鈴木（貫太郎）・東久邇・幣原〉の成立に関わる。第二次世界大戦前夜の動乱の時期、よく内大臣を補佐して西園寺の信任を得、昭和12年に文相として第一次近衛内閣に入閣。以降、13年には厚相を兼任、のち厚相専任。14年には内相として平沼内閣に入閣。15年には、辞任した湯浅倉平のあとをうけて内大臣に就任。敗戦に至るまで国家の枢要にありつづけ、太平洋戦争の開戦時から終結に至るまで天皇の側近として補佐にあたったという。

昭和20年、敗戦によって内大臣府は廃止。木戸は、A級戦犯として逮捕され、巣鴨に収監される。23年には、極東国際軍事裁判（東京裁判）にて終身禁固の判決を受け、服役した。なお、東京裁判では、昭和天皇の戦争責任などに関して、自らの日記などを証拠として提示している。30年、健康上の理由から仮釈放され、33年、減刑による刑期満了によって自由の身となるも政界から退き、52年4月8日に87歳で死去。まさに激動の明治・大正・昭和を、国家の枢要に身を置いて生きた生涯であった。

以上、『国史大事典』・『企画展示 侯爵家のアルバム―孝允から幸一にいたる木戸家写真資料―』・『木戸侯爵家の系譜と伝統―和田昭允談話―』などを参照し、その生涯を概観した。

### 4. 「木戸幸一日記」と「旧侯爵木戸家資料」

ここでは、『国史大事典』と『国立歴史民俗博物館資料目録 [10] 旧侯爵木戸家資料目録』に依拠して、「木戸幸一日記」と「旧侯爵木戸家資料」に関する概要を述べる。

通常「木戸幸一日記」といえば、『国史大事典』によると、「木戸日記研究会（代表者岡義武）編纂刊行、

『木戸幸一日記』上・下、『木戸幸一関係文書』（昭和四十一年（一九六六））、『木戸幸一日記』東京裁判期（同五十五年）の四冊」のことを指す。同事典で当該4冊の内容を見ると、まず『木戸幸一日記 上巻』・『木戸幸一日記 下巻』は「木戸が内大臣秘書官長、宗秩寮総裁、文相、厚相、内相、内大臣として政治上の重要局面にたずさわっていた昭和五―二十年の十六年間のもの」、次に、『木戸幸一関係文書』は「木戸幸一の所蔵する文書の中から政治的に重要な価値をもつものを選択編集したもので、木戸の戦後の回想を含め、公文書・意見書および木戸宛の書翰などを収めている」もの、さらに、『木戸幸一日記 東京裁判期』は「昭和二十年十二月十五日から同二十三年末に至る。おおむね東京裁判の時期の獄中の日記のほか、木戸のために準備された宣誓供述書草稿、獄中および釈放後の各種木戸の談話記録などを収録している」もの、である。このように「木戸幸一日記」とは、「いわゆる昭和の動乱期に、元老や近衛文麿らと密接な関係をもち、特に太平洋戦争期に天皇の側近者であった」者による記録として、わが国の昭和外交史上、重要な資料の一つに位置づけられた日記といえよう。

一方、国立歴史民俗博物館は、木戸孝允、木戸正二郎、木戸孝正、木戸幸一の、木戸家4代を中心とした膨大な資料を収蔵しており、これを「旧侯爵木戸家資料」といい、目録番号にもとづく資料件数は15,171件に及ぶ。この「旧侯爵木戸家資料」は20の項目に分類されており、その分類項目番号3が「木戸幸一日記」であり、その膨大な資料のうち294件が当該項目に分類されている。その概要は同資料目録によれば「少年時代から晩年に至るまでの幸一の日記。また、学習院時代の試験答案用紙など、間に挟まっていた大量のメモ類もある。大判の日記や小型の手帳もある。一部については、『木戸幸一日記』『木戸幸一日記 東京裁判記』として翻刻・刊行されたもの」である。

## 5. 旧侯爵木戸家資料「明治四十四年 當用日記」に見る明治末期の立山登山

今回翻刻を試みる資料は、国立歴史民俗博物館所蔵「旧侯爵木戸家資料」に含まれる「明治四十四年 當用日記」である。上述の『旧侯爵木戸家資料目録』には、資料目録「3 木戸幸一日記」、番号「3-14-1」、表題「明治四十四年 當用日記」、年代「明治44.1～12.」、西暦「1911」、差出人「(木戸幸一)」、受取人[空白]、形態「ペ冊」、数量「1」と記載されており、備考として「明治43年12月博文館発行の「當用日記」にペン書き」とある。凡例によれば、形態の「ペ冊」の「ペ」は「ペンで記されたもの」、「ペ冊」の「冊」は「製本されたもの」を指す。

以下、「明治四十四年 當用日記」の7月17日から7月26日までの10日間について全文を翻刻し、明治44年（1911）の木戸幸一による立山登山旅行についての記述内容を紹介する（7月17日は登山準備。7月18日の夜行列車で新橋駅発、立山登山を経て、7月25日に信州大町の対山館着、26日は記載なし）【図1～5参照】。

### 例言

翻刻は以下による。

- ・資料は、国立歴史民俗博物館発刊『旧侯爵木戸家資料目録』に見える「木戸幸一日記」の「明治四十四年 當用日記」である。詳細は本文参照のこと。
- ・木戸幸一が明治44年に用いた当該「當用日記」は、明治43年12月に博文館が発行した既製品で、1頁に1日分を充てる。
- ・今回の翻刻対象は、「明治四十四年 當用日記」の一部、「二〇六」～「二一五」頁、すなわち明治44年「七月十七日」～「七月二十六日」に記された記録である。当該部分は木戸幸一ほか2名の立山登山行を木戸幸一自身が記録したものである。
- ・1頁の記入欄はすべて罫組。矩形外枠を子持罫で画し、外枠上辺内側に横一列に並ぶ項目見出欄は5欄。



右から、当日曜日〔表罫〕当日干支〔二重罫〕当日月日〔二重罫〕天気記入欄〔表罫〕寒暖記入欄、と並び、欄下底は裏罫にて以下の領域と画される。当日曜日・当日干支・当日月日は活字印刷済、天気欄・寒暖欄は、「天気」・「寒暖」と欄右寄せに縦書活字印刷済で、欄内当該縦書活字左側に天気・寒暖を記入する空白がある。当日曜日・当日干支・当日月日、の3欄の下に日記記入本欄の縦10行が縦表罫にて区画される。天気・寒暖の2欄の下には、短冊形の領域を二重罫で上下に二等分して「発信」(上)・「受信」(下)の通信発受の備忘欄がある。「発信」・「受信」の欄見出語欄は、当該内上端に表罫にて下辺を画される。なお、横書文言は右起こし。

- ・日記の記事本文はすべて万年筆による縦書で、本文欄10行で書ききれない場合は、「発信」・「受信」欄領域にそのまま続けて行取りしている。翻刻では、印刷の都合上、これを横書きに改めた。
- ・翻刻においては、当該資料の各頁写真と翻刻文との対応関係の確認を容易にするため、日記本文表記の1行を、そのまま翻刻でも1行で表現した。
- ・割込み(挿入)や書足しは、本文行に繰り込んだ。割込み指示線・吹出し指示表現などは翻刻から省いた。
- ・取消線・塗抹等による文字抹消部分は、原則として翻刻本文から省いた。
- ・原則として、ㄱ〔コト〕などの合字等は通常の仮名表記に開いた。
- ・標準表記から逸脱した表記、意味の汲みにくい表記、誤記と断定できかねる表記等については「ママ」を振った。
- ・一般的な読みやすさに配慮して、校訂者の判断で、一部の漢字等に振り仮名を附した。
- ・「々々」以外の2字以上の繰り返し記号は、記号を廃し表記の繰り返しとした。
- ・存否の確認できない文字、現代の印刷に用いられる標準的なフォントセットにない文字は、前者については同義と推定される最も形状の近い文字、後者については標準的なフォントセットで扱える同義の文字でこれに代替した。
- ・句読点は、原表記を尊重しつつも、翻刻文章の読みやすさに配慮し、記述内容の構造と文意とにより、また、文章中の空白・筆勢による付点などを勘案し、必要に応じて校訂者がこれを付け直した。
- ・本文には、現在の倫理観・社会通念に照らして不適切と思われる表現も含まれるが、資料の時代性に鑑み、校訂の手を加えなかった。
- ・翻刻は吉井亮一による。翻刻の校訂には松田好史氏のご教示を得た。最終校訂は岡田知己による。

### 5-1 『明治四十四年 當用日記』 7月17日 月曜日 【図1(見開き右頁)参照】

月曜 戊子 七月十七日 天気 曇 寒暖 [記載なし]

御前七時頃起床。小六ト共ニ銀座通りニ買物ニ赴ク。

鍋、コップ、磁石等ヲ求メテ十二時頃帰宅ス。

夜ハ荷造リニ費ス。

十一時就床

#### ○自宅

登山へ出発の前日である。午前中の銀座での買い物は装備品の買い足し、夜の荷造りは、登山装備品を別送するための準備であろう。

木戸幸一は明治44年(1911)4月に学習院高等科を卒業、同年9月に京都帝大に入学している。当時、小学校や旧制中学、師範学校などは4月入学に移行していたが、各帝国大学は9月入学を堅持していた。小六は幸一の弟木戸小六(1890-1952)である。小六は大正8年(1919)に木戸孝允の生家である和田家を継いでいる。兄幸一と同じ明治44年に第一高等学校から東京帝大工科大学に進学、大学院では航空工学を研究、欧米留学を経て、12年東京帝大教授に就任。昭和7年(1932)には東京帝大航空研究所所長、19

年に東京工業大学学長となった（国立歴史民俗博物館「企画展示 侯爵家のアルバム —孝允から幸一に至る木戸家資料写真—」展示解説図録による）。

木戸幸一・小六とも、大学入学前の余暇を利用して立山に登ったものと思われる。

## 5-2 『明治四十四年 當用日記』 7月18日 火曜日 【図1（見開き左頁）参照】

水曜 己丑 七月十八日 天気 曇 寒暖 [記載なし]

午前七時頃起床。荷物ハ午前中ニ送り出セシ故、別ニ用事モナク雑誌等ヲ見テ暮ス。午後三時頃、高橋是孝君来訪。約一時間ニシテ帰ラル。夕食ハ福田房男君モ共ニ一同ニテ会食シ、其レヨリ六時半頃出発ス。一行ハ、小六ト福田氏ト都合三人ナリ。七時前、新橋停車場ニ至リシニ、既ニ乗客ハ各改札口ニ列ヲナシテ集マレル有様ニテ混雑思ヒヤラル。ヤガテ改札始マリシ故、吾等ハ最モ先ノ三等車ノ一隅ニ馳セテ漸ク席ヲ得タリ。石黒九一君モ亦、<sup>ハカラス</sup>不圖モ同車セラレ、吾等米原ニテ乗換フル迄ハ同行シタリ。福田君所持ノ太陽、中央公論等ヲ讀ミシガ、汽車ノ國府津ヲ過グル頃ハ既ニ眠リ、半睡半眠ノ中ニ夜ヲ過シタリ。

### ○自宅発～新橋停車場～夜行列車車中泊

日記の記述から一行は木戸幸一・木戸小六・福田房男の3名と知れる。日記に記述はないが、この日7月18日は木戸幸一の誕生日で、このとき木戸は22歳、9月の京都帝大政治学科への入学が決まっていた。

木戸一行は、新橋から東海道線の列車に乗り、米原に向かった。明治5年（1872）に日本初の鉄道路線として新橋（後の汐留）－横浜（現桜木町）間が開業しており、その後29年には新橋－神戸間の急行列車の運行が開始され、33年には寝台車、34年には食堂車の連結も始まっていた。日記には午後7時前に新橋停車場に到着し三等車に乗車、と記される。「明治四十三年五月／列車時刻表／鐵道院營業課」（明治大正鐵道省列車時刻表 [2]：新人物往来社）には、午後7時30分発神戸行きの急行列車があり、「一二等車連結ナキ列車」「和食堂車ノ連結」等を示す記号が付されている。

午後の来客、高橋是孝は、東京高等工業学校化学科卒、のち英国オックスフォード大学機械科に学ぶ。ボルデイ製鋼所日本支店長を務めた実業家で、26年生まれで当時18歳。父の高橋是清は、明治から昭和時代前期の政治家・政治家で、内閣総理大臣や大蔵大臣をつとめた。

列車に偶然乗り合わせた石黒九一は、貴族院議員石黒五十二の長男で、24年生まれ。学習院高等科から京都帝大に進学、後に三菱電機常務取締役から顧問を歴任した。

## 5-3 『明治四十四年 當用日記』 7月19日 水曜日 【図2（見開き右頁）参照】

水曜 庚寅 七月十九日 天気 晴 寒暖 [記載なし]

午前七時頃、米原ニ着。下車、泊行ニ乗換フ。天気好シ。舞鶴、敦賀辺リ、北海道小樽附近ノ景ニ似タルモノアリ。曾遊ノ地ニ来タリシガ如キ感アリ。小舞子ノ濱ト云フ海水浴場ヲ過グ。海水浴ニハ可成ナランモ、名前ハ甚ダ氣ニ入ラズ。名等ハ却ツテ無クモガナト思フ。午後四時半過、富山ニ着。下車、直チニ町ヲ神通川ノ方ニ向ヒテ行ク。神通川畔ニ神通館ナル旅宿ヲ得テ宿シ、先ヅ荷物ヲ停車場ヨリ取寄セシム。部屋ハ川ニ面シ、遙ニ川ヲ隔テ、立山ヲ望ム等、景ヨケレド襖一重ノ隣リハ普請中ニテ頗ル不安心ナリ。夕食後町ヲ福田君ト散歩シ、乾魚、草鞋等ヲ買求ム。九時就床。

## ○米原着・乗換～富山着～神通館泊

米原で泊行に乗り換え、一路富山を目指した一行は、好天のもと、車窓の景色を楽しんだ。敦賀辺りでは、「曾遊ノ地ニ来タリシガ如キ」と感慨を述べる。この当時、北陸本線は海側に迂回しており、途中の杉津駅からは敦賀湾越しに日本海の眺望が楽しめた。一方、手取川河口近傍の小舞子海水浴場に対してはなかなか手厳しく、「名前ハ甚ダ気ニ入ラズ。名等ハ却ツテ無クモガナト思フ」と記す。歴史ある播磨の「舞子浜」にあやかり、本家に準ずる意味で、「小舞子ノ濱」と称した了見が気に入らぬ、そんな名前を付けるくらいなら、まだない方がよかろう、というわけだ。

富山駅には午後4時半過ぎに着。先述の時刻表には当該列車の富山到着時刻は4時45分と記載される。

明治32年（1899）に婦負郡桜谷村田刈屋に仮の駅である富山停車場が開業している。これは、頻繁に氾濫した神通川の流路改修工事、いわゆる馳越線工事が34年に着工することから、その工事の影響を受けない現在の神通川西岸、現富山市田刈屋に設置されたものである。工事は36年に完成し、41年には、富山線の富山―魚津間が開業すると同時に現在の位置に富山駅が設置され、田刈屋の旧富山駅は廃止された。また、神通川分流計画による新設流路の馳越線が現在の神通川本流へと成長するのは、大正時代に入ってからである。44年当時の富山駅は現在と同じ場所にあり、駅周辺を含め、馳越線（現在の神通川）と当時の神通川本流（現在のいたち川や松川）に挟まれていた。ところで一行は、神通川河畔にある神通館に宿泊したとあるのだが、大正2年に富山ホテルが発行した『富山案内』には、その所在地は七軒町と記載されている。なお日記には、「遙ニ川ヲ隔テ、立山ヲ望ム」とあり、神通川左岸から風景を見たと記されているようにも読めるが、はっきりしない。この点についてはさらなる考証が必要である。また同書には、当時の富山市内の主な旅館として、富山ホテル、富山館、高松屋旅館、舟山館、堀旅館、明治館、井原屋、神通館、堀佐、さわや、北越館などが記されている。

## 5-4 『明治四十四年 當用日記』 7月20日 木曜日 【図2（見開き左頁）参照】

木曜 辛卯 七月二十日 天氣 晴 寒暖 [記載なし]

午前四時半起床。幸ニ天氣ハ晴朗ナリ。荷造リモ出来、旅宿ニ頼ミ置キシ運送ノ車モ来リシ故、五時四十五分出發。富山市ノ、縣廳城跡等目抜ノ場所ヲ通りテ、ヤガテ田舎道ヘト出タ。山麓ノ道ハ何處モ同ジコトダガ田ノ中ノ一本道デ、影トテハ少シモナク、実ニ退屈スル道デアル。然シ幸ニ荷物ノ車引ガ四十年前ニハ東京デ角力デアッタト云フ今年六十一ノ気軽ナ老爺デ、ヨク談ジ、昔話、宮ノ越デ侠客ノ始メタ天下取りニ二百名ノ大名トナツタコトナド面白ク話スノデ、直キニ上瀧ニ着イタ。隧道ヲ「マンブ」クリヌキト云フト教ハツタノモ此老人カラデアル。此辺ノ百姓ノ部落ハ皆樹木所謂防風林ニ嚴重ニ取カコマレト、外カラ見ルト只ノ森カノ様ニ見ヘル。上瀧デハー茶店ニ憩、此處カラ芦峯寺迄ノ人夫ヲ依頼シタ處ガ、数日来ノ雨ノ為メ常願寺川ハ溢レ、橋ヲ流シタル為メ、其方ニ若者ハ皆出向イテ居ツテ無イトノコトナリシガ、ヤガト仲吾ノ頭、取締ト云フ一見魁偉惡相ナル者ガ来タ。之ハ以前ハ東京デ角力ナリシトカニテ、先ツ最初ニ「ワシノ親分ハ之デモ花川戸ニ居リヤスノデ」等ト切出ス所頗ル危険人物ナルガ、漸ク談判纏リテ、一人ナレバ壹円、二人ニテ運ベバ壹円十五銭、トノ約束成立ス。ヨツテ余等ハ直チニ出發、橋梁破損ノ為メ川ノ右岸ヲ迂廻シテ龜岩ニ出デ、十二時半ニ芦峯寺佐伯忠胤氏方ニ着ス。非常ニ快ヨク引見セラレテ種々案内等ノ御世話モ願ヒ、一泊ヲ願フコトトス。休息ノ後、立山本社ニ參拜、御開帳ヲ受ク。立山ハ佐伯有若左エ門ノ息有頼公ノ開カルノ所ニシテ其木像ヲ安置ス。今ハ此處の神ハ手力男神、イザナギ命、二柱ノ神ヲ祀ルト云フ。帰宿後、懇望ニヨリ紀念帳ニ署名シ、案内佐伯平藏トモ米等ニ就イテ相談ノ上、九時頃床ニ就ク。蚊ノ襲来稍々盛ナリ。

### ○神通館発～上滝～芦峯寺着・泉蔵坊泊

午前5時45分に富山市内の宿を出発、上滝で休憩をとり、昼12時半、芦峯寺に到着した。富山市内から芦峯寺雄山神社まで、現在の地図で確認しても富山駅から約25km、徒歩なら約5～6時間はかかる。この当時鉄道は未整備であったが、この後、大正2年（1913）に立山軽便鉄道の滑川—五百石間が開通、さらに10年には立山駅（現在の岩峯寺駅）まで延伸。また、同年には富山県営鉄道の南富山—上滝間が開通し、さらに岩峯寺、横江と延伸している。

一行は上滝で休憩後、芦峯寺までの荷担ぎを依頼した。ところが、大雨で橋が流され、若者はそちらに出払っていて、荷担ぎを引き受ける者がなかなか見つからない。そこへ現れた「一見魁偉悪相ナル」「頗ル危険人物」の「仲吾ノ頭」と交渉することになる。交渉の結果、荷担ぎの代金は、1人なら1円、2人なら1円15銭で決着した。ちなみに、明治41年発行の大井冷光『立山案内』によれば、立山山中で客の道案内と荷担ぎを引き受ける仲語（中語とも。木戸は「仲吾」と記す）を雇った場合、規約により2日間で1人85銭と決まっていたという。41年と44年の物価に大きな変化はなく、上滝～芦峯寺片道と芦峯寺～室堂往復の賃料を比較し、距離・標高差等を勘案すると、引受手が払底した緊急時とはいえ、この賃料は高いと判断されよう。交渉相手は訛りの強い越中方言であろうし、荷担ぎ賃交渉の「談判」は如何なる様相を呈していたか。行程の先を左右しかねない状況下、木戸の胸中は如何ばかり…荷担ぎ確保に安堵したであろうか。

上述の『立山案内』をはじめ、当時の登山案内によれば、富山市内からの一般的な立山登山の道は、上滝まで到達した後、棧橋（新川橋）を渡り岩峯寺村へ行き、そこから常願寺川右岸を進むというものであった。しかし上述の通り、このときは大雨で橋梁が破損して岩峯寺側へ渡ることができなかつたため、一行はしばらく左岸を進み、亀岩あたりを対岸に渡り、芦峯寺に向かったものと推定される。なお、日記中の「川ノ右岸ヲ迂廻シテ」は、右岸を迂廻するために左岸を進んだ、の趣旨と読み取れよう。

芦峯寺での宿泊先佐伯忠胤宅は、近世芦峯寺の宿坊の一つ、泉蔵坊である。日記に「紀念帳ニ署名ス」と記された通り、「泉蔵坊宿泊帖」には、木戸幸一と同行の木戸小六、福田房男の署名がある（「明治四拾四年七月廿一日登山／東京市赤坂區新坂町六拾貳番／侯爵木戸孝正長男／木戸幸一」・「全／全／木戸小六」・「明治四十四年廿一日登山／東京小石川區原町七六／福田房男」）。【図6・7参照】。

芦峯寺雄山神社の本殿は廃仏毀釈によって失われた後なので、一行が参拝した「立山本社」は現在の祈願殿と推察される。ここで一行は御開帳を受けたが、それは日記中の「其木像」か否かは判らないが、現在、国指定重要文化財の慈興上人座像を指すのかもしれない。

木戸は「案内佐伯平蔵トモ米等ニ就イテ相談ノ上」床につく。木戸は翌日からの山旅に思いを馳せたであろう。日記中にこの後たびたび名前出てくる佐伯平蔵は、芦峯寺を代表する山案内人で、この時33歳。明治42年に辻本満丸を薬師岳に案内し、これを契機に山案内を本業にしたといわれる。大正10年の立山案内人組合発足時には初代組合長を務め、優秀なガイドを育成した。

### 5-5 『明治四十四年 當用日記』 7月21日 金曜日 【図3（見開き右頁）参照】

金曜 壬辰 七月二十一日 天氣 晴 寒暖 [記載なし]

午前四時十五分起床。大分寐過シタリ。午前五時二十分頃漸ク出発ス。天氣晴朗朝

露深キ叢中ノ小徑ヲタドル。心モ輕ク身モ輕シ。午前六時半ニ至ツテ約一里

半ナル釣橋ニ達ス。常願寺川ハ濁流逆卷キ物凄キ有様ナルガ、之ハ眞川ノ方ノ崖崩

レニヨルモノニシテ、聖明川ノ水ハ清冷攪スベシ。釣橋ハ荒ノ為メニ破壊セシ故、不得止針金ノ上ヲ一人々々

ニ傳リ、約三十分ヲ要シテ漸ク渡リ了リ。其レヨリ材木ヲ作レル小舎ニテ小憩後再ビ出発、之ヨリ愈々

山路トナル。石ノミ多キ峻坂ヲ上ル。此處ハ材木坂ト云フ由ニテ、之ニハ面白キ傳説アリ。昔シ有頼公ノ開山

セラレシ時ニ其乳母ガ登山セントシテ此處に至リ倒木ヲマタギシニ皆石ト變ゼシト云フ。蓋シ当時ハ女人禁制ナ

リシ故ナリ。八時頃坂上ニ着、小憩。熊野權現窟ニ午前八時四十五分着。スケッチヲナシ等シテ休ム。有頼

公開山ノ際、熊トナリテ登ラレントキニ憩ハレシ窟ナリト云フ。植物等ヲ手ニ觸ルハニマカセテ採集ス。面白キモノ多シ。十時頃ブナノ森林中ノ水溜ニ憩ヒテ準備ノムスビヲ食ス。聖明瀧ヲ霧ノ間ニ見ル。十二時頃稍々落葉松等ノマバトナリシ阿弥陀原ニ入りテ休ム。此頃ヨリ天候面白カラズ。霧ノ飛ブト急ナリ。三時頃ヨリハ雨降り出デ、中々ニ烈シ。四時、雨ヲ突イテ追分ニ着ク。此處ハ室堂ト温泉ヘノ分岐点ナリ。今ハ只茶屋ノアリシ名残ヲ止ムルニ過ギズ。折リカラ霧ハ四方ノ山ヲ包ミタレバ限リモシラヌ所謂浩浩乎イハユルコウコウタル原野ニ居ルガ如シ。先ヅ此地ヲ露當地ト定メ、雨中ニ、或リハ木ヲ斬ルアリ、或ハテントヲ張ルアリテ、漸ク、サハ、ハンノキ、白樺等ヲ下ニ敷キテ其上ニ呉葎ヲ敷ク。之ハ晝間ハ日除ケ、雨具トセシモノナリ。斯クシテ出来上リシ故、草鞋ヲヌギテ横ハル。其心地ノヨキコト金殿玉楼ニ住スルノ比ニアラズ。ブリキノ(石油)罐ニテ飯モ出来、トンポー(鱒)ノ乾魚ニ舌鼓ヲ打チシ後、怪談等ヲナシテ愉快ニ過シ、九時頃眠ル。雨ハ山中ノ常トシテ時ニ沛然トシテ来ル。標高五千二百尺、天幕内ノ温度六十九度。

### ○芦峯寺・泉蔵坊発～藤橋～追分着・幕営地テント泊

午前4時15分起床、5時20分頃出発、「釣橋」(藤橋)に6時半に到着する。この附近で真川と称名川が合流して常願寺川となる。日記によれば、常願寺川は「濁流逆巻キ物凄キ有様」だが、それは「真川ノ方ノ崖崩レ」が原因で、大雨でもなお「聖明川ノ水ハ清冷攪スベシ」の状態に澄んでいたことが判る。なお「聖明川」・「聖明瀧」は、現在の表記では「称名川」・「称名滝」となる。日記にはまた、橋が破損していたためやむを得ず「針金ノ上ヲ一人々々」伝って渡らなければならず、渡り終えるのに30分かかったことが記される。この藤橋は、大正期に木橋が架けられるまでは、猿が藤蔓を結んで架けたという伝説のごとく、一人渡るのがやっとの粗末な吊橋だったようだ。渡り終えたところの「材木ヲ作レル小舎」で休憩と記される。当時、称名川左岸(現在の千寿ヶ原附近)には製材所があったという。

この日の日記にはスケッチと植物採集のことが記されている。7月25日の日記には写真撮影のことも記されており、一行の登山は、ひたすらに山を登り頂上を目指すようなものではなく、教養趣味を伴って行程をも楽しむものであったことが窺える。

材木坂上に8時頃、「熊野権現窟」(熊王権現か)に8時45分、ブナの森に10時頃、「阿弥陀原」(現在の弥陀ヶ原か)12時頃到着、午後3時頃から雨が降り出し、4時に追分に到着している。芦峯寺から追分まで休憩時間を含めて11時間を要している。当時11時間あれば芦峯寺から室堂に到達できたと言われ、かなりゆっくりとした登山といえよう。

雨天の幕営を、木戸は「其心地ノヨキコト金殿玉楼ニ住スルノ比ニアラズ」、「怪談等ヲナシテ愉快ニ過シ」、「雨ハ山中ノ常トシテ時ニ沛然トシテ来ル」と記す。ここには不都合・不愉快な事態への言及は一切なく、慣れているのか、概して不便の多いはずの雨中のテント泊を、木戸は大いに楽しんだようだ。

## 5-6 『明治四十四年 當用日記』 7月22日 土曜日 【図3(見開き左頁)参照】

土曜 癸巳 七月二十二日 天氣 [記載なし] 寒暖 [記載なし]  
 午前五時半起床。温度天幕内華氏六十四度。午前七時、雨中ニ天幕ヲタミ終リテ出発ス。殆ド河原ヲ行クガ如キ石ノ多キ道ナリ。霧晴レズ時々雨降ル。途中植物採集ヲナシツ、午前十一時ニハ室堂ニ着ス。雄山ヲ前ニシ浄土山ヲ右ニス。此附近雪多シ。恰モ天候幾分快復シテ時々日ヲ見ル。雄山、浄土山等晴渡リタリ。室堂ニ入り、爐ノ一隅ノカヘモアル如キ四本ノ柱ノ間ニムシロヲ立テ、一割ヲツクリテ座敷トシ、下ニハ呉葎ヲ敷ク。休憩晝食ノ後、神官ノ山開キニ上ルト云フニ從ヒテ本社ノアル雄山ニ登ル。諸々ニ雪多シ。本社迄ニハ身ヲ淨メ給フ神ノ社アリ。一ノ越ヨリ五ノ越迄ノ小祠アリテ後ニ本社アリ。道嶮ニシテ磊々タル石ノミナリ。頂上ニ至リ、本社ニハ石ヲ積メアル(耐風ノ為メ)ヲ取りノゾク迄待ツ。丁度、後立山連峰ノ方面晴レテ雄姿ヲ雲間ニ現ハス。白馬、

針木峠、黒部川等、指スベク壯觀ナリ。約四十分ノ後準備出来シ故、神社前白洲ニ座シテ開扉式ニ列ス。神官ノ祝詞、神社ノ沿革ノ話アリ、終リニ寄附金ノコトヲ神社ノ床上ヨリ白洲ニ座ラセテ置イテノ御說法ニハ聊カ恐縮シタ。六時半頃下山ス。途中雲間ニ信州飛驒ノ境ナル槍ヶ岳ヲ望ム。其形眞ニ其名ニソムカズ。歸途ハ雪ノ上ニ與塵ヲ引キテ氷リ滑等シテ下山ス。八時半頃眠ル。

#### ○追分幕當地発～室堂着／室堂発～雄山神社峰本社往復～室堂泊

『立山案内』など当時の登山案内書に記されている通り、追分から登山道は3方向に分かれる。室堂に向かって右の道は、立山温泉へ通じ、中央は室堂へ直行（『立山案内』にいう「姥懐なる石径」、左は二ノ谷や一ノ谷、獅子ヶ鼻などを經由して室堂へ通じる険しい登山道である。木戸一行は、午前7時に出発し、まさに中央の「殆ド河原ヲ行クガ如キ石ノ多キ道」を進み、午前11時に室堂に到着した。日記には「神官ノ山開キニ上ルト云フニ従ヒテ本社ノアル雄山ニ登ル」と記される。この年は、7月25日が立山の山開きで、それに先立ち23日には奉幣使として本間富山県事務官が出発した、と当時の新聞『富山日報』などが伝えている。日記に見える神官は、山開きの準備に登ったものであろう。

室堂から一ノ越に向かう途中の「身ヲ淨メ給フ神ノ社」は祓堂であろう。また、「本社ニハ石ヲ積メアル（耐風ノ為メ）ヲ取りノゾク迄待ツ」と記されるのは、冬の間、峰本社正面三間に大きな石を充填し、風雪に備えていた様子を描いたものと思われる。厳しい冬に備えるため峰本社では冬支度に石を充填していたことがわかる。その石を取り除く間に晴れ間が現れ、木戸一行は初めて山上の大観を目の当たりにした。「丁度、後立山連峰ノ方面晴レテ雄姿ヲ雲間ニ現ハス。白馬、針木峠、黒部川等、指スベク壯觀ナリ」の文言には、これを堪能する木戸の感慨が見て取れる。

そしてこのあとに、興味深い記述が続く。「神社前白洲ニ座シテ開扉式ニ列ス。神官ノ祝詞、神社ノ沿革ノ話アリ、終リニ寄附金ノコトヲ神社ノ床上ヨリ白洲ニ座ラセテ置イテノ御說法ニハ聊カ恐縮シタ」。文末の「聊カ恐縮シタ」という表現は、若干の驚きと皮肉を含んでいるように見える。この出来事は、華族の子弟達にとっては、いささか面食らう事態であったことだろう。

### 5-7 『明治四十四年 當用日記』 7月23日 日曜日 【図4（見開き右頁）参照】

日曜 甲午 七月二十三日 天氣 雨 寒暖 [記載なし]  
午前五時半起床。相憎雨ナリ。出発カ中止カ決セズ九時頃漸ク準備ナル。吾等ハ、先ヅ平蔵ヲ伴ヒテ地獄谷ヲ見物ス。火山ニハ何處ニモアレド此處ノハ中々壯觀ナリ。試ニ石ヲ投ズレバ忽チ跳上グ。室堂ニ歸リタル頃ニハ風サヘ少シ加リ、雄山ノ辺リハ雲霧一去一來暫クモ低止セズ險惡ノ徴アリ。人夫モ躊躇ノ様ナリシガ意ヲ決シテ出発ス。十時ナリ。一ノ越ヲ越、ソレヨリハ道ナキ所ヲ雄山沢ニ向ヒテ眞直ニ下ル。雪多ク渡ルコト五六回、皆厚ハ一間ニモ餘リ、下ハ谷川ナリ。膝位迄入りテ徒渉スルコト数回、フト雪ノ一角ヲ廻レバ遙カ下ニ天幕ヲ張レルモノアリ。如斯キ人里離レシ所ニハ心得ガタキ所故、不審ニ思ヒテ至リシニ、三枝威之介、加藤氏ノ一行ナリ。前日ノ礼ヲ述べ、暫時小憩、用意ノムスビヲ食シテ談話ヲ交換シテ一時半頃別レテ出発ス。其レヨリ直チニ右折シテ無名沢ヲ上ルコト小時、雑木林ノ鬱茂タル中ニ入ル。天候回復セズ白樺等ノ所セマキ迄ハビコレル中ヲ行ク。漸ク頂上ニ達セシガ再び同様ノ場所ヲ下ルニ、下リハ上リヨリハ一層困難ナリ。中之沢（谷）ニ下リシ頃、夕立ノ沛然トシテ至リ、一同濡鼠ノ如クニナレリ。河原ヲ溯ルコト数町、カリヤス峠ノ旧道ニ出デ何ナク越ス。將ニ失ハレントスルー小徑に過ギザレド河原ノミヲ過ギ来タリシ身ニハ都大路ヲ行クニモマシテ心嬉ノシ。午後六時十分頃、漸ク平蔵ト共ニ遠山品右エ門氏ノ所謂平ノ小屋ニ着ス。他ノ連中ハ道ヲ誤リテ木挽小舎ノ方ニ至リシ故、半頃ニ漸ク着シタリ。爐ヲ囲ミテ四方山ノ話ヲナシテ十時頃漸ク眠リニ就ク。

○室堂～地獄谷往復～室堂発～一ノ越～御山谷～イタヤ峠～中ノ谷～刈安峠～平ノ小屋着・泊

この日は生憎の雨だったが、一行は9時頃に平蔵の案内で地獄谷を見物、その後、天気を心配しつつ10時に室堂を出発し、一ノ越へと向かった。一ノ越からは雄山沢（現在の御山谷）を真っ直ぐ下っている。その時、はるか下に天幕を発見した。日記には、天幕で野営していたのは、「三枝威之介、加藤氏ノ一行ナリ」と記されている。なお、三枝威之介は、日本近代登山史上の重要人物である。この時の立山登山については、明治44年（1911）11月発行の「山岳」第6年第3号の会員登山報に以下のように記載されている。

○三枝威之介、加賀正太郎氏兩氏は七月中旬信州大町より針木峠に登り針木岳頂を極め平の小舎に下り御山澤より一ノ越を経て立山室堂に至り雄山別山に登り續いて劔ヶ岳を極めんとせられしも天候の不良は素志を達せしめず三枝氏は室堂より富山を経て歸京せらる…

「泉蔵坊宿泊帖」には、木戸一行の名前に続いて「明治四十四年七月廿六日下山／日本山岳會幹事／東京市牛込區早稲田大学前／三枝威之介」とあり、三枝が室堂から富山を経て歸京する際に泉蔵坊に宿泊したと判る。

三枝と別れた木戸一行は、「其レヨリ直チニ右折シテ無名沢ヲ上」り、「漸ク頂上ニ達セシガ再び同様ノ場所ヲ下ル」と、峠を越えたことを記す。この峠はイタヤ峠といい、冠松次郎『立山群峯』付録「立山附近略圖」などにその名が見える。

木戸一行は、夕立で濡れ鼠のようになりながらも、「カリヤス峠ノ旧道」を通り、平の小屋へ向かった。木戸幸一は佐伯平蔵とともに午後6時10分頃平ノ小屋に到着。他の2人は道を間違え遅れたが、6時30分に到着している。この旧道は、いわゆる信越連帯新道（立山新道、越信連帯新道、針ノ木新道とも称された）である。明治初期に開削された、原村（現富山市）－立山温泉－ザラ峠－針ノ木峠－野口村（現大町市）を結ぶ有料道路で、わずか数年で廃道同然となり営業を終了した。広瀬誠『立山のいぶき』によれば、明治15年に廃道になったという。26年にはウォルター・ウェストンらが町からこの旧道をたどり、立山登山を行うなど、旧道の一部は廃道後も利用された。

この日一行は、「遠山品右エ門氏ノ所謂平ノ小屋」に泊まった。遠山は釣師を生業とした人物で、この時60歳。明治の初め頃に釣りや猟のために小屋を建て、その後登山者を泊めたり、食料を販売したり、道案内をするなどしていた。登山者には未知の黒部川上流域に精通して多くの登山者に影響を与えた。明治11年にはイギリスの外交官アーネスト・サトウが、42年には日本山岳会の辻本満丸がこの小屋に宿泊している。

## 5-8 『明治四十四年 當用日記』 7月24日 月曜日 【図4（見開き左頁）参照】

月曜 乙未 七月二十四日 天氣 晴 寒暖 [記載なし]

午前四時半目覚ム。今日ハ漸ク天氣快復ニテ青空ヲ見セ心地ヨシ。顔ハ黒部川ニ出デ、洗フ。昨日ハ夕暮ナリシ故、充分見物セザリシガ、水ハ清冷ナルコト如何ニモ日本アルプスノ精ヲ抜キテ流ルハカノ心地ス。流レ中々早ク河幅廣ケレバ徒涉ハ到底不可能ナリ。幸ニ、品右エ門氏手製ノ籠ノ渡アリシヲ以テ、其破損セル綱等ヲ持參ノ綱ニ代ヘテ渡ルコトトシ、平蔵、好藏、之ニ従事シ、春藏ハ握飯ヲ作ル。九時半、対岸ニ渡リ、荷物ノ整理等万端準備整ヒテ針木沢ニ向ヒシ八十時ナリキ。品右エ門氏ニハ此處ニテ別ル。針木沢ハ、沢トハ云ヒナガラ谿流ノ幅モ廣ク且ツ急流ナレバ徒涉中々困難ニテ膝腰位迄ツカリテ渡ルコト十数回ニシテ、晝頃ニハ少シハ河モ狭クナリ、時ニハ河ヲ離レテ上ニ旧道ノ遺跡ヲタドルコトモアリ。斯クテ幾多ノ困難ノ後、愈々針木峠ニ入ル沢ノ分岐点ニ至ル。此處ニハ木ノ皮ヲ剥ギテ針木峠ノ道ト墨痕鮮ニ記シアリ。日本山岳會員トナセル所、多分三枝氏一行ノ書カレシモノナラント心ノ中ニ感謝ス。午後六時、急坂ヲ攀ジテ頂上ニ着ス。北側ハ一面ノ雪ニテ急峻ナリ。祖父岳等前面ニソビエテ絶景ナリ。早速天幕ヲ張ル。非常ニ寒冷ニシテ作業中モガタガタフル程ナリ。漸ク準備整ヒテ天幕内ニ横ハリシヲ、水ハナケレバ雪ヲ溶カスベキ石油罐ニ穴ノアキシトカニテ水モ得ラズ、飯モ出来ズト云フ始末。人夫供ハコーナルト不

平ヲ云ヒテ手ガツケラレズ大ニ面倒ナリシガ、携帯ノ小鍋ニテ半ニへ飯ヲ作りテ、ドーナカ腹ヲコシラ<sup>(ママ)</sup>レヘ、九時頃眠ル。寒シ。

#### ○平ノ小屋発～黒部川横断～針ノ木沢～針ノ木峠着・幕営地テント泊

この朝、漸く天候が快復して青空を望んだ。「青空ヲ見セ心地ヨシ。顔ハ黒部川ニ出デ、洗フ」と書く木戸は、ここにて漸く愁眉を開き、爽快の感を満喫したのであろう。

この日の記述に初めて、平蔵以外の案内人に、「春蔵」と「好蔵」が登場する。春蔵は平蔵の弟で、この時28歳。大正2年（1913）、木暮理太郎、田部重治、中村清太郎を宇治長次郎と劔岳別山尾根に案内するなど、芦峯寺を代表する山案内人である。好蔵については資料がなく一切が不明である。

「針木峠ニ入ル沢ノ分岐点」では、「針木峠ノ道」と墨書された鮮やかな文字を木戸は見ている。信州大町から針ノ木峠を越えてきた三枝一行が書いたものと思い、「心ノ中ニ感謝ス。」と日記に記している。峠の頂上には午後6時に到着し、天幕を張った。日記に「北側ハ一面ノ雪キニテ急峻ナリ」とあるが、日本三大雪渓の一つ針ノ木大雪渓であろう。また、「祖父岳」は爺ヶ岳と推察される。

幸先の良かったこの日だが、幕営地の夕餉支度で悶着が起きた。峠に雪はあるが水はない。ところが、雪を溶かす「石油罐」に穴が開いて水は得られず、「飯モ出来ズト云フ始末。人夫供ハコーナルト不平ヲ云ヒテ手ガツケラレズ大ニ面倒ナリシ」という事態。携行した小鍋で半煮えの飯を炊き、木戸はこの難局を凌ぐ。山案内人と荷担ぎへの食事の充当は、彼らには賃金に準じて重要で、一つ間違えると大ごとになりかねない状況だったといえる。小鍋を自ら携行していたのは何らかの経験によるものか、木戸は小鍋一つで場を収めたわけである。

#### 5-9 『明治四十四年 當用日記』 7月25日 火曜日 【図5（見開き右頁）参照】

火曜 丙申 七月二十五日 天氣 晴 寒暖 [記載なし]

午前四時半目醒ム。一天晴渡リテ一点ノ雲モナシ。直チニ峠ノ上ニ登ル。峯々谷々皆曇ヲ收メテ陽陰劃然ト些ノ不明瞭ナル所ナク、日本アルプスノ全景、面前ニ展開セリ。雄大莊嚴、述ブルニ語ナシ。思ハズ快哉ヲ叫ブ。槍ヶ岳ハ著シク其特長ヲアラハシテ一目ニソレト著ク、遠ク白峰山脈ト甲斐駒ヶ岳ノ山脈トノ中間漠々タル雲間ニ富士ハ宛然チココヲ俯セタル如クニ聳ヘタリ。何處ヨリ見テモ富士ハ圓滿ナル秀嶺ナリ。半煮飯ニテ朝食ヲ済シ、寫眞ノ撮影等シテ天幕ヲタ、ミ、七時カンザキヲ足底ニ附シテ下山ノ途ニ就ク。雪谿甚ダ急峻ナリ。全ク雪ノ盡クル所迄ハ約一里約一時間ヲ要シタリ。ソレヨリ籠川谷ヲ、或ハ左岸ヲ或右岸ヲ數回渡シテ下ル。後ヲ振り返ヘレバ既ニ針木峠ハ背後ニ屏風ノ如クソビエ、今迄其頂上ニアリシコトノ寧ロ不思議ナルガ如シ。益々下ルニツレ、氣候ハ暑氣ヲ加フ。十二時ニ至リ山ノ神ノ手前ニテ晝食ス。此辺ヨリ下ハ大分切り開カレタル所モアリ、道ラシキモノヲ認ム。途上一学生ノ立山指シテ行クニ會ス。何等縁モユカリモナキモノナレド吾等ノ通路ヲ行クカト思ヘバ何トナク他人ノ如キ感ナシ。彼方モ亦然カ思ヒシカ、無言ノ儘一礼シテ別ル。三時頃野口村ニ着シ、村社ニテ休息シ、四時半頃ニハ大町ニ入ル。甚ダ暑シ。先ヅ氷屋ニ入りテ氷ヲ飲ム。今朝迄ハ雪ハ見飽キテ口ニダニセザリシモノヲ、今トナリテハ何トナク口惜ク思フモ可笑シ。対山館ニ入ル。草鞋ヲヌギ居リシニ、二階ヨリ降り来ル人アリ。見レバ黒木清君ナリ。互ニ久濶ヲ叙シ、奇遇ヲ喜ブ。二<sup>(ママ)</sup>回ニハ、三次君、高橋是孝君、高木八尺君モアリ。四君ハ白馬岳ノ帰途、今日二時頃着、一泊セラルハナリト。互ニ往復シテ御互ノ經驗談等シテ、愉快ニ暮シタリ。十時頃寐ル。

#### ○針ノ木峠幕営地発～針ノ木雪渓～籠川谷～山ノ神～野口村～大町対山館着・泊

この日は、行程中初めて「一点ノ雲モナシ」の大快晴であった。木戸は午前4時半に目覚め、「直チニ峠ノ上ニ登」って大パノラマを眼前に堪能する。「雄大莊嚴、述ブルニ語ナシ。思ハズ快哉ヲ叫ブ」と記す木戸は、この山旅最大の感動に浸ったであろう。そして遙かに富士を望み、「何處ヨリ見テモ富士ハ圓滿ナル



秀嶺ナリ」と称える。木戸は日本人のアイデンティティを意識したのかもしれない。

木戸はこの日、針ノ木峠から槍ヶ岳や「白峰山脈ト甲斐駒ヶ岳ノ山脈」、その間に「富士」を、前日には、爺ヶ岳を確認している。22日には立山雄山山頂から「白馬、針木峠」を遠望する記述もある。木戸一行は、一部に誤認もあるようだが、山座を特定できる知識をある程度持っていたことが判る。一目瞭然の特徴的山稜・山頂は別として、山座同定は初心者にとっては必ずしも容易でないことから、一行の中には、以前から北アルプスに登り、幾度か山岳展望を経験した者がいた、と見るのが妥当であろう。

天幕をたたみ午前7時に出発、12時に「山ノ神」手前で昼食、午後3時野口村、午後4時半頃大町に入った。途中立山を目指す単独行かと思われる見知らぬ学生とすれ違う。そして「吾等ノ通路ヲ行クカト思ヘバ何トナク他人ノ如キ感ナシ。彼方モ亦然カ思ヒシカ、無言ノ儘一礼シテ別ル」と交感の情を日記に綴った。

大町での宿泊先・対山館は百瀬家が経営していた旅館で、明治30年代後半から登山者の定宿として有名であった。大町を訪れた多くの軍人や外国人、学生、文化人らの登山を支えた旅館であり、大正から昭和初期には山岳愛好家の著名人が集うサロンとなるが、44年当時は、百瀬金吾が経営していた。なお、息子の百瀬慎太郎は、後に、日本初の登山案内者組合「大町登山案内者組合」を結成するが（大正6年（1917））、この時はまだ18歳であった。

木戸一行は、対山館で黒木三次、黒木清、高橋是孝、高木八尺の4名と偶然にも同宿となり、お互いの登山の話をしながらか楽しく過ごした。高橋是孝とは奇しくも立山登山行出発日に面会しているが、日記に「奇遇ヲ喜ブ」とあるように、待ち合わせていたわけではないようだ。

黒木一行の登山行については、前掲の「山岳」第6年第3号、会員登山報に次の記載が見える。

○黒木三次氏は同行數氏と白馬岳へ登り、次で中房温泉より燕岳、大天井岳、常念岳に登り二股に下り、赤澤より槍ヶ岳に登山、上高地に出で、尚ほ八ヶ岳に登山せられたり。

日時に言及がなく確証はないが、登山報の「黒木三次氏」と「同行數氏」は、「白馬岳ノ帰途」対山館に宿泊の上記4名で、この後、中房温泉から再び入山して諸峰を目指す途上なのは、ほぼ間違いのないであろう。

黒木三次は、陸軍大将黒木為禎伯爵の長男で、のちに伯爵、貴族院議員となる。当時は東京帝大法科大学の学生で、同年9月に日本山岳会に入会している。黒木清は、三次の弟で、大正4年に黒田清仲（内閣総理大臣黒田清隆の子）の養子となり、伯爵、貴族院議員となる。当時18歳であった。日本山岳会の会員名簿には同年9月入会の黒田清の名が見えるが同一人物かは不明である。高橋是孝については前述の通り。高木八尺は、一高から東京帝大法科大学に進み、のちに東京帝大教授、貴族院議員となる。彼らはいずれも、夏休み及び9月の大学入学前の余暇を利用し、登山したものと考えられる。

## 5-10 『明治四十四年 當用日記』 7月26日 水曜日 【図5（見開き左頁）参照】

水曜 丁酉 七月二十六日 天氣 晴 寒暖 [記載なし]

[本文記述欄空白]

○前日の対山館泊以降の行程は不明

7月26日は、天気欄に「晴」とのみ記される以外は空白である。

以上が、木戸幸一日記に見る明治44年（1911）7月17日から7月26日までの立山登山の記録である。

## むすび

芦峯寺旧宿坊家、泉蔵坊の宿帳「泉蔵坊宿泊帖」には、明治17年（1884）8月16日の清国北京公使館の穴戸璣（宿泊帖では穴戸璣）から昭和9年（1934）7月11日の中村清太郎まで、50年にわたって宿泊者の名前が記されている。年代順に掲げると、李家隆介（富山県知事）、辻本満丸、吉田孫四郎、大町桂月、生田信、

河合良成、匹田鋭吉（富山日報主筆）、林並木、ウエストン、石崎光瑠、スマイス、ドント、近藤茂吉など、文人墨客・教育者・研究者、また外国人と、様々な人々の名が記されている。ただ、一部のいわゆる著名な登山家を除いて、彼らの立山登山の内容が知られる資料の類は確認されていない。そのようななかで木戸の立山登山の日記記録は意味を持つ。

木戸の名前は、日本山岳会の会員名簿にも、「山岳」の記事の執筆者一覧にも見えない。熱心な登山愛好家だったとは必ずしも言えないだろう。近代登山を受容した上流社会・知識階級に属する当時の学生の間に行われていた登山を、余暇活動の一つとして木戸も実践したのではないだろうか。

この、木戸による立山登山の記録が日記（旧侯爵木戸家資料「明治四十四年 當用日記」）に確認されたことにより、立山・黒部領域の近現代登山史に新たな資料が一つ加わったことになる。

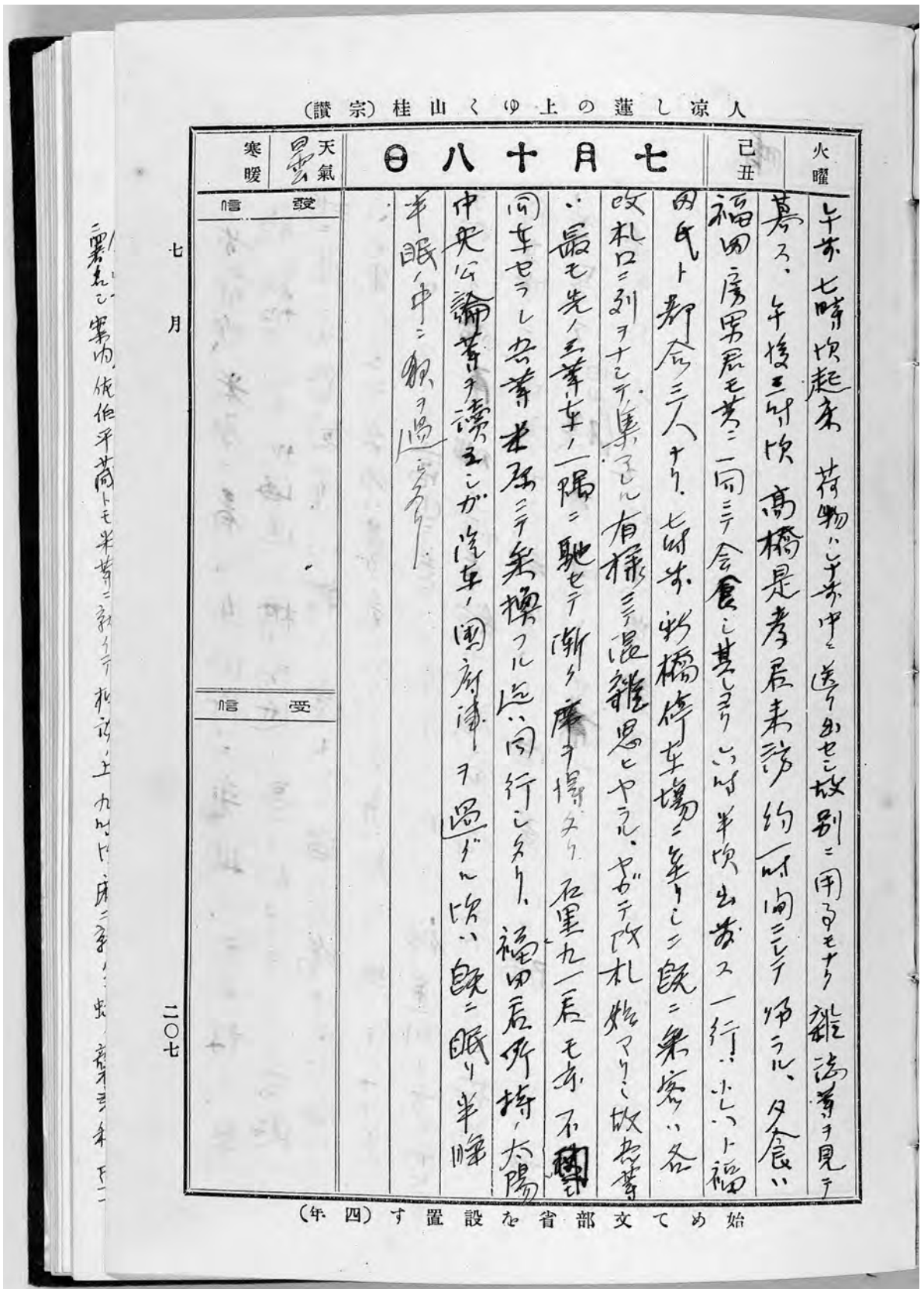
明治末のこの時代、本格的登山家ではない者が残した、立山登山の詳細な記録は類例が少ない。当該日記には、明治末期の立山の登山状況、鉄道などの交通事情、治水状況、さらには当時の富山市街地の様子などを窺い知る上で有用な情報が記されており、明治末期の富山の地理・社会状況の理解に新たな手掛かりを与えらるゝとになり、特に、「大正登山ブーム」前夜の登山をめぐる状況の理解に寄与するものともなるであろう。また、これらの記述は日記を記した者の興味・関心、感銘、印象など、旅行者の眼差しを示すものでもあり、木戸の心情を読み解く手掛かりとなろう。

本稿では、木戸幸一の立山登山の記録について述べてきた。今回は、日記記述の事実関係を把握し、史実と照らし合わせながら、内容を整理することを主体としたが、今後、より多くの関連資料を参照しながら、木戸幸一という若者を立山登山に向かわせたものは何だったのか、さらに深く読み解き、より深く分析したいと考えている。

#### 【図について】

「国立歴史民俗博物館所蔵 旧侯爵木戸家資料 明治四十四年 當用日記」の図1～5は、次頁以降に各図を見開き2頁にわたって掲載する。

7月18日



二畧表ニ案内、佐伯平高トモ半葉ニ新イテ 折紙、上九ハト、月ニ至リ、虫、意ナキキ、下ニ

七 月

二〇七

図1 旧侯爵木戸家資料 明治四十四年 當用日記 (国立歴史民俗博物館所蔵)

7月17日

(彦道) 屋茶腐豆るたれ飽に世やく咲歡合

寒 暖	天 氣	日 七 十 月 七				戊 子	月 曜
信	受					十 百 就 床	七 月
信	受					鍋、コソフ、磁石等ヲホ ナテ十ニ付坂路宅 ノ 銀座通リニ買物ニ赴ク	二 〇 六

(年元) すと京東め改を戸江

7月20日

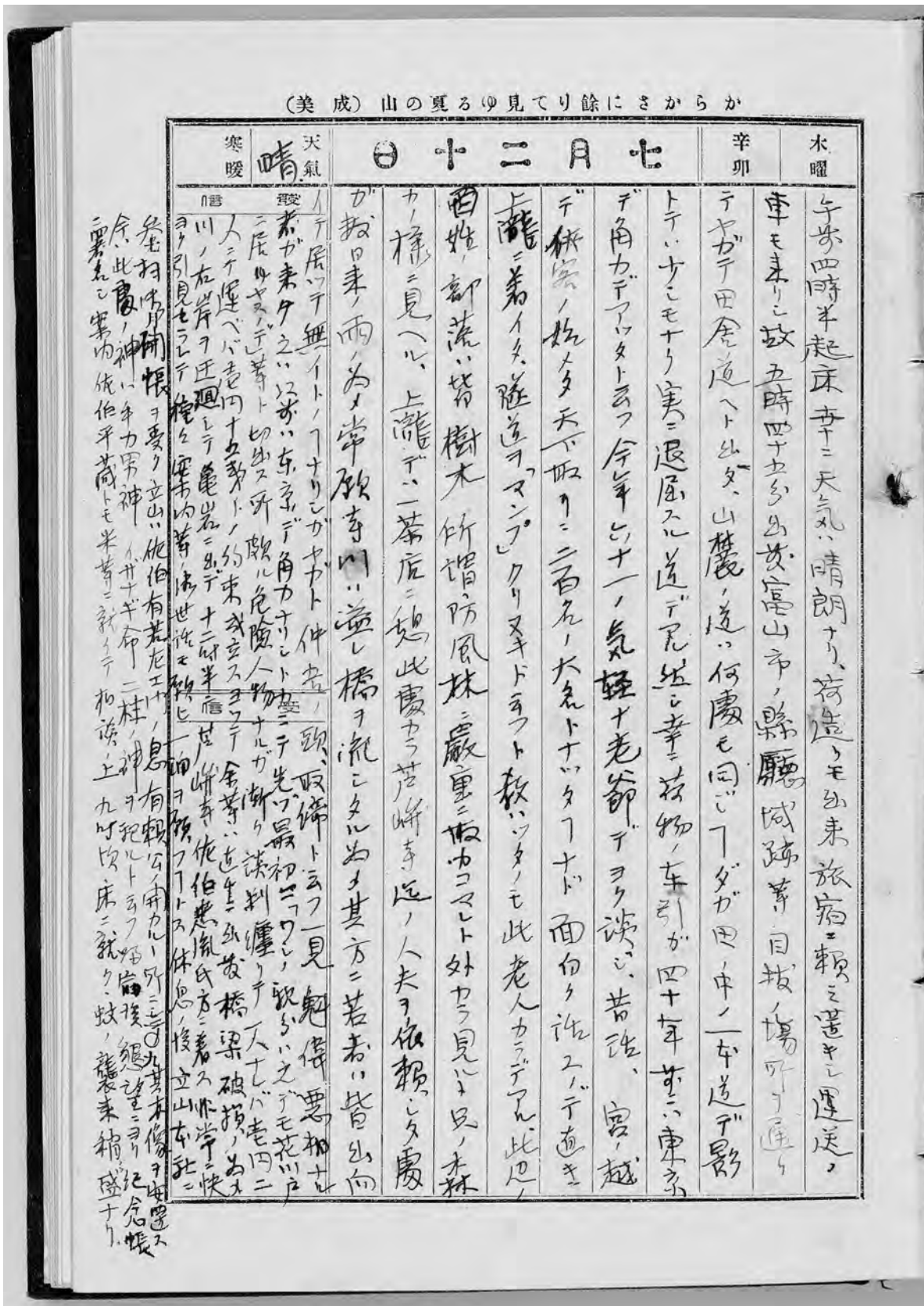


図2 旧侯爵木戸家資料 明治四十四年 當用日記 (国立歴史民俗博物館所蔵)

7月19日

(外宗) 雨の月脊ふ洗を馬汗や糞犬

寒暖	天気	庚寅	水曜
信	晴	日 九 十 月 七	
信	受	午後七時、米原に着。下車泊行。免換。天気好し、舞 鶴、敦賀のり、北海道小樽附近ノ景、似たりモ、アリ曾遊ノ 地ニまじりしが如キ感アリ。小舞子ノ演ト云フ海水浴場ヲ過グ海氷浴 二の米ナラシモ名ホ、甚ダ氣ニ入ラズ名ホ、却ツテ無クモガナト思フ。 午後四時半、過富山ニ着。下車直チニ町ヲ神道川ノ方ニ向ヒ テ行ク神道川畔ニ神道館ナル施設ヲ得テ宿シ、先ガ荷物ヲ 停車場ヨリ取寄セシ。新屋ハ川ニ面シ、遠ニ川ヲ隔テ、立山ヲ望 ヲキ景ヲ見シ。福田、幸ノ味、ハ、香、中ニテ、飲ル、不、安、心、ナリ。 夕食後、町ヲ散歩シ、乾草草鞋ヲ買ハル。九時就寝。	
信	受	七 月 二〇八	

(年十四) 位 即 の 帝 新 國 韓



7月21日

(枝北) 花らくさばへるふむ幕や干蟲

寒暖	晴	天氣	日一十二月七	壬辰	金曜		
信	發	モ、多、十、時、吹、フ、ノ、森、林、中、ノ、水、溜、シ、始、ヒ、テ、準備、ノ、ム、ス、ビ、ヲ、食、ス、土、崎、崎、精、濃、葉、松、等、ノ、マ、	山、路、ト、ル、石、ノ、多、キ、坂、段、ヲ、上、ル、此、處、ノ、材、木、場、ト、シ、テ、由、テ、之、ニ、面、會、傳、説、アリ、若、シ、有、報、公、用、山、	二、傳、リ、約、三、分、ヲ、要、シ、漸、ク、後、リ、リ、リ、其、シ、キ、材、木、ヲ、作、ル、小、舎、ヲ、始、テ、後、再、ビ、出、發、之、リ、愈、	此、ノ、レ、モ、ノ、ニ、テ、聖、明、川、ノ、水、清、冷、極、ス、ヘ、シ、釣、橋、ノ、荒、為、ニ、破、壞、セ、故、不、得、止、針、金、上、リ、又、	露、澤、キ、草、中、ノ、ヤ、怪、ヲ、タ、ト、ル、心、モ、輕、ク、身、モ、輕、シ、午、時、半、ニ、至、リ、約、一、里、	午、前、四、時、分、起、床、大、分、寐、過、シ、タ、リ、午、前、五、時、分、吹、漸、ク、出、發、ス、天、氣、晴、朗、朝、

七 月

二一〇

標高五ノ百尺 天幕内ノ温度六ノ九度

江 月 大 火 (年四政寛)

野



7月24日

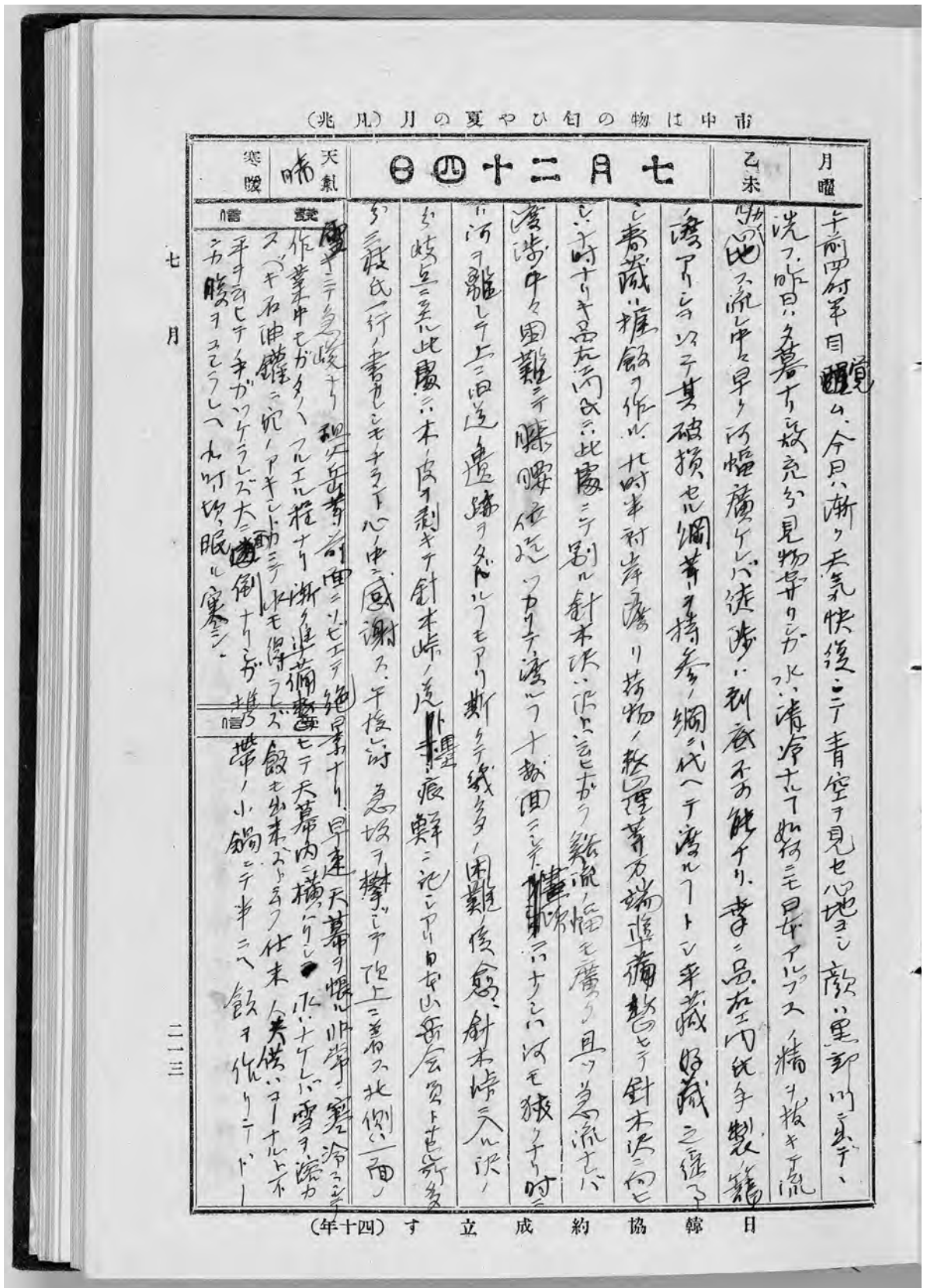


図4 旧侯爵木戸家資料 明治四十四年 當用日記 (国立歴史民俗博物館所蔵)



7月26日

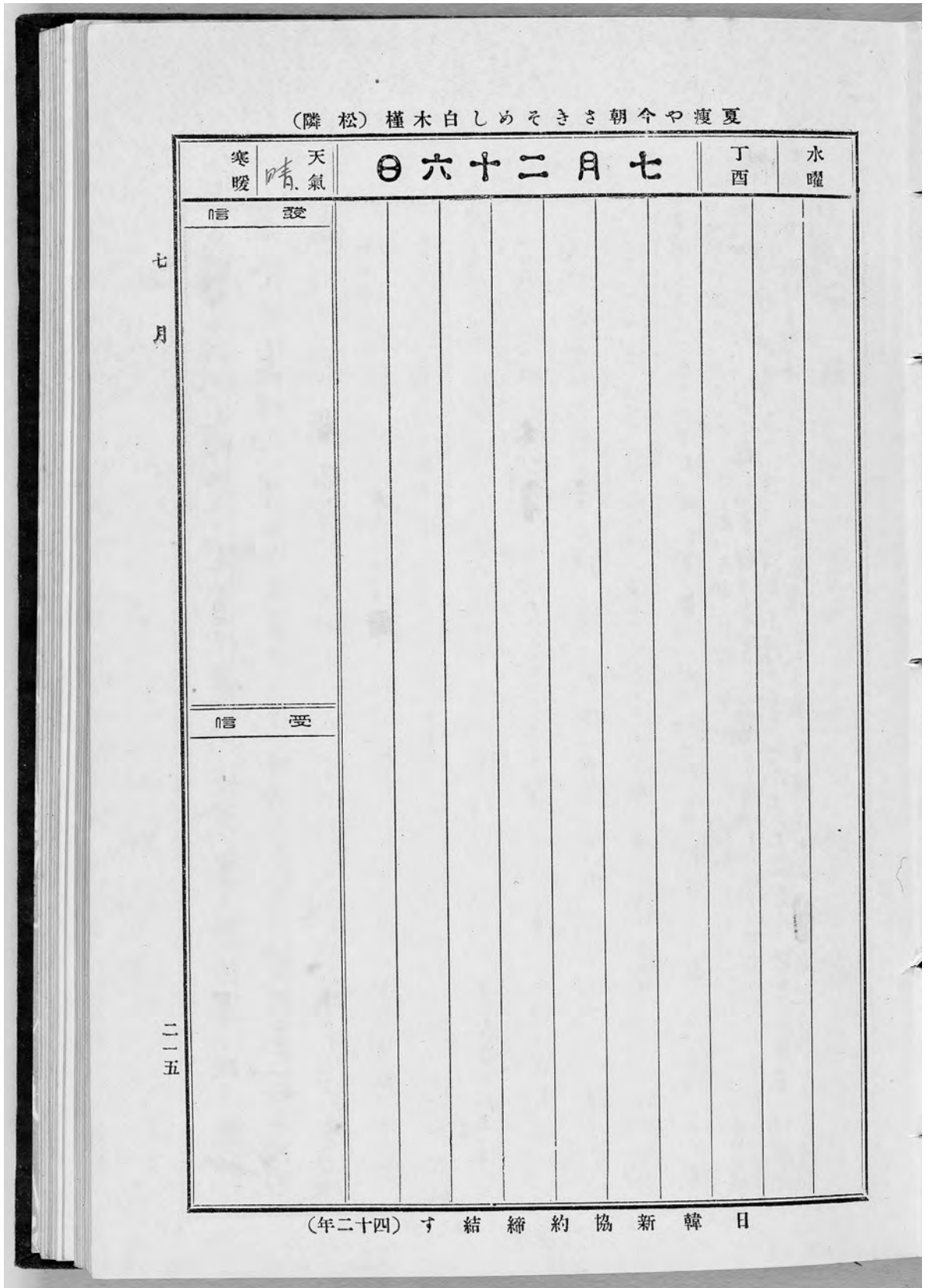


図5 旧侯爵木戸家資料 明治四十四年 當用日記 (国立歴史民俗博物館所蔵)

7月25日

(吉保) なかしぎすの胸に風松てめさ寝書

寒 暖	晴 天氣	日五十二月七	丙 申	火 曜
信	登	午蘇時半目醒る、天晴後リテ巨雲モナシ直キ峠上ニ登ル。山峯々谷々皆曇ヲ收テ陽陰 畫出ト此ノ不朗瞭ナリナク日中アルノ全景、面赤ニ展用キ雄大莊嚴成ルニ後ナシ 思ハズ快哉ヲ叫ブ。嶺ノ岳々著シク其特長ヲアツテ目ニト著ク自峰ノ上ニ見テ馬駒ノ岳ノ隙 ト中向漢々云向ニ雲ナリ死然ナリヲ勝セ名ナクニ從ヘテ何モヨリ見テモ層々圓満ナル者歎ナ 半素飯ヲ食テ存シ難キ振影等シテ天幕ヲ又ニ七時カキテ足登ニ附ニテ下山ノ途ニ就ク靈鏡 甚カク峻ナリ、全ク雪盡ル所迄約二里向テ要ニテリ龍川谷ヲ或ハ九岸ノ或ハ九岸ヲ迂回シテ 下ル後ヲ振返ルニ既ニ針峯峠ニ至リ、 <sup>省後</sup> ニ岸風ヲ吹ケルニ今迄其頂上ニアリシノ塵ハ不思議ナカク益ニ下ルニ ツレハ氣候ハ暑ク加ス十二時ニ至リ山ノ神ノキホキニ食ス。此辺ヨリ下ハ大々用カレル所ナリ道ヲキモテ 認め途上一学生ノ立山指シテ行ク。宿ス。何ゾ縁モナリモナドモオノ道途ヲ行カト馬ハ何トナク地人ノ驚感 ナキ彼モ亦然カ思ヒシカモ儘一礼ヲ別ル。三時頃野口村ニ着キ村社ニ休息。四時半頃ニ大町ニ又 出ル。其外界ノ山ノ外ニテハ飲ム所ナシ。見飽キテ口ニカキテセリシモノナリテ、何トナク口 久闊ヲ叙シ、奇遇ヲ述ベテ、 <sup>三</sup> 次君ノ高木ノ見ルニ、 <sup>四</sup> 次君ノ白馬ノ岳ノ頂上ノ見 日ニ時頃第一峠ニ至リ、ナリト互ニ佐後ニテ、 <sup>五</sup> 次君ノ高木ノ見ルニ、 <sup>六</sup> 次君ノ白馬ノ岳ノ頂上ノ見	七 月	二 二 月
信	信	愉快ニ暮ルニ至リ、 <sup>七</sup> 次君ノ高木ノ見ルニ、 <sup>八</sup> 次君ノ白馬ノ岳ノ頂上ノ見		

(年七卅) す領占を嶺磐過口營及橋石大軍我

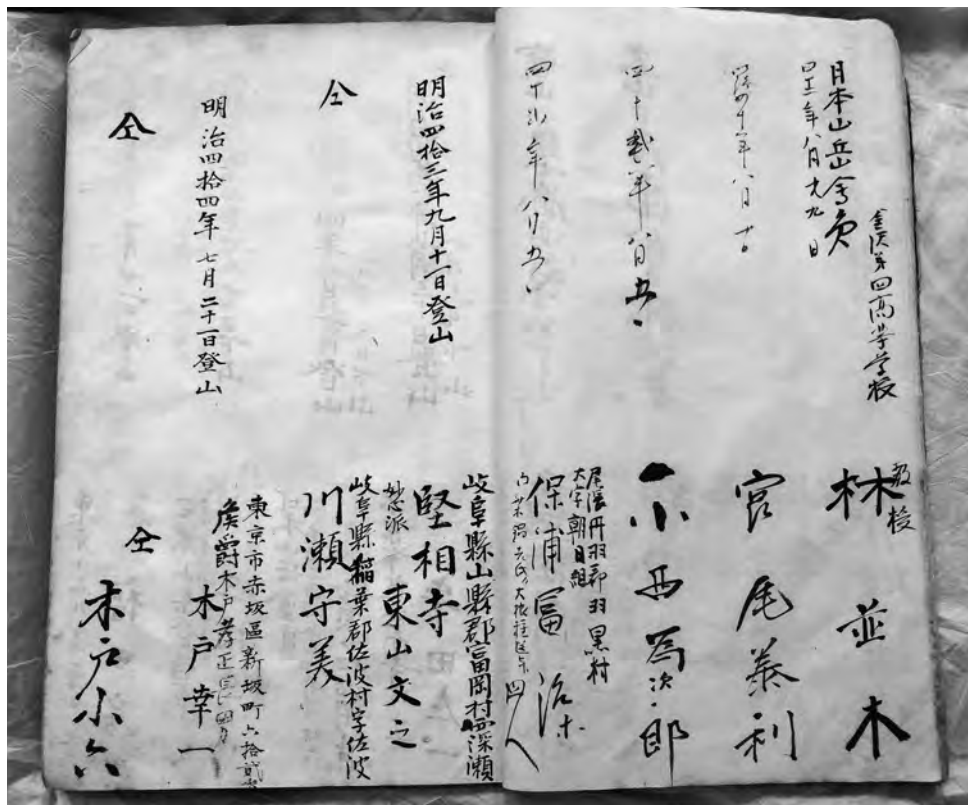


図6 円隆寺所蔵「泉蔵坊宿泊帖」(木戸幸一の署名が見える頁)

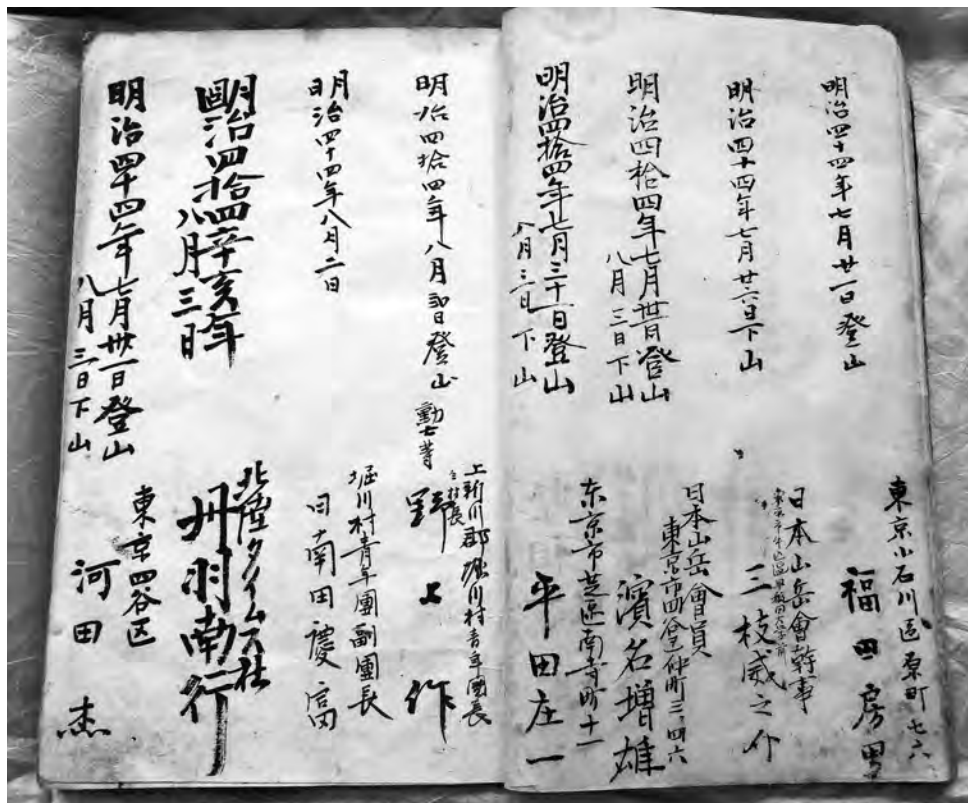


図7 円隆寺所蔵「泉蔵坊宿泊帖」(福田房男の署名が見える頁)

## 【謝 辞】

木戸幸一の立山登山について、一般社団法人霞会館華族文化調査委員会研究員の松田好史氏から情報提供いただき、翻刻の校訂に多くのご教示を得た。また、登山史研究家の布川欣一氏には帝大・旧制高校・旧制中学の登山をめぐる近代登山史の提要进行をご教示いただいた。両氏に厚く御礼申し上げる。そして、時代背景をなす情報、特に当時の鉄道交通に関する資料を調査提示された立山博物館の鈴木博喬副主幹と、日記の当該部分を翻刻した吉井亮一旧職員に、謝意を表す。

## 【主要参考文献】

- 五十嶋一晃（2013）：『立山ガイド史』、五十嶋商事有限公司。
- 大井信勝（1908）：『立山案内』、清明堂書店。
- 学習院輔仁会山岳部・山桜会（2006）：『山桜特別号「学習院登山史（I）」1887-1953』、学習院輔仁会山岳部・山桜会。
- 冠松二郎（1929）：『立山群峯』、第一書房。
- 木戸幸一（1966）：『木戸幸一日記 上巻』、財団法人 東京大学出版会。
- 木戸幸一（1966）：『木戸幸一日記 下巻』、財団法人 東京大学出版会。
- 木戸日記研究会（1980）：『木戸幸一日記 東京裁判期』、財団法人 東京大学出版会。
- 木戸日記研究会（1966）：『木戸幸一関係文書』、財団法人 東京大学出版会。
- 国史大事典編集委員会（1990・第三刷）：『国史大事典 第四巻』、吉川弘文館。
- 国立歴史民俗博物館（2011）：『国立歴史民俗博物館資料目録 [10] 旧侯爵家木戸家資料目録』、大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館。
- 国立歴史民俗博物館（2011）：『企画展示 侯爵家のアルバム —孝允から幸一にいたる木戸家写真資料—』、国立歴史民俗博物館。
- 尚友倶楽部・伊藤隆・塚田安芸子〈編集〉（2020）：『木戸侯爵家の系譜と伝統—和田昭允談話—』、芙蓉書房出版。
- 富山県 [立山博物館]（1998）：『山を撮る—山へカメラを向けた人たち—①』、平成10年度特別企画展（春季）展示解説書、富山県 [立山博物館]。
- 富山県 [立山博物館]（2000）：「W.Weston の立山登山記録であると伝えられる写真と「INAKA」所収 W.H.Elwin の著作に掲載された1枚の写真」、平成10年度企画展「山を撮る—山へカメラを向けた人たち—①」展示解説書—補遺— 富山県 [立山博物館] 緊急資料調査報告。
- 富山県 [立山博物館]（2008）：「大衆、山へ—大正期登山ブームと立山—」、平成20年度特別企画展示解説書、富山県 [立山博物館]。
- 富山県 [立山博物館]（2017）：「宮様、山へ—大正期登山ブームのなかの皇族登山—」、平成29年度後期特別企画展示解説書、富山県 [立山博物館]。
- 広瀬誠（1992）：『立山のいぶき』、シー・エー・ピー。
- 山と溪谷社（2005）：『目で見る日本登山史』、山と溪谷社。
- 山と溪谷社（2005）：『日本登山史年表』、山と溪谷社。
- 吉澤庄作（1922）：『立山遊覧』、中田書店。
- 吉澤庄作（1925）：『立山』、北陸出版社。



## 近世後期の立山における宿坊経営と戸銭収益

—岩嶽寺衆徒の収益をめぐって—

高野 靖彦

### はじめに

近世の立山は、加賀藩の強力な支配下におかれ、芦嶽寺村（以下、芦嶽寺）と岩嶽寺村（以下、岩嶽寺）が立山禪定登拝の拠点集落として数多の禪定登拝者を迎え入れた。幕末期の立山は、6,000～7,000人程度の「旅行者」を受け容れなければならない「観光地」であったと評価できる<sup>(1)</sup>。

加賀藩にとって信仰登山集落である芦嶽寺と岩嶽寺は、宗教的機能（藩主への祈祷その他）と交通的機能（国境防衛等）を合わせもつ集落だった。とくに、外部からの流入者＝禪定登拝者の管理を信仰登山集落へ委託する方策を採用したが、機構的成熟をとげた集落の存在によってはじめてそれが可能となる。そのため藩側にとって肝心であったのは、衆徒・社人を身分秩序のなかに位置づけることに加えて、登拝の拠点となる信仰登山集落を機能させ、恙なく再生産を維持させることであった。そして、再生産によって得られる利益を藩への運上金（営業税）として確保することにあった。

他方で、藩側は、信仰登山集落を互いに対抗させることで、その宗教的勢力の拡大を防ぐことに腐心した。正徳元年（1711）の加賀藩公事場での裁決により、岩嶽寺衆徒（僧侶・坊家の主人）には立山山上・山中にかかわる宗教的権利が与えられた。他方で、その権利を奪われた芦嶽寺衆徒は、彼らが以前から行ってきた加賀藩領国内外での廻檀配札活動の権利を認められ、その活動を重視していった<sup>(2)</sup>。

享和元年（1801）以降には、芦嶽寺に33衆徒と5社人、岩嶽寺に24衆徒が存在した。衆徒と社人は、宿泊施設と宗教施設を兼ね備えた「宿坊」を経営し、「立山御前」の「御本社」（現在の雄山神社峰本社）への参拝を主な目的とする禪定登拝者を領内外から招き入れ、彼らから宿泊料などの諸収益を得ていた。

筆者は、江戸中期以降、旅行の盛行がもたらした地域の「観光地」化という現象は、近世社会の特質の一つであると理解している。こうした地域の「観光地」化の事例として、旅行者の利便性を向上させるための宿坊の経営努力と参詣道整備との関係を念頭におきながら、立山山麓の芦嶽寺と岩嶽寺における旅行者の受入体制および「観光地」依存の諸生業の実態について検討した。その結果、近世中期以降、芦嶽寺および岩嶽寺では、宿泊業、接待・飲食業、案内・運搬業などの諸生業が、一山組織（宗教的組織）の管理下で維持されており、旅行者がもたらす諸問題を解決するための「争論」と「対話」が両集落間で行われていたことを確認した<sup>(3)</sup>。

かような「観光地」依存の諸生業で得られる収益は、立山衆徒が獲得した全体の利益においてどのような位置を占めていたのだろうか。立山衆徒の宗教活動は、一山や坊家・社人を維持していくための重要な一手段であるが、その維持においては他の生業従事による経済的補完があってはじめて成立したという視点が重要ではないかと筆者は考える。

そこで本稿では、かような視点を踏まえ、近世後期の立山禪定登拝において宿泊業を営んでいた宿坊家では、年間どの程度の宿料等の収益があったのかを追究してみたいと思う。ただし、今のところ芦嶽寺宿坊家の宿料等の収益を明らかにするのは史料制約から困難であるため、まずは岩嶽寺宿坊家の中道坊を対象に、その年間の宿料等の収益を明らかにしたい。

また、福江充氏の先行研究により、芦嶽寺衆徒の廻檀配札活動における諸収益については、かなりの精度で明らかにされている<sup>(4)</sup>。しかしながら、これまでの近世「立山信仰」の社会経済史的研究において、立山山上・山中にかかわる宗教的権利を獲得した岩嶽寺衆徒が、いかなる規模の戸銭（山銭・入山料）および役銭の収益



を得ていたのかを考究し、明らかにしたものは管見の限りでは見当たらないと思われる。そこで、現時点で残存が確認できる明治初年の室堂戸銭の収益を記録した史料から、立山禪定登拝における戸銭（山銭・入山料）および役銭の年間収益を算出することで、近世立山における戸銭の年間収益の問題にも迫りたいと思う。

## 2. 戸銭、宿泊料等の均一化

正徳元年における藩公事場裁決で立山信仰登山集落の宗教的権利が確定し、そのため禪定登拝の諸利益も分配されることになった。すなわち、藩公事場での裁決以降、入山料である戸銭、山中での役銭、山中諸堂の散銭（賽銭）、「立山権現」の出開帳などが「別当」の使用権を認められた岩嶽寺衆徒の主な収入源となった。他方、芦嶽寺衆徒は、農閑期の藩領内外での廻檀配札活動を中心に生計を維持していくこととなった。それに加えて、近世後期には、布橋灌頂会の勧進活動での収入が大きな割合を占めた。

もっとも、岩嶽寺では門前百姓だけでなく、衆徒も農業（稲作）に従事していた。いわば「半僧半俗」の職業身分であった。また、芦嶽寺では門前百姓が夏季には運搬業・案内業などにも従事していた。宗教者あるいは百姓が職分をこえていわば「選択的複合」によって生計維持をはかっていたのである。さらには、近世立山の「観光地」における渡世のための生計は、衆徒と門前百姓が集落内で自己完結するのではなく、外部社会との関係を重視しながらその維持をはかっていたことを念頭に入れておく必要がある。

そうしたなかで、宿泊業、運搬・案内業、土産物販売などの「観光地」依存の諸生業による収益は、芦嶽寺はもとより岩嶽寺でも生計維持のための重要な位置を占めていたと考えられる。

さて、立山禪定登拝者に不公平感を抱かせず、均質的なサービスを提供するためには、戸銭（山銭・入山料）や宿泊料、山案内料をある程度均一化する必要があったとみられ、基準となる料金の設定が行われている。

まず、近世立山における「戸銭」の料金設定の経緯を見ていこう。

天和3年（1683）の寺社奉行所への書上では、「立山開山以来、御戸銭之義ハ参詣之道者心持次第上ケ来り申候」とある。近世初期において戸銭は、参詣者の「心持次第」であったようである。本書上には「御戸銭之義者、立山参詣人壹人二付、銀壹匁貳分宛、向後取可申旨悉申極、其以後四拾五ケ年斗り其通二取来申候」とあって、天和3年にはじめて戸銭が1匁2分（80文）に定額化されたことがわかる<sup>(5)</sup>。当該期の戸銭の定額化には、階層拡大に伴う禪定登拝者数の増加が背景にあり、天和3年の均一的な戸銭額は、おそらく岩嶽寺一山と芦嶽寺一山で協議して取り決めた額であると考えられよう。

ところが、享保12年（1727）に岩嶽寺一山が、戸銭徴収額を大幅な値上げを一方向的に提唱したのである。これに芦嶽寺一山は激しく反対し、両一山間で争論が発生している。

### 【史料①】<sup>(6)</sup>

- 一、諸国より立山江参詣人有之候節、山上誘引仕候義、先年ハ芦嶽寺ニ泊り候参詣人ハ芦嶽寺より誘引仕、岩嶽寺ニ泊り候者ハ岩嶽寺より誘引仕、為御戸銭、銀壹匁貳分宛、致領納、山上誘引仕来り候所、岩嶽寺儀、享保拾貳年、御場所より御極印・御高札拜領仕候旨申立、拙寺共江申聞、向後ハ本社・末社共ニ芦嶽寺より構申間敷旨申聞、夫より山上誘引之義茂岩嶽寺坊中迄ニ而古事済し、御戸銭等定替、御国より参詣之者ニハ鳥目百五十文取立、他国より参詣之者ハ貳百三十八文宛請取候而、誘引仕候ニ付、諸参詣軽キ者共、甚難儀仕、昔ニかわり御戸銭高値ニ成候義、いかゞ之趣ニ尋候得ば、岩嶽寺答ニ御戸銭之内、国主江運上ヲ上げ申旨、答申由、拙寺江泊り候旅人風聞仕候。ケ様之品、申上候義ハ如何敷奉存候得共、他国者江對し御外聞不宜義と奉存候ニ付、乍恐申上候事。（傍線は筆者による）

上の史料は、天保12年（1841）、芦嶽寺一山から寺社奉行取次衆へ提出された書き上げである。正徳元

年に藩公事場裁決で戸銭の徴収権を獲得した岩嶽寺一山が、それまでの戸銭（1匁2分＝80文）の大幅な値上げを提唱し、それに対して芦嶽寺一山が強く反発している。

岩嶽寺一山では、戸銭値上げの理由を「国主江運上ヲ上ゲ申」としており、ここから岩嶽寺一山は加賀藩主から霊山立山の独占的な管理権・経営権を付与され、その代わりに運上金（営業税）を藩主へ毎年上納していたことがわかる。その運上金が上増されたため、戸銭の値上げで対応することを岩嶽寺一山側が登拝者に対して当然の事のように説明したことに対し、芦嶽寺一山では反論し「他国者江對し御外聞不宣」としているのである。

ここで戸銭の徴収権をもたない芦嶽寺一山が「外聞」のあり方を重視している点は注意を要する。当該期の立山では、禅定登拝者を恒常的に受け入れるための体制を構築する途上の時期であったとみられる。したがって、これは他国での「外聞」が悪いことは地域社会にとってマイナスの要素であると認識し、地域社会の代弁者として芦嶽寺一山が寺社奉行取次衆へ訴えた事例であると推考されよう。地域の「観光地」の再生産を維持・拡大させるためには、外部地域との良好な関係の構築が不可欠であり、そのことを芦嶽寺一山が十分認識していたことの表れと考えられる。

しかし、最終的には、享保12年、岩嶽寺一山の提案が認められ、戸銭と桑谷役銭（桑谷小屋利用税）について徴収額が設定された。自国からの登拝者は戸銭150文、他国からの登拝者は戸銭238文、桑谷役銭は6文と確定したのである。

また、宿坊・木賃宿の宿泊代ならびに荷物運搬・山案内の諸役銭については基本的には一山で「相對」、すなわち各宿坊家で設定してよいとされていた。ただし、法外な料金は「観光地」維持の障碍となるため、ある程度の基準額を設けて徴収している【表1】。

表1 江戸時代の立山禅定登拝における料金

適用		料金	備考
戸銭(山銭)		80文	天和3年～ ※1匁2分
	自国より	150文	享保12年～
	他国より	238文	享保12年～
中語雇料		120～140文	天保期
血盆経代	岩嶽寺	48文	
	芦嶽寺	36文	
宿坊宿泊料		150文	天保期
木賃宿泊料		70～80文	天保期
姥堂参詣	初穂料	150文	
	供料	32文	
桑谷役銭(使用料)		6文	
	こんぶ汁代	6文	
途中賽銭		30文	
一山役銭(案内料)		100文	天保期
三山役銭(案内料)		300文	天保期
室堂参詣	初穂料	100文	
	賽銭	300文	
立山下温泉宿泊料		2匁	文化11年～ ※7日分

天保期には宿泊代は150文、木賃宿泊代は70～78文、中語（山案内人）雇賃は120～140文、山案内料（一山案内）は100文、山案内料（三山案内）は300文であった。なお、立山温泉の宿泊代は文化11年（1814）に湯本が定め、銀2匁（7日分）であった<sup>(7)</sup>。

これらの諸料金は均一化が図られていたが、初穂料、御供料、散銭（賽銭）には定額がなく、個々の支払

額に委ねられていた。加えて、宿休泊に伴う飲酒や馳走代、土産物販売などの料金はそれぞれの宿坊家で設定していたようである。宿坊家の収益を増加させるには、これら均一化されていない部分での売上額の増加が必須であり、それは宿坊家の「企業努力」に委ねられていたことになる。

さて、天保期前後における個人単位の立山登拝費用については、野口安嗣氏の先行研究が備わる<sup>(8)</sup>。それによれば、芦峯寺で2泊、室堂で1泊して三山（浄土山・立山本峰・別山）巡りを行った場合、天保10年（1839）では賽銭や雑費（茶代・草履代）を含めて一人当たり928文であり、弘化3年（1846）では賽銭や中語雇賃、血盆経代（1枚につき3文）などを含めて1,261文である。近世後期の立山禪定登拝には、およそ1,000文の個人支出であったとみてよいだろう。

なお、登拝費用がかさむため、天保期には金貨・銀貨・銭貨の貨幣だけでなく銀札（藩札）を持参して金銭の軽量化が浸透していた。

### 3. 近世後期の宿坊経営による諸収益

#### 3-1 岩峯寺中道坊の事例

前述のとおり、立山禪定登拝における個人単位の諸費用はある程度明らかになっているが、禪定登拝者から得られる宿坊経営の年間収益はいかなる規模であったのであろうか。ここでは岩峯寺宿坊家中道坊の事例を検討してみよう。

近世後期中道坊の宿坊経営については、『大島延次郎家文書』所収の岩峯寺関係の史料群から検討することが可能である。本史料群は、すでに加藤基樹氏が着目し、明治維新时期における神仏分離以後の立山登拝者数の実数や出身地域についての詳細な検討を行っている<sup>(9)</sup>。本項では、かかる史料群のなかから宿坊収益に関する史料を目的意識的に抽出し、収益規模の分析を加えることにしたい。

天保12年「大福万覚帳」<sup>(10)</sup>の記載から同年の中道坊の宿料による収益を算出してみると、宿泊者数92人で銭11貫929文である。宿泊人数は、カウント可能な人数ではあるが、92名を数える【表2】。

表2 天保12年（1841）岩峯寺中道坊宿料収入

月 日	宿泊人数	出身地名	宿料（木賃料含む）
6月20日	3		255文
6月20日			289文
6月20日	5	本田村	305文
6月20日	7	添嶋村	490文
6月20日	7	西野□村	490文
6月20日	12	萩島村	840文
6月20日		廣田村	910文
6月20日	9	清水嶋村	630文
6月20日		田中村	770文
6月20日	10	佛生寺村	1400文
6月20日	5	佛生寺村	1800文
7月3日	5	越後	700文
7月5日	6	杉谷村	490文
7月6日	13	小川子村	910文
7月6日	3	舟橋村	600文
7月6日	4	見内村	600文
7月6日	3	見内村	450文
計	92		11929文

※「天保十二年 岩峯寺 大福万覚帳 丑正月吉日 中道坊」（『大島延次郎家文書』目録番号7260）より作成

加えて、中道坊は、宿料の収益の一部や米を日常的に他者へ貸し付けている。岩峯寺宿坊家の金銭運用の

一端が垣間見られて興味深い。近世農村地帯における修験寺院の日常的な金銭貸し付けについては、川越藩領内の修験寺院・林蔵院を事例とした田中洋平氏の研究が備わる<sup>(11)</sup>。林蔵院の日常的な金銭貸し付けの対象は、「広範にわたっているとはいえず、おそらくは日常的に付き合いのあった人間に対してなされるものであり、限定的なもの」と分析したうえで、貸し付け金額は、年間10～30両、利息収入は年間2～6両程度としており、「農業収入に次ぐ貴重な収入源」とみなしている。

中道坊においても金銭及び米の日常的な貸し付けを行っているが、その対象は岩嶽寺衆徒であったり、近隣村の者であるので、林蔵院と同様に広範囲に及んではない。利息収入は不明であるが、林蔵院のように収入はさほど多くなく、収入源というよりは村内外での相互扶助の意味合いが強いように見受けられる。村々の金銭的相互扶助において岩嶽寺宿坊家である中道坊は、近隣から期待を寄せられ、それに応えていたといえよう。

また、中道坊は農業を兼務していたようで、冬場には、上滝村、中瀬村、宮成村、千垣村、座主坊村、芦嶽寺村などの米購入希望者に「5斗」をベースに米を販売している。また、宿坊維持のための大工賃・修繕費などの諸費用をこれら宿料及び米販売の収益から捻出していることもわかる。

また、天保12年には、先に見た宿坊収益の銭11貫929文のうち、1貫250文を中道坊が岩嶽寺一山へ納めている。その額は宿料の年間収益の約一割に相当する。これが一山への上納金なのか、藩主への運上金のために納められたものかどうかは未詳であるが、藩主への運上金のためのものだとすれば、年間収益から運上金の規模を推定することができる。これについては今後の検討課題としたい。

さて、安政7年(1860)では、比較的多くの宿泊者数であり、202人を数え、金19朱・銀273匁・銭3,380文の宿料収益である<sup>(12)</sup>。内訳については、【表3】に示した。宿料の他に、額は不明ながらも「わらじ代」「米代」「茶代」「食事代」「提灯代」ほか、「志」による収益があることがわかる。出身地は多岐に及ぶが、射水郡からの受け入れが多いように見受けられる。

しかるに、万延2年(1861)では、宿泊者数が激減し、60人で5朱・229匁の宿料収益にまで落ち込んでいる【表4】<sup>(13)</sup>。万延2年の記録には日付の記載がないが、おそらく旧暦6月の集計であるとみられる。表の備考欄にある「御雇」というのは、山案内人の「中語」のことであろう。

続く文久3年(1863)では、宿泊者数144人で増加し、33朱・455匁・770文の宿料収益である。【表5】<sup>(14)</sup>文久3年では、出身地名には「石川」の村々が散見される。

元治2年(1865)では、89人で再び減少に転じ、60朱・356匁・29貫376文の宿料収益となっている。【表6】<sup>(15)</sup>出身地名では、「射水」と「石川」の村々が散見される。

翌慶応2年(1866)では、81人でほぼ前年並みに推移し、4朱・712匁・39貫508文の宿料収益である【表7】<sup>(16)</sup>。

これらの史料で見る限り、中道坊の事例では、天保12年から慶応2年にかけて宿泊者数に最大140人程度の差があり、宿泊者数は毎年一定規模ではないことがうかがえる。それでも宿料での収入が皆無であった年はなく、毎年の収入が見込まれたため、宿坊経営が継続できたとみられよう。

また、前述のとおり、禅定登拝用の草鞋、飯米、提灯・蠟燭代金、茶代のほか「志」「御花」などの若干の収入が計上されている。草鞋の代金は、慶応2年の記録では1束16文である。米の代金は、1升あたりおよそ200文、慶応2年の記録からは290文と米価高騰を背景としてかなり値上がりしていることがわかる。

ところで、中道坊は弘化2年(1845)から廻檀配札活動を開始している。幕末期の中道坊の「初穂料」の帳簿を見てみると、檀那組である石川郡の中奥組(37村)・林組(40村)・山嶋組(31村)・先上野組(山方42村)・鞍附組(里方12村)村々及び松任町から初穂料として毎年総額で約490匁の収益を得ており、毎年変動のある宿料収益とは違って、毎年一定規模の初穂料の収益を得ていることがわかる【表8】<sup>(17)</sup>。ただし、ここで注意を要するのは、中道坊では先の宿料収益が、初穂料のそれを上回る年が多くある点であろう。

以上、管見の史料ではあるが、近世後期の岩嶽寺宿坊家中道坊にあつては、農業による収益、初穂料の収益に加え、宿料等の収益が生計維持のための重要な位置を占めていたことを検証できたように思う。

表3 安政7年(1860)岩嶺寺中道坊宿料等収入

月 日	宿泊人数	出身地名	代(金)	代(銀)	代(銭)	備考(その他含む)
6月8日	3	源兵衛町		65 匁		わらじ 15 速 米 2 升
6月10日	23	小馬出町	1 分	5 匁 6 匁	1680 文	白米 1 斗 4 升 わらじ 30 速 茶 中食菜
6月10日	5	源兵衛町	3 朱		205 文	宿料 米 2 升
6月11日	11	横田町	1 分	14 匁	1040 文	米 2 升
6月13日		射水郡				
6月15日	6	横川原村		18 匁		
6月15日	16	中河原町		20 匁	15 文	朝飯 提灯
6月15日	8	坂ノ下町等		1.5 匁		茶代
6月16日	10	高岡		3.5 匁		志
6月16日	4	高岡		12.5 匁		
6月16日	13	下新川道市				
6月16日	10	上市				
6月16日	14	松本開				
6月17日	15	高岡	2 分	2.5 匁 20 匁		宿料
6月17日	6	高岡				
6月17日	6	坂ノ下		18 匁		
6月21日	16	米沢				
6月21日	6	五百石				
6月21日	4	射水郡小林村				
6月21日	9	縄手町等		5 匁 27 匁		志 宿
6月27日	4	石川津幡村		2 匁 14.5 匁	440 文	米 4 升
6月27日	7	本田村		2.5 匁 13.75 匁		
6月27日	2	高岡坂下				
6月27日		極楽寺		10 匁		宿
6月27日	4	日俣村		12 匁		宿
計	202		19 朱	272.75 匁	3380 文	

※「安政七年 山内 天福皆集牒 申正月吉日 中道坊」(『大島延次郎家文書』目録番号 7267) より作成

表4 万延2年（1861）岩嶺寺中道坊宿料等収入

日	宿泊人数	出身地名	代金（金）	代金（銀）	代金（銭）	備考（その他含む）
28日	9	佛生寺村		51 匁		御雇浅右衛門
28日	8	本田村		21 匁		
29日	3	宮袋		9.5 匁		助三郎
29日	6	川口村		19.5 匁		善三郎
11日朝	14	中谷田村		42 匁		
11日朝		大野新村		15.5 匁		
10日朝		麻湯村	1 朱			伴右衛門
11日晚	5	柳田村		15 匁		
				1 匁		茶代
20日朝	5	菅波村		25 匁		
				2 匁		茶代
21日晚	2	西蚊爪村		6 匁		
21日晚	6	新開□村		21 匁		
	2	松任	1 分			
計	60		5 朱	228.5 匁		

※「万延二年 當山内 天福皆来帳 酉正月吉日 中道寺」（『大島延次郎家文書』目録番号 7269）より作成

表5 文久3年（1863）岩嶺寺中道坊宿料等収入

月 日	宿泊人数	出身地名	代金（金）	代金（銀）	代金（銭）	備考（その他含む）
6月14日	17	佛生寺村		102 匁		
6月14日	5	大額村 粟田新保		25 匁		
6月14日	4	吉田		12 匁		
6月14日	10	中野村		20 匁		
6月27日	9	中谷田村		54 匁		
6月27日	3	石川□屋村 日向村				六右衛門 わらじ 5 速 米 5 升
6月28日	2	石川橋爪新村				権兵衛
	6	横井村 宮丸村		40 匁	770 文	1 斗
6月29日	3	石川鋸波村		15 匁		米 3 升 飯米 1 升
7月1日	5	石川平木	5 朱			伝兵衛 わらじ 10 速
7月2日	18	射水郡赤羽毛村		51 匁		
6月29日	5	福王寺村				
6月29日	5	徳丸村		40 匁		飯米 1 斗 5 升
7月1日	15	土合村	3 分	6 匁		
7月2日	9	下久津谷村	3 分			
7月7日	11	見内村 □坂村 池田村	2 朱	44 匁		□右衛門
7月9日	8	早須村		25 匁		
7月9日	4	蚊爪村	6 朱			
7月9日	3	橋爪村		15 匁		
7月12日	2	麻嶋村		6 匁		
計	144		33 朱	455 匁	770 文	

※「文久三稔 山内 大福萬覚帳 亥猛春吉祥 中道坊」（『大島延次郎家文書』目録番号 7271）より作成

表6 元治2年(1865) 岩嶺寺中道坊宿料等収入

月 日	宿泊人数	出身地名	代金(金)	代金(銀)	代金(銭)	備考(その他含む)
7月7日	2	日俣村	2朱		60文	わらじ 茶代
7月8日	4	上野新村			1100文 75文	米 5升 わらじ 御宿料
7月8日	12	赤羽毛村		50匁	2200文 68文	米 1斗 ろそく 2丁
7月8日	5	矢田部村			3600文 1100文	米 5升
6月17日	8	石川大河端村				
6月20日	2	射水布施村		85匁	3800文	白米 2斗
6月20日	7	石川竹松村		60目	1400文	宿料 米 7升
6月20日	7	宮丸村	11朱		800文	米 4升
6月27日		石川 庄右衛門	16朱			
6月27日	1	早伏村		5.4匁		
6月27日	2	湯涌村 新屋半左衛門		10匁	600文	米 3升
6月27日	3	平木村		20目	600文	米 3升
6月27日	6	円光村 三浦村		36匁		
				40目	1800文	米 8升
7月3日	8	見内村 岩瀬村	16朱		1844文	宿料 夕飯 米 8升5合
7月4日	12	早伏村			6800文 2420	米 1斗1升
7月4日	10	□坂村		50目	1100文	米 5升
計	89		60朱	356.4匁	29367文	

総計  
 67800文 宿代  
 18760文 米代  
 〃 86560文

※「元治二載 衆徒内 金銀皆集帳 青陽大吉日 中道坊」(『大島延次郎家文書』目録番号 7273) より作成

表7 慶應2年(1866) 岩畔寺中道坊宿料等収入

月 日	宿泊人数	出身地名	代金(金)	代金(銀)	代金(銭)	備考(その他含む)	
	5	石川大河端村		55 匁	500 文 80 文	宿料 白米 わらじ	5 升
6月23日	4	仏生寺村		2 匁		茶代	
6月24日	12	瀬領村等		131 匁	3480 文	米 宿料	1 斗 2 升
6月29日	2	佛生寺村		10 匁	580 文 96 文	米 わらじ	2 升 6 速
7月5日	2	老谷村		17 匁			
7月5日	11	小米村			8800 文		
7月6日	11	知□寺村			15000 文	宿料	
7月6日	4	乙丸村			5060 文	宿料	
7月8日	5	岩ヶ瀬村	4 朱		290 文 240 文 1500 文	米 わらじ 宿	1 升 1 5 速
7月10日	4	坊丸村			1562 文	米 中雇方 山銭代 わらじ ろそく 宿料	5 升 1 升 12 速 1 丁
7月10日	7	大野新村				中雇飯米	1 升
				101 匁		上下宿	
7月10日	5	佛生寺村				米 わらじ 中雇飯米 上下宿	2 升 4 速 1 升
				70 目			
7月11日	6	佛生寺村			2320 文	米 中雇飯米 上下宿 上下宿 御花	7 升 1 升
				70 目 105 匁 15 匁			
7月10日	3	宮永市村		36 匁		宿	
計	81		4 朱	712 匁	39508 文		

※「慶應二年 中道坊 丙寅春吉日 納所 参詣人留」(『大島延次郎家文書』 目録番号 7274) より作成



## 表8 岩峠寺中道坊檀那組からの初穂料

立山御初穂帳(万延元年~元治元年)

組名	村名	初穂料(匁)
中興組	徳光	6.5
	相川新	5
	相川	6
	竹松	6
	平木	3.5
	北安田	7
	成	4
	相木	4
	宮永市	3
	五歩市	2
	番匠垣内	2.5
	柳町	1
	乾垣内	1
	徳丸	2.5
	倉光	5
	幸明	1.5
	町	1
	長竹	1.5
	橋爪	2
	福正寺	1.5
末松	3	
清金	1.5	
専福寺	1.5	
蓮花寺	1	
田之尻	0.5	
堀内	2.5	
藤平田	1	
藤平田新	1	
中林	3.5	
粟田新保	3	
下新庄	1.5	
三十刈	1	
四十万	5	
額谷	1.5	
額乙丸	1.5	
大額	2	
村井新	2.5	
計		100

立山御初穂帳(文久元年~慶応元年)

組名	村名	初穂料(匁)
林組	坂尻	2.3
	曾谷	2.5
	熟野	1.9
	道法寺	3.2
	荒屋	2.7
	知気寺	3.6
	七原	2.5
	柴木	1.9
	部入道	3.2
	上新庄	2.6
	上林	3.4
	安養寺	3
	行町	2.5
	日向	4.2
	明法嶋	1.8
	大竹	2.2
	漆嶋村	2.9
	吉田	2.3
	矢頭嶋	2.2
	向嶋	2.8
	藤木	1.8
	針道	2.9
	来回	1.7
	館	2.1
	坊丸	2.6
	今西	1.4
	木津	6.2
橋爪新	2.1	
三浦	3.8	
二口	2.5	
平松	4.7	
劔崎	4.2	
乙丸	2.8	
菅波	4	
安吉	3.8	
寄新保	2.8	
上嶋田	3.1	
長嶋	3.9	
宮丸	6.5	
村井	6.7	
計		123.3

立山御初穂帳(嘉永四年~元治元年)

組名	村名	初穂料(匁)
山嶋組	福留	5.5
	下柏野	4.5
	荒屋柏野	4.5
	小上	2
	米永	4.5
	宮保	12
	小川	4.5
	黒瀬	2
	笠間	4.5
	松本	4.5
	石立	3
	麻嶋	4.5
	北嶋	4.5
	流安田	2
	西米光	2
	東米光	2
	蓮池	2
	平加	2.5
	長屋	2.5
	本吉新	1
本正	2	
手取	4	
手取新	2	
水嶋	4.5	
源平嶋	4	
番田	2	
運上	2	
上安田	3	
四ツ屋	4.5	
五影堂	2	
内方新保	3.5	
計		108

立山初穂帳(弘化四年~慶応元年)

組名	村名	初穂料(匁)
先上野組(山方)	田井	2
	手坂	2
	上野	3
	上笠舞	3
	三口新	2
	浦波	2
	末	5
	下辰巳	5
	上辰巳	5
	水湖	1.5
	中戸	2
	天池	0.5
	大平澤	3
	小平沢	1
	国屋	1
	櫻見	2
	相谷	2
	上鷲ヶ原	2
	下鷲ヶ原	1.5
	城力	1
	熊走	2
	寺津	3
	駒崎	3
	瀬領	2
	菅池	50文
	娉杉	1
	畠ヶ尾	2
上原	1	
羽場	1	
田子嶋	1	
着屋	2.5	
曲	1	
河内	1	
湯浦	1	
諸見	1	
下谷	3	
市ノ市	1	
七曲	1	
茅原	1	
館	1	
土清水	1.5	
生ヶ首	1.5	
計		79

立山初穂帳(慶応元年)

組名	村名	初穂料(匁)
鞍附組(里方)	上安居	2
	下安居	4
	西念新保	4
	南新保	5
	翻出	3
	大河端	4
	北間	5
	蚊爪	4
	吹崎	2
	三ツ屋	1
三口	1	
諸江	5	
計		40
	松任町	40
計		40
総計		490.3匁

※「立山御初穂帳」(慶応元年立山御初穂帳合冊) 目録番号 7242 より作成

### 3-2 明治初期の岩嶺寺宿坊家の宿料収益と経済的格差

次に、やや時代は下るが、明治初年の岩嶺寺旧宿坊家（計24軒）における宿料の全体収益を見てみよう。明治5年（1872）および6年（1873）の宿泊者数（往路・復路の重複による延べ人数）については、すでに加藤基樹氏が『大島延次郎家文書』所収の「止宿人員調理帳」<sup>(18)</sup>を分析し、明治維新期の岩嶺寺宿坊家での宿泊者数について明らかにしている<sup>(19)</sup>。本項では、その研究成果に学びつつ、岩嶺寺宿坊家の宿料収益という観点から同史料の記載内容を再検討してみたい。

明治5年6月6日から7月24日（新暦7月10日から8月27日）までの岩嶺寺での宿泊者数は、「止宿人員調理帳」を見ると、延べ人数で2,933人、宿料の総収益は879貫900文である【表9】。なお、当該期では、宿料が一人当たり「300文」となっている。

表9 明治5年（1872）岩嶺寺宿坊家の宿料収益

宿坊名	主人	宿料収益	宿泊人数	期間(旧暦)
明星坊	官兵衛	79800文	264	6月18日～7月13日
一条坊	茂吉	57900文	193	6月22日～7月12日
円城坊	多膳	26100文	87	6月8日～7月13日
延命院	敬治	37700文	129	6月23日～7月19日
千光坊	多宮	18900文	63	6月13日～7月23日
密蔵坊	宮喜	24000文	80	6月13日～7月22日
般若院	貢	20100文	67	6月13日～7月22日
財智坊	左一	7800文	26	7月11日～7月12日
無勤坊	豊吾	36900文	123	6月18日～7月22日
常住坊	多門	64200文	214	6月17日～7月14日
多賀坊	多二間	65700文	219	6月19日～7月22日
中道坊	志津摩	3900文	13	6月27日～6月29日
南泉坊	左茂里	36000文	120	6月21日～7月19日
実相防汚	左治馬	30600文	102	6月10日～7月18日
円光坊	有馬	12000文	40	6月21日～6月29日
惣持坊	数馬	4800文	16	7月2日～7月19日
玉林坊	豊二	23100文	77	6月22日～7月8日
円林坊	鼎	19500文	65	6月16日～7月19日
実教坊	織清	42600文	142	6月28日～7月13日
玉蔵坊	岩三	35400文	118	6月10日～7月24日
蔵生坊	守衛	46800文	156	6月20日～7月21日
六角坊	左賀美	7800文	26	6月6日～7月5日
永乗坊	勇	74700文	249	6月9日～7月22日
覚乗坊	真衛	106200文	354	6月15日～7月18日

延べ人数	2933人
総収益	879900文
一軒当り	36663文

※「明治五壬申年 止宿人員調理帳 立山元西神職」（『大島延次郎家文書』目録番号7259号）より作成

宿坊毎の宿泊人数を見ると、覚乗坊が354人と宿泊者数が最も多く、中道坊では13人と少ない。その差は341人であり、宿坊間で大きな差がみられる。また、受け入れの開始と終了日も宿坊間で差があり、開始は六角坊の7月10日が最も早く、終了は玉蔵坊の8月27日が最も遅い。また、受け入れの期間は概ね1ヶ月程度であるが、中道坊は3日間（13人）、円光坊は9日間（40人）と比較的短い。ただし、翌明治6年では、中道坊は102人の宿泊者を受け入れていることから、明治5年には何らかの事情が発生したため、短期

間しか経営できなかつたのかもしれない。

各宿坊家の宿料収益も差があり、覚乗坊の106貫200文から中道坊の3貫900文まで一様ではない。宿料1人につき300文で総収益879貫900文を宿坊家24軒で割ると、明治初年の岩嶽寺宿坊家の宿料収益は平均で約36貫600文となる。

続いて明治6年の「止宿人数証」を見ると、岩嶽寺での宿泊者数は、延べ人数で3,062人、宿料の総収益は607貫文である【表10】<sup>(20)</sup>。

前年より総宿泊者数が129人増加しているが、当該期の岩嶽寺では、毎年約3,000人前後の宿泊者を受け入れていたことがわかる。宿泊人数が前年より増加したにもかかわらず、宿料収益が減少している一つの理由としては、おそらく「木賃」（食料なし・食事は持参）での宿泊者が増加したことが考えられよう。

明治6年においても宿坊間の収益差がみられ、宮衛（明星坊）の40貫310文から貢（般若院）の1貫90文まで差がある。しかも2年間という短期の状況ではあるが、収益が多かった宿坊家が、翌年も同様に多くの収益を得ているとは限らず、その逆もしかりである。

かような明治初年における岩嶽寺宿坊家の経済的格差の有様は、いつから発生したのかは明瞭ではないが、少なくとも幕末期段階においても同様の状況が生じていたであろうことは想像に難くない。

### 3-3 幕末期の芦嶽寺「役銭」にみる宿坊間の経済的格差

前項では、岩嶽寺宿坊家の中道坊の宿坊経営について宿料収益の面から検討した。芦嶽寺宿坊家の宿料収益については、今のところ宿坊家の収支決算帳が見当たらないため明瞭ではない。宿坊経営の実態を含め今後の課題としておきたい。

ここでは、ひとまず幕末期に芦嶽寺一山が宿泊者に対して課していた「役銭」に着目してみよう。嘉永年間には宿泊者1人につき3文の役銭と称される料金があり、最終的には芦嶽寺一山へ納められた。

芦嶽寺雄山神社文書のなかに、慶応3年の役銭収入を記録した「立山参詣人役銭預帳」が含まれている<sup>(21)</sup>。本史料群は立山博物館で借用・保管している文書群であり、目録整備中のものである。その中に幕末期から明治初年までの立山の諸収益に関する史料を確認することができた。本稿では当該史料群に含まれるいくつかの史料を加えて分析・検討していくが、そのことを先にお断りしておきたい。

慶應3年の「立山参詣人役銭預帳」では、嘉永期には1人につき3文であった役銭が、1人つき8文へと増額している。宿泊者数の延べ人数は3,482人、役銭総額は27貫856文である【表11】。期間は旧暦で7月4日から8月6日の約1ヶ月間である。同年では、芦嶽寺役僧の実相坊が一時的に役銭を預かり、諸経費を差し引いて最終的に芦嶽寺一山へ納めている。

さて、ここで注意すべきは、岩嶽寺同様、芦嶽寺でも宿坊家毎に宿泊人数の差がみられる点であろう。宿泊者の最大人数が教覚坊の681人であるのに対して、最少人数は長覚坊の6人である。こうした役銭の徴収額の多寡から、幕末期において芦嶽寺宿坊家の経済的格差が拡がっている状況がうかがえるのである。加えて、芦嶽寺33衆徒・5社人の宿坊家のうち、禅定登拝者を迎え入れているのは21軒しかない。慶應3年段階では、芦嶽寺宿坊家の収益格差は大きいものがあり、宿泊機能をもちえない何らかの事情が発生している様子をうかがうことができよう。ただし、明治7年（1874）には、芦嶽寺で40軒近くの宿泊実績を確認できることから<sup>(22)</sup>、芦嶽寺の各宿坊家の宿泊機能の盛衰については時期的な変化があることを念頭においておかなければならない。しかし、少なくとも幕末期にはこうした宿坊間の格差があったことを「立山参詣人役銭預帳」から検証できるのである。

表10 明治6年（1873）岩嶺寺宿坊家の宿料収益

宿坊名	主人	宿料収益	宿泊人数
明星坊	官衛	40310文	353
一条坊	茂一(吉)	57900文	197
円城坊	多膳	26100文	20
延命院	敬治	37700文	155
千光坊	多宮	18900文	77
密蔵坊	宮喜	24000文	227
般若院	貢	20100文	121
財智坊	才(左)一	7800文	38
無勤坊	豊吾	36900文	151
常住坊	多門	64200文	212
多賀坊	多二間	65700文	173
中道坊	志津磨(摩)	3900文	102
南泉坊	左茂里	36000文	94
円光坊	有間(馬)		72
実相坊	左治間(馬)	30600文	51
惣持坊	数馬	4800文	8
玉林坊	豊二	23100文	48
円林坊	鼎	19500文	137
実教坊	織清	42600文	123
玉蔵坊	岩見(三)	35400文	123
蔵生坊	守衛	46800文	139
六角坊	さかみ(左賀美)	7800文	74
永乗坊	いさみ(勇)	74700文	141
覚乗坊	真衛	106200文	200

延べ人数	3062人
総収益	607000文
一軒当り	25291文

※「止宿人数証」(『大島延次郎家文書』  
目録番号7250号)より作成

表11 慶応3年（1867）芦嶺寺宿坊家における宿泊人数と役銭収益

月日	宿泊人数	役銭	坊名	備考
7月4日	218人	1744文	相栄坊	
7月4日	212人	1696文	相善坊	
7月4日	168人	1344文	長覚坊	
7月5日	450人	3912文	惣吉、大上坊	
7月6日	681人	5472文	教覚坊	
7月7日	222人	1776文	浄光坊	
7月8日	148人	1184文	龍泉坊	
7月9日	128人	1024文	権右衛門	
7月10日	246人	1968文	等覚坊	
7月11日	174人	1128文	三学坊	
7月11日	200人	1600文	宝龍坊	
7月11日	93人	672文	善照坊	
7月15日	23人	184文	宮之坊	
7月19日	167人	1336文	泉蔵坊	
7月22日	98人	784文	教蔵坊	
7月24日	56人	448文	日光坊	
7月25日	53人	424文	四兵衛	彼岸参詣人
7月25日	77人	616文	真長坊	
8月1日	62人	496文	一相坊	
8月6日	6人	48文	真長坊	
計	3482人	27856文		

内	1600文	引
	26256文	
又内	384文	引
指引	25872文	
	22文	
残り	25870文	実相坊より受取

※「慶応3年立山参詣人役銭預帳 実相坊」(芦嶺寺雄山神社文書)より作成

#### 4. 室所（室堂）における戸銭等の年間収益

次に、近世立山の入山料である戸銭（山銭）の収益を検討してみよう。

前述のとおり、正徳元年の加賀藩公事場裁決で立山の戸銭は岩嶽寺一山に獲得する権利が与えられた。その年間収入額について『立山町史』では、芦嶽寺一山の書上に「立山諸参詣人山銭取揚候処、不相定候得共、大体拾貫目斗りも相納り申候」と記載しており、変動はあるものの、銀高で「約10貫目」とされている<sup>(23)</sup>。

近世立山では、戸銭（山銭）を岩嶽寺の各宿坊家もしくは室堂で徴収し、登拝者に請取書を与えて入山させていた。その実務を各宿坊家と室堂役（室堂詰の僧侶・当番制）で分担処理していたが、岩嶽寺一山において年間分を一括して記録した帳簿類が今のところ見当たらない。そのため、同時代史料で先の「約10貫目」が妥当であるかどうかを検証するのが現時点では難しい。

ところで、明治2年（1869）5月、金沢藩民政察により、戸銭及び賽銭受納は「東西社人室所江出勤立会請取、双方帳記いたし追而遂算用六拾式軒ニ配当可申事」と定められた<sup>(24)</sup>。すなわち配当は岩嶽寺と芦嶽寺の計62軒の均等割となったため、室所（明治初年に室堂を改称）で宿泊総数と戸銭収入を合算して62軒分に均等割して配当したのである。そのため明治初年の「室所受納記」等の帳簿類がいくつか残存している。ここでは、それら明治初年の室所収益を記録した帳簿類から立山で徴収された戸銭の年間収益を算出してみる。それを手がかりに近世中後期の戸銭の年間収益の規模や傾向を推定してみることにしよう。

明治4年（1871）「室所受納記」<sup>(25)</sup>を見ると、旧暦6月9日から7月28日の41日間において、室所には5,839人が訪れている。銭換算すれば戸銭（山銭）が5,858貫200文、散銭（賽銭）が2,090貫747文、二山役銭で545貫600文、三山役銭で146貫800文、谷引銭で1,339貫854文、総計9,981貫201文（他に米1升400文×2）の収益が計上されている【表12】。

同史料から禅定登拝者の支払いは、主に金札、銭札、「富百」（富山藩発行の藩札・100文）の旧藩札、一文銭・12文銭・24文銭の銭貨で行われていることがわかる。

また「谷引銭」とは、地獄谷案内のオプション料金であると推断されよう。近世期にも地獄谷の案内料があったのかは判然としないが、地獄谷案内の際には、このような役銭もしくは何らかの礼金を禅定登拝者が支払っていた可能性が高いと思われる。

さて、先の「二山役銭」と「三山役銭」については、次の史料が手がかりとなる。

##### 【史料②】<sup>(26)</sup>

覚

一、壹貫文 一山参詣人一人二付御取銭

但、旧藩札二而

一、貳百文 二山前段同様

但、各同断

一、三百文 三山前段同様

但、各同断

一、七百文 室所入用銭 一人二付

但、各同断

右、雄山神社参詣人壹人二付、御取銭等取請指分御尋ニ付、書上申候、以上。

壬申 六月

在心 西元神職（朱印）

同心 東元神職（朱印）

金山半治 殿

上の史料は、明治5年6月の「雄山神社参詣人取銭書上」である。これによれば、明治5年では、一山（立

表12 明治4年(1871)室所における受納額

月日	日数	戸数	人数	参銭(簀銭)	二山町銭	三山町銭	三山人数	谷引銭	備考
6月9日~16日	8	491000文	495						印紙 1485文 金札 2歩1朱 代 9000文 十二文銭 24000文
6月17日		110000文	73	散銭	2603文				
					244746文				
6月18日	1	178000文	178	参銭	40900文				
6月19日	1	218000文	224	銭散	20000文				
					5800文				
6月20日	1	204000文	204	散銭	40550文				富百 1500文 一文銭 700文 米買入 54790文
6月21日	1	271000文	271					399文	米買入 1504170文
6月22日	1	229200文	224	散銭	54600文	48000文		49000文	
					214340文			29000文	
6月23日	1	187200文	186	散銭	48500文			48800文	印紙 1708000文 金札 140000文
6月24日	1	238800文	246	散銭	39200文			448文	富百二十枚 2000文 二十四文銭 40800文
6月25日	1	246000文	246	散銭	592文			22600文	二十四文銭 24000文
6月26日	1	246000文	246		75200文	57200文	140	194400文	一文銭 900文
6月27日	1	139000文	139	六七日散銭	223200文			399000文	米一升 400文
								49000文	
								38400文	
6月28日	1	214000文	214	散銭	44750文			48000文	
6月29日	1	250000文	250	散銭	47250文			90000文	
7月1日	1	430000文	430	散銭	95160文			23800文	
7月2日	1	119000文	113	散銭	30248文			29800文	
7月3日	1	362000文	149	散銭	62900文	6400文	16	42000文	
					43300文	111800文	402	1948000文	金札 9000文
					281600文			230000文	二歩一朱 51600文 一文銭 1600文
7月4日	1	483000文	483	散銭	5910文			96400文	文久一本 3400文 巻せん 2014560文
7月5日	1	476000文	476	散銭	109800文	59000文	13	960000文	
7月6日	1	58000文	58	散銭	125600文	75000文	17	11600文	
7月7日	1	45000文	45	散銭	22800文	5600文	28	9000文	
7月8日	1	74000文	74	散銭	14700文	7200文	36	14800文	
7月9日	1	92000文	92	散銭	20700文	10200文		18000文	金札 776305文 金札一両 2歩1朱 21000文 十二文銭7本 18000文
7月10日	1	100000文	100	散銭	31750文	7400文		14400文	一文せん 1200文 四口 816550文
7月11日	1	84000文	84	散銭	12600文	20000文		11500文	内 東渡り 500480文 西渡り 316080文
7月12日	1	72000文	72	散銭	16400文	10000文		5000文	
7月13日	1	75000文	75	散銭	16400文	10000文		202000文	内 銭札 1200文 金札三分 2040文 二十四文せん 2400文 十二文せん 700文 富百 1538文 文久せん共 200文 此内銭札 六口 220678文
7月14日	1	32000文	32	散銭	14528文	4800文		600文	米買入 2升5台 1850文 室所渡 9600文
7月15日	1	250000文	25	散銭	8550文	28000文		1800文	西渡 209228文
7月16日	1	7200文	6	散銭	2050文	1200文		200文	東渡 100000文
7月17日	1	7400文	7	散銭	2350文	1400文		800文	
7月18日	1	9000文	9	散銭	3200文	1800文		507文	
7月19日	1	16800文	16	散銭	5150文	3200文	16		
7月20日	1	3400文	3	散銭	1100文	200文	1		
7月21日	1	15600文	15	散銭	4200文	2600文	13		
7月22日	1	12600文	12	散銭	3550文	2400文	12		
7月23日	1	3600文	3	散銭	4500文	600文			
7月24日	1	7000文	7	散銭	723文	900文			
7月25日	1	10800文	9	散銭	1350文	1350文			
7月26日	1	1200文	1	散銭	250文	250文			
7月27日	1	9600文	8	散銭	1600文	1600文			
7月28日	1	4800文	4	散銭	340文	700文			
計	41	5858200文	5358		2090747文	545600文	1804	1339854文	
						146800文	601		

※『室所受納記』(芦峯寺雄山神社文書、『御戸銭等』高帳)に合綴のものより作成。なお、帳末に室所への総人数を「五八三九人」と記すが、帳簿上の合計数字と齟齬が見られる。本文では帳末の数字に依拠している。

山本峰のみ)の禪定登拝者の取銭は1人につき1000文である。この「一山参詣人」の取銭1000文は、近世期の戸銭(入山料)＋一山案内と同様の性格のものであろう。

また、室所入用銭(宿泊料)700文が必要で、さらに、登拝のオプション料金として、二山の参詣案内(浄土山＋立山本峰もしくは立山本峰＋別山か)200文、三山の参詣案内(浄土山＋立山本峰＋別山)300文がある。近世期の三山案内300文に加え、明治5年には二山案内の料金が加わったものと推察される。

むろん近世中後期と明治初年とでは、室堂(室所)での禪定登拝者の負担額が大きく異なっている。ただし、先の明治4年の室所全体収益から近世岩嶽寺の収益の傾向を概ね推察することができよう。すなわち室所全体収益の半分以上を戸銭の収益で占めている。それに加えて、散銭さらには諸役銭(「二山役銭」・「三山役銭」・「谷引銭」)の収益を合わせるとかなりの額になるのである。明治4年の室所での総収益9,981貫201文は、両単位にすると、998両≒1,000両という額になる<sup>(27)</sup>。

また、明治6年9月の「立山戸銭決算帳」を見ると、室所宿泊の総人数が6,629人、室所全体の収益が総計13,233貫285文(≒1,320両)となっている<sup>(28)</sup>。これらの室所全体の収益を岩嶽寺と芦嶽寺の宿坊家62軒で均等配分したため、明治6年では一軒当たり213貫440文の配当金であった。こうした配分の仕方により、岩嶽寺の戸銭収益は明治初年において大きく減少したことになる。

翻って近世中後期には、加賀前田家支配の下、毎年の運上金の上納はあるにせよ、岩嶽寺では立山山中での戸銭や散銭などの莫大な収益があったことになる。こうした状況下にあつて、芦嶽寺では各宿坊家が宿坊経営に加えて「諸国廻檀配札活動」による諸収益を追求したのは当然であった。

## 5. 収益の行方－近世後期の加賀藩寺社祠堂金

ここで近世立山をとりまく諸収益の行方の問題の一端にふれておこう。

近世領主権力にとって、領内を通行する参詣者の有する意義は、まず彼らが領内地域に振り撒く金銭である。立山を訪れる禪定登拝者がもたらす金銭は、信仰登山集落の生計維持に当てられたが、加賀藩主への毎年の運上金が課せられており、それにより利益の再配分がなされたことになる。前述のごとく、運上金の規模は、今のところ明らかではない。しかし、運上金の規模や値上がりによって信仰登山集落の生計維持が左右されることは、容易に想像されよう。したがって、加賀藩への上納金の規模の解明は、立山信仰登山集落の経済状況を考察する上で重要である。

かかる諸収益の行方の問題について、福江充氏は芦嶽寺宿坊家が廻檀配札活動で獲得した収益と加賀藩の寺社祠堂金の関係性に着目し、利益の行方の一端を考察している。これは、立山信仰登山集落の諸利益の再配分の問題を追及する上で、欠くことの出来ない視点である<sup>(29)</sup>。

加賀藩における寺社祠堂金は、藩が宝円寺その他、領内の寺社より寄附金として集めたもので、算用場に属する祠堂銀裁許(町人)が取り扱い、諸士に貸付されていたものである。諸士は一定の利息をもって返済することが義務づけられていたため、寄付金とはいえ、その利息は出資者である寺社へ還付された。

さて、芦嶽寺宿坊家は、廻檀配札活動で大きな収益を得ていたが、全ての宿坊家はその活動を行っていたわけではなく、難作と天災・火災などの影響を受けて経済的状況が悪化し、宿坊間で大きな貧富の差が生まれ、その格差が嘉永期に拡大したことを福江氏は史料から指摘する。前述のとおり、本稿でもそうした宿坊家間の格差状況を幕末期の「立山参詣人役銭預帳」から検証することができた。

芦嶽寺宿坊家のなかには、宝泉坊のように大都市江戸に檀那場を形成し、莫大な利益を得ていた宿坊家も存在した。福江氏の研究によれば、宝泉坊は元治2年には通常は行わない諸大名への奉加も行い、総額740両3分1214文と白銀1枚及び衣3枚(初穂料・薬代収入を除く)を得ており、明治元年(1868)には63両(初穂料を除く)の収益を芦嶽寺へ持ち帰って着実に蓄財している。

そのような富裕な宿坊家は、弘化3年以降、寺社奉行所へ祠堂金を預け入れており、それに対して藩は1

ケ月100目につき8朱宛の利息を支払っている<sup>(30)</sup>。このことは財政難である藩が諸寺院に対して寺社祠堂金を名目に半ば強制的に金銭を預け入れさせたのであり、芦嶽寺の場合、当該期は宿坊家間の格差を考慮して、個々の宿坊でその藩政策に対応したものと考えてよいだろう。

芦嶽寺雄山神社文書によれば、明治5年までの寺社奉行所への祠堂金は、加賀藩越中領に限れば、善徳寺、瑞泉寺、瑞龍寺、勝興寺、国泰寺、西元神職（岩嶽寺）、東元神職（芦嶽寺）から預け入れとなっている。芦嶽寺では、宝龍坊、教算坊、三学坊、宝泉坊、福泉坊、教蔵坊、教覚坊、吉祥坊がその利息を得ており、加えて芦嶽寺一山の祠堂金預け入れも確認できる。

さらに、同文書「祠堂銭御改正根帳」によれば、明治6年6月付で寺社祠堂金は、新貨条例（明治4年5月）に基づき、銭単位から円・銭・厘の新貨単位へ変換されて、その預け入れが継続されている。たとえば、旧教算坊の15貫980目は、81円1銭9厘と変換されている。史料上、利息支払いについて明治13年（1880）までは確認できるが、それ以降、寺社祠堂金がどのように処理されたのかについては、明治14年（1881）以降の利息支払いの史料が見当たらず未詳である。ただし、近世後期に加賀藩が金沢町人から集めた金銭は寄付者へ最終的には返済されていない。芦嶽寺の寺社祠堂金の行方についても同様の可能性が高いと思われる。

寺社祠堂金の預け入れは、岩嶽寺一山でも行われていることが、芦嶽寺一山側の史料からうかがうことができる。しかし、岩嶽寺一山の場合、寺社祠堂金を預け入れていた宿坊とその額は、今のところ明らかではない。その捻出先は、おそらく主な収益である山銭・役銭・賽銭に加えて、出開帳や相対勧化による収益、あるいは宿料などの観光依存の諸収益などであったはずであろう。岩嶽寺の寺社祠堂金の行方についても未詳であるが、おそらく返済されていない可能性が高いと思われる。

このように、芦嶽寺衆徒側の史料から、近世後期には加賀藩が財政不足の補完について立山信仰登山集落が得ていた諸収益に求め、半ば強制的に寺社祠堂金という名目で金銭を集めていたことが明らかである。かような近世後期の藩主導による利益の再配分が、立山信仰登山集落の生計維持にかなりの影響を与えていたのか。そのことを解明するうえで、藩主への運上金額および寺社祠堂金額など、信仰登山集落の収益の行方を検討することは避けて通れない課題である。

## おわりに - 立山信仰登山集落の経済基盤の一視点

以上、本稿では、近世後期の立山における宿坊経営と戸銭収益について管見の史料をもとに追究した。

近世立山では、禪定登拝者が支払う戸銭、宿料、山案内料などは、ある程度の基準額が決められ、均質的なサービスが提供されていたことを確認した。

そのうえで、まずは近世後期の岩嶽寺宿坊家中道坊の宿料収益について検討した。検討の成果をまとめると、以下のとおりである。

- ①岩嶽寺中道坊の事例では、天保12年から慶応2年にかけて、年間の宿泊人数は60人から202人の変動があり、約140人の差がある。ただし、宿料収益が皆無であった年はなく、変動はあるが毎年の収益があるため宿坊経営の継続が見込まれた。
- ②宿泊料の他、禪定登拝用の草鞋、飯米、提灯・蠟燭代金、茶代、「志」・「御花」などの収益がある。
- ③初穂料はほぼ毎年一定の収益であるが、宿泊に伴う諸収益が、初穂料のそれを上回る年もある。
- ④金銭及び米の日常的な貸し付けを行っている。その範囲は他の岩嶽寺衆徒や近隣村の者までにとどまり、広範囲に及んではない。
- ⑤宿坊維持のための大工賃・修繕費などの諸費用を宿料および米販売の収益から捻出している。
- ⑥年間宿坊収益の金銭のうち約1割に相当する額を岩嶽寺一山へ納めている。

次に明治初年の室所（室堂）の収支帳簿の分析をとおして、禪定登拝者から岩嶽寺衆徒はどの程度の戸銭



や役銭による収益を獲得していたのかを検討した。検討の成果をまとめると、以下のとおりである。

- ①明治4年では、旧暦6月9日から7月28日の41日間において、室所には5,839人が訪れている。「戸銭(山銭・入山料)」「散銭(賽銭)」に加えて「二山役銭」・「三山役銭」・「谷引銭」のオプション料金があり、計9,981貫201文(約1,000両)の収益である。
- ②明治6年では、室所に6,629人が訪れ、室所全体では、総計13,233貫285文(約1,320両)の収益である。
- ③室所全体収益の半分以上を戸銭の収益が占めており、散銭さらには諸役銭の収益を合わせるとかなりの収益になる。

さて、立山の芦峯寺衆徒および岩峯寺衆徒の経済基盤の先行研究については、まず高瀬重雄氏の研究がある<sup>(31)</sup>。立山衆徒の経済基盤には、中世では、地方の武将の寄進による堂社の造営やその燈明料があり、近世には加賀前田家の外護による田地の所有権や藩主から得ていた祈祷料収入、あるいは堂社修復にあたっての援助金などがあつた。高瀬氏の研究は、立山衆徒の経済基盤を実証的に明らかにしており、立山の社会経済史研究の嚆矢であるといえよう。そのなかで高瀬氏は「しかし、宿坊に泊まる禅定人からの謝礼、また禅定人の山案内をすることによって得られる祈祷料や謝礼というものもある。あるいは禅定人に与えられたお札料というものもある。また経かたびらを与えた場合にも、適誼の礼金が支払われたであろう」と言及している。民衆の現世利益的な信仰需要に支えられた立山衆徒が、禅定登拝者から得られる収益によって生活の糧を得ていたことは把握されるものの、史料に基づく具体的な実相の解明は課題としてのこつた。

続いて、福江充氏は、芦峯寺衆徒が加賀藩領外で展開した廻檀配札活動に関する史料から、その実態と収益の規模についての実証的研究を進めた<sup>(32)</sup>。福江氏は、芦峯寺衆徒の藩領内外での勧進方法を、「御祈禱主体型」と「護符頒布主体型」とに分類できるとし、芦峯寺宝泉坊の江戸における廻檀配札活動の事例では、特別な勧進方法の場合を除いて年間60両ほどの収益を得ていたとした。さらに、芦峯寺宿坊家の檀那場の規模については、信徒数が数百人から最大1,500人程度であったことを明らかにした。

こうした先行研究は、近世の立山経済史研究を大きく進展させたことは衆目の一致するところであろう。しかしながら、近年の近世宗教史研究においては、修験寺院の新たな経営像を議論に組み込む必要があることを提唱されている点にも注視しなければならないだろう。それは、これまでの「僧侶をはじめとする宗教者によって展開される宗教活動を当該寺院の社会的理由として位置づけ、その延長線上にそのまま寺院の経済的存立基盤を位置付けてきた」という前提にもとづく議論に加えて、「宗教的活動は、他生業への従事による経済的補完があつてはじめて可能であった」とする修験寺院の経済基盤をめぐる新たな議論である<sup>(33)</sup>。

かかる議論においては、修験寺院を一つの「経営体」と把握し、修験者の祈禱や配札といった宗教活動を、ほかの生業への従事と同列に扱う。立山衆徒(岩峯寺と芦峯寺の衆徒)は「半僧半俗」の宗教者であり、岩峯寺衆徒の場合は、農業にも従事し、坊家の主人として宿泊業も兼ねていた。中道坊の事例では、農業に加えて、些少ではあるが、金銭の貸し借りの経済活動も垣間見える。そのため、こうした多岐にわたる近世岩峯寺衆徒の主体的な経済活動を押さえたうえで、その経済基盤の全体像を明らかにし、そのなかで岩峯寺衆徒の宗教活動を位置づける必要はないだろうか。

そのような問題意識で、本稿では、近世岩峯寺一山および宿坊家を一つの「経営体」と捉え、その経済基盤の一角である宿坊経営による収益について、岩峯寺中道坊の宿坊経営の事例を明らかにした。なお、本稿で分析素材にした『大島延次郎家文書』には、岩峯寺密蔵院の年間収益などを記録した史料も含まれている。本稿では取りあげなかったが、今後は宿坊経営の個別的な事例蓄積が必要であろう。

また、岩峯寺衆徒の諸収益のなかには、藩領内における寺院での「出開帳」<sup>(34)</sup>による収益があつた。その収益の規模についてはいまだ明らかではなく、今後の調査研究がまたれる。

さらには、立山山上・山中にかかわる宗教的特権を与えられた岩峯寺一山は、戸銭や諸役銭などの「山収入」で、いかなる規模の収益を得ていたのか。本稿では、管見される明治初年の史料から戸銭や諸役銭の年

間収益を算出する試みを行い、その問題を追究してみた。明治初年の戸銭等の年間収益の規模を見ると、「経営体」としての岩嶽寺一山の経済基盤は、加賀藩主の祈祷料や堂社修復などの経済的援助はもとより、立山の禅定登拝者がふりまく金銭が大きな比重を占めていたのではないかと想像されるのである。今後は岩嶽寺一山の経済基盤の全体構造および収益の行方について、さらなる検討が必要である。

このように残された課題は少なくないが、近世後期岩嶽寺中道坊の宿坊経営の実相と明治初年の戸銭等の年間収益を明らかにすることができたのは、本稿の大きな成果であったと思う。立山の社会経済史研究の今後のさらなる進展を期待しつつ擱筆したい。

#### 【謝 辞】

『大島延次郎家文書』所収の中道坊ならびに岩嶽寺関係史料については、資料所蔵者の大島順一氏および寄託先の栃木県立文書館より、写真の掲載について御承諾をいただいた。また、加藤基樹氏（元立山博物館主任・学芸員、現文化庁民俗文化財調査官）には、同文書群に含まれる立山関係史料について御教示をいただいた。浦田正吉氏（越中史壇会編集委員）、近藤浩二氏（滑川市立博物館長）には、幕末期から明治初期にかけての貨幣価値について御教示をいただいた。末筆ながら深く感謝の意を表します。

#### 【註】

- (1) 青柳周一『富嶽旅百景 観光地域史の試み』（角川書店、2002年）。青柳氏は、近世の「観光地」を「大量の旅行者を恒常的に受け入れることを通して再生産が維持でき、併せて内部の社会秩序を保つ能力を有すること」と定義した。地域の「観光地」形成という研究視角は、青柳氏によって「観光地域史」と名づけられ、新たな交通史・地域社会史の展開を切り拓いている。この視角のもとでは、一山組織や宿坊の経営も、「観光地」維持のための経済的営為の一方途であるとみなすことが可能である。
- (2) 福江充『近世立山信仰の展開—加賀藩芦嶽寺衆徒の檀那場形成と配札—』（岩田書院、2002年）。
- (3) 拙稿「立山信仰登山集落における旅行者受入体制」（『研究紀要』第23号所収、富山県 [立山博物館]、2017年）。
- (4) 福江充『立山信仰と立山曼荼羅—芦嶽寺衆徒の勧進活動—』（岩田書院、1998年）、同『近世立山信仰の展開—加賀藩芦嶽寺衆徒の檀那場形成と配札—』（岩田書院、2002年）、同『江戸城大奥と立山信仰』（法蔵館、2011年）。
- (5) 佐伯立光『立山芦嶽寺史考』P101～102（立山寺、1957年）。
- (6) 芦嶽寺一山会文書「芦嶽寺岩嶽寺山格古式改帳」（『越中山古記録 第一巻』P218所収、立山開発鉄道株式会社、1989年）。
- (7) 深見家文書「立山温泉運上銀并歩持人之潤色銀留帳」（文政6年）、『深見家文書目録』目録番号30－7。
- (8) 野口安嗣「江戸時代の立山参詣の費用」（『研究紀要』第19号所収、富山県 [立山博物館]、2021年）。
- (9) 加藤基樹「明治維新期における立山登拝と「立山信仰」—登拝者の実態にみる民衆信仰史の一齣—」（『研究紀要』第19号所収、富山県 [立山博物館]、2012年）。なお、「大島延次郎家文書」所収の立山関係資料44点については、加藤基樹「栃木県立文書館蔵『大島延次郎家文書』のうち立山関係の資料」（『人と自然の情報交流誌たてはく』第80号所収、富山県 [立山博物館]、2012年）の一覧を参照。
- (10) 「大福万覚帳」（個人蔵、栃木県立文書館寄託『大島延次郎家文書』所収）。『栃木県史料所在目録38大島延次郎家文書』（栃木県立文書館、2009年）目録番号7260。以下、目録番号のみ。
- (11) 田中洋平「近世農村地帯における修験寺院経営」（『近世地方寺院経営史の研究』第三章、吉川弘文館、2019年）。
- (12) 「天福皆集牒」目録番号7267。なお、3月に万延に改元されているが、本史料は正月からの記載のため、ここでは安政7年とした。
- (13) 「天福皆来帳」目録番号7269。
- (14) 「大福万覚帳」目録番号7271。
- (15) 「金銀皆集帳」目録番号7273。なお、2月に慶応に改元されているが、本史料は正月からの記載のため、ここでは元治2年とした。
- (16) 「大福万控帳」目録番号7274。
- (17) 「立山御初穂牒」（慶応元年立山御初穂帳合冊）目録番号7242。
- (18) 「止宿人員調理帳」目録番号7259。

- (19) 註(9) 加藤前掲論文。
- (20) 「止宿人数証」 目録番号7250。
- (21) 芦峯寺雄山神社文書「立山参詣人役銭預帳」(慶応3年)。
- (22) 註(9) 加藤前掲論文。
- (23) 『立山町史』下巻、第I編近世の郷土、P92～93。
- (24) 芦峯寺一山会文書「定書之事」(『越中立山古文書』P121～122所収、国書刊行会、1982年)。
- (25) 芦峯寺雄山神社文書『室所受納記』(明治4年『御戸銭等ノ高帳』に合綴のもの)。
- (26) 宮路金山家文書「覚 雄山神社参詣人取銭書上」(明治5年)『宮路金山家文書目録 下』(立山町教育委員会、2005年) 目録番号4365。
- (27) 明治4年3月現在 加賀藩の金銀銭相場位附(『加賀藩史料』藩末篇下巻P1309、前田育徳会、1958年)によれば、明治4年の相場は、1両=10貫文(10,000文)、越中における米1石=79貫120文である。
- (28) 芦峯寺雄山神社文書『立山戸銭決算帳』(明治6年)。
- (29) 福江充「芦峯寺宿坊家の廻檀配札活動とその収益の行方」(同『近世立山信仰の展開—加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札—』所収、岩田書院、2002年)。同「立山山麓芦峯寺宿坊の檀那帳に見る立山信仰—立山信仰の伝播者芦峯寺衆徒の廻檀配札活動と檀那場」(地方史研究協議会編『情報と物流の日本史—地域間交流の視点から—』所収、雄山閣、1998年)。
- (30) 芦峯寺雄山神社文書『加州寺社所祠堂金御利足下覚帳』。
- (31) 高瀬重雄「立山における衆徒・社人の経済基盤」(『立山信仰の歴史と文化』第三編第二章、名著出版、1981年)。
- (32) 註(4) 福江前掲書。
- (33) 註(11) 田中前掲論文。
- (34) 岩峯寺衆徒の出開帳の実施状況に関する研究は、野口安嗣「岩峯寺衆徒の出開帳」(『研究紀要』第10号所収、富山県[立山博物館]、2003年)、同「立山衆徒の出開帳」(『研究紀要』第11号所収、富山県[立山博物館]、2004年)に詳しい。



大島延次郎家文書 7260



大島延次郎家文書 7267



大島延次郎家文書 7269



大島延次郎家文書 7271



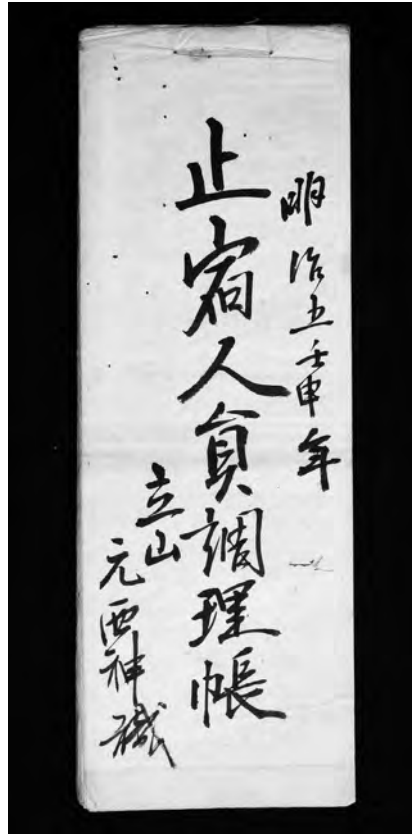
大島延次郎家文書 7273



大島延次郎家文書 7274



大島延次郎家文書 7242



大島延次郎家文書 7259



大島延次郎家文書 7250

## ニホンライチョウの巢の標本製作について

鈴木 博喬

### はじめに

本稿は、令和2年度（2020年度）に立山博物館が製作収蔵したニホンライチョウ (*Lagopus muta japonica*；以下、ライチョウと略記)の巢の標本について、当該標本の採取の経緯から巢の保存処理（寸法安定化）までの概要を記載する「覚え」である。

なお、営巣地点の地形や植生に関する記載事項ほか、当該巢に付帯する様々な情報については、その整理が整い次第、これらを別稿に纏め、展示等、当該標本の利活用に資する予定である。したがって本稿においては、これら情報の記載は割愛する。

### 1. 経緯

令和元年（2019）7月13日から9月1日まで開催された、前期特別企画展<sup>(1)</sup>において展示する目的で、平成30年（2018）にライチョウの巢の採取と標本の作製を構想した。もちろん当該展示終了後は、恒久保存を前提とした寸法安定化等の処置を施し、立山博物館が初めて収蔵するライチョウの巢の標本として、広くその利活用をはかる計画であった。

ライチョウの巢は、本州のハイマツ帯に営まれ、つがい（番）をなすライチョウの雄が占有するなわばりのなかに雌が営巣する。雌は、ハイマツ群落の辺縁部や矮性低木・草本群落複合などの、主に草本層や落葉落枝層上に営巣地点を選択して足指（ときに嘴もつかう）で掘り、そこに初卵を産む。その後、通常は1～2日ごとに1卵を産み、全体で数卵（立山では平均6卵）を産む。産卵のたびに雌は、主に落葉落枝で卵を被覆・隠蔽して巣を離れ、採餌や休息の生活に戻る。次の産卵の際、雌は、卵を覆う落葉落枝などを腹部で横に押しつけ、そして次卵を産む。この行動の繰り返しによって、卵の被覆・隠蔽に使用された落葉落枝などは産み落とされた卵群の下や横に押し込まれ、その場や直近にもともとあった落葉落枝などと一緒に雌の体（腹部）に押さえられて、次第に椀状に整えられ、産座（巢）の形状が成立する。雌が産卵を完了して抱卵期になると雌の営巣行動（抱卵や転卵）が継続されることで、明瞭な巢の形状が安定して維持される。このようにライチョウの巢の形成では、雌が巢材を編むように絡めたり、何らかの糊剤（例えば泥など）を用いたりすることはない。そして、何らかの理由によって孵化しなかったものを除く全卵が孵化すると、雌は、雛を連れて巣を離れ、家族群（雌親と雛の群）の遊動生活へと移行する。その結果、残置された巢は雌による継続的な加圧を失い、風雨に曝されるなどして、その輪郭や立体的な構造は概ね急速に失われ、ぼやけてゆく（ただし痕跡は、長く遺る場合がある）。

したがって、ライチョウの巢の採取とは、具体的には、営巣地点の落葉落枝層などに印された「巢の形状」を切り取って保存することを意味するため、巢の形状がよく保持された状態のライチョウの巢の標本を取得するには、孵化に成功した巢を、離巢直後（遅くとも当日中）に採取するのが最適と判断される。離巢後であれば、ライチョウ家族群（雌親と雛の群）への影響もほとんどないと判断され、充分に対象の家族群へ配慮した措置といえるであろう。

立山の室堂平は、ライチョウの繁殖域のなかでは交通至便であるばかりでなく、毎年、富山雷鳥研究会による継時的な調査が行われていて、当年のなわばり配置・営巣地点の分布や環境情報について精度の高い把握が可能である。また、通常、ライチョウの営巣の確認（巢の発見）は容易ではなく、ライチョウ個体（雌）

の行動追跡調査を必要とする。したがって、今回のように、ある地域において当年の複数の巣を発見し、各々を検討しつつ採取に相応しい巣を絞り込むという作業は、富山雷鳥研究会の情報協力を得て初めて可能となるのである。これは、他地域には殆ど類例のない立山・室堂平の特徴であり利点であるといえる。

さらに、関係諸機関からの教示を得て、室堂平の環境保護に関わる規制等を検討した。室堂平に存在する規制区域<sup>(2)</sup>のうち最も規制の厳しい特別保護地区においては、例えばハイマツの落葉落枝層の採取においても事前に採取物・採取地点・採取寸法等を明示した採取許可申請が必要で手続きに時間もかかることから、当年確認された巣の年内採取許可申請は現実的でない。一方、第2種特別地域<sup>(3)</sup>では、土石と植物の採取については特別保護地区と同様で申請による採取許可の取得を必要とするが、生きた植物を含まない少量の落葉落枝の採取であれば、特段の許可申請を要しない。

以上の結果から、巣の採取計画の方針を次のとおり決定した。

まず、令和元年に、立山・室堂平内の第2種特別地域内に営まれた巣から採取対象を選択する。次に、主としてハイマツ群落縁の落葉落枝層上に営まれた巣のなかから検討するが、植物は採取できないため草本や矮生低木群落上に営まれてこれらを産座の構成要素とする巣は対象外とする。そして、営巣の経過が記録されて離巢日時が把握・確認可能な巣を採取対象とする。

令和元年の5月末から、立山博物館の吉井亮一主任専門員がしばしば現地に入り、富山雷鳥研究会から指導と情報提供を受けつつ、室堂平でのライチョウのなわばり形成の状況の追跡と、確認された営巣地点の把握につとめ、6月下旬以降は、抱卵（営巣）中の巣の現況の把握・孵化・離巢時期の推定、その採取可否の検討、などを進めた。そして最終的には、室堂平のミドリガ池園地南西向斜面上に営まれた巣を最有力候補と定め、7月10日の朝、当該巣の家族群の離巢済を確認。富山雷鳥研究会の松田勉・大塚伸両氏の指導のもと、吉井主任専門員が巣を現地実測ののち、巣（産座）部分のハイマツの落葉落枝層を切り出し、「ライチョウの巣の採取」とした。標本ブロックの切出面は、当該ブロックの背面全体、左右両面のそれぞれ一部、底面全体、の4箇所である。

当該巣（標本）は直ちに立山博物館に収容し、応急の殺虫処置を施した後、仮乾燥の処置工程に入った。企画展期間中はこの状態で展示し、展示終了後に本格的な標本作製の予定であったが、企画展示内容に変更が生じるなどして巣は展示されなかったため、燻蒸処置の後、仮乾燥の状態のまま暫く保管することとなった。

令和2年4月になって、当該標本の恒久的保存処理作業実施に関する予算措置等の目処が立ったことなどから、処理の方法等について詳細な再検討を始めた。有機物資料の保存処理を得意とする業者等から意見を聴くとともに、今回処理の対象となる巣の素材や落葉落枝の固化・寸法安定化に効果のある薬剤の選択、浸潤（注入）方法等を検討した。

接着固化・寸法安定化に用いる使用薬剤は、展示や移動の際に振動や衝撃による標本の型崩れを防ぐこと、巣を構成する落葉落枝の過乾燥や経時劣化による変形を防ぎ採取現状の色彩や質感を長期にわたって維持すること、処理の回復困難な失敗を極力回避することが可能で、かつ処理完了後に起きうる破損等への対応も極力容易であること、を実現するため、次の要件を満たす必要があった。

- ①ハイマツの落葉落枝の集積を確実に接着して十分な強度を確保すること。
- ②処理対象の落葉落枝と薬剤自体が変色しないこと、また標本が濡色とならないこと。
- ③処理過程で問題が生じた場合、行程の後戻り、または復元が可能なこと。

そこで、エポキシ樹脂やポリエチレングリコール、ポリエチレングリコールジメタクリレートを含む、さまざまな樹脂・接着剤を検討したが、最終的に、上記①～③の条件を満たす薬剤として酢酸ビニル樹脂系の接着剤を選択することになった。

当該薬剤を使用した標本処理に実績のある数社を業務委託先候補として検討し、最終的には、株式会社西尾製作所に標本の保存処理と保存・展示ケースの製作を依頼することとし、同年10月1日に標本の状況確認から作業を開始し、同年度内にすべての処置作業を完了した。

## 2. 標本調整の実際

手順の概要は、保存処理に先立ち、あらためて燻蒸を行ったのち形状固定・寸法安定化の保存処理を行い、最後に、展示・保存用に特製した架台に標本を固定し、これをケースに収納する、というものであった。以下に、各工程ごとの詳細を記す。

### (1) 燻蒸

処理工程を実施する前に次の薬剤と方法によって再度、標本の燻蒸を行った。使用薬剤は、日本液炭株式会社製「エキヒュームS」<sup>(4)</sup>。薬剤量は、約150g。燻蒸方法は、包み込み法（標本をシートで覆って燻蒸ガスを注入する）に依った。

標本の形状に影響を与えないようプラスチック段ボールで周囲を囲み（写真1-1）、標本に直接ガスがかからないように、ガス注入ホースの噴出口にカップを被せ（写真1-2）、ブルーシートで全体を包み、気化器を用いて時間をかけて薬剤を注入した（写真1-3）。注入後48時間の暴露処理を施した後、薬剤を抜き、完全換気に1日放置した。なお、処理中は適宜濃度の監視を行っている。

### (2) 保存処理（形状固定・寸法安定化）

一般に鳥類の巣といえば、多くの人が思い浮かべるのは、樹上に営巣されるスズメ目の巣などのように、親鳥が材料を運び、それを編み絡めるように造作した巣の形姿であろう。しかし、ライチョウの場合は大きく様相が異なり、先述のとおり、巣材などが互いに絡み合うようなことはなく、その場の植被や落葉落枝などが、営巣中の雌の体の動きによって巣の形に整えられる。したがって巣は、脆く崩れやすく、その形状は容易に変形しうる。ゆえに、採取された標本の形状維持には、薬剤による巣素材（落葉落枝など）同士の接着固定と寸法安定化が必要である。この工程で、巣の構成要素（落葉落枝など）同士を相互に接着し、一つの標本ブロックとして固定する。

今回の処理では、手順によって濃度の異なる酢酸ビニル樹脂系の接着剤を使い分けて固化を徐々に進めた。薬剤には、昭和電工株式会社製「ビニロールS」<sup>(5)</sup>を用いた。これは酢酸ビニル樹脂系接着剤で、メタノールで容易に溶かすことができ、黄変が少なく、固化後は安定する。溶液の濃度（ビニロール／メタノール）は、最初は5%、表面固化後は7%、仕上用には10%を用いた。以下にその手順の詳細を記載する。

#### 手順① 側面固化

最初に断面部分（外側面）から固化作業を行う。形状を損なわないように、5%溶液を霧吹で丹念に噴霧して軽く固定を行う（写真2-1）。吹き付け後24時間乾燥させ、固化状態を確認する。ある程度固化が確認できた段階で、上面（産座面）の固化作業へと移る。

#### 手順② 上面固化

上面（産座面）は、7%溶液を用い、まずは羽毛を避けながら、ピペットを用いて内部に十分に行き渡るよう細かいピッチで注入を行う。この際、底面にはプラスチック段ボールを敷いたまま作業を行い、標本ブロック内を流下する薬液の受皿とする（写真2-2）。

ピペットで十分に薬液を注入後、さらに深いところまで行き渡るよう、注射器を巣材の間に差し入れて薬液を注入する（写真2-3）。このとき、注射器の細い先端を利用して、その形状を損なわない範囲で羽毛を軽く止める。

1日1回この作業を行い、2日間置いて、計3回繰り返す。

#### 手順③ 乾燥1

常温下で1週間乾燥させる。

#### 手順④ 追加固化

まず、形状維持ができていのかどうかを確認する。慎重に軽く指で触れ、固化が不十分と思われる



箇所に溶液の追加注入を行って再度乾燥させ、固化を強固なものにする。

#### 手順⑤ 裏向け

まず下敷のプラスチック段ボールを剥がす。プラスチック段ボールと標本ブロック（巢体）の隙間にメタノールを流し入れて薬液（ビニロール溶液）を溶解し、プラスチック段ボールと標本ブロック（巢体）を分離する。その際、慎重にヘラを入れ、両者の縁を切る。切り離したのち、標本ブロック（巢体）を裏返す（写真2-4）。

#### 手順⑥ 固化の強度確認

裏返した標本ブロック（巢体）を慎重に両手で支持しながら、強度を確認する（写真2-5）。

#### 手順⑦ 裏面固化

裏側からも薬液を注入する。その際、表（産座面）側に流下・滲出しないよう注意し、手順⑤で溶かした部分にも再度薬液を加える（写真2-6）。

#### 手順⑧ 乾燥2

裏返した状態で裏側の乾燥を行う。半日放置して乾燥させ、さらに表に返して乾燥させる。のち常温で1週間乾燥させる。

#### 手順⑨ 固化の強度確認・追加固化・乾燥3

巢材が動かない状態になっているか強度を確認する（写真2-7）。巢体の素材自体が折れやすいため、念入りに状態を確認しながら、固化の追加措置として表面から10%溶液をスプレーガンで軽く吹付ける（写真2-8）。そののち十分に乾燥させ、固化・保存処理を終了する。

### (3) 展示用架台への固定と展示ケースへの収納

固化・保存処理が完了してもなお、標本ブロック（巢体）は脆く壊れやすいことから、これを保護・固定する傾斜台・標本架台と、展示・保存用収納容器（ケース）を製作した。保存処理を完了した標本ブロックを架台に固定して標本と演示具の複合体となし、これを展示・保存用ケースに固定・収納して、〈ニホンライチョウの巢（立山・室堂平採取）の標本〉一式とした。詳細は、次のとおり。

#### ①傾斜台

標本（ハイマツ落葉落枝層）を現地にて採取する際、その底面は、落葉落枝層最下部に沿って切り出されたが、直下に接する砂礫層（落葉落枝層の基盤）との界面はわずかに傾斜しており、切り出された落葉落枝ブロックは、水平から約8°前落ちに傾斜する底面をもつ。この傾斜を再現し、標本を収納したケースを水平に設置したとき、標本の傾きが現地と同じになるよう傾斜台を作製した。

傾斜台本体は、5 t アクリル板を用いた傾斜天板と傾斜角に合わせた楔形の左右側板の貼り合わせで構成され、左右の楔形側板の縁外側それぞれ2箇所（計4箇所）に、穴をあけた小矩形アクリル板を接着して展示ケース木製台座とのビス止用ビス穴代（あなしろ）とした。傾斜架台天板には、標本ブロックを深く刺突して直接固定するピンを4箇所に配置した。ピン本体はφ 1.6mmのピアノ線、アクリル板に固定されるボルト部はM4トラスボルトとし、これらをロウ付け加工し防錆のためのウレタン塗装をピン全体に施した（写真3-1）。

#### ②標本架台

傾斜台天板と同寸に切り出した10 t アクリル板を用意し、その中央部に、標本ブロック底面輪郭に合わせて削り抜いた落とし込み穴を設ける。この穴と傾斜台天板が作る「受け」が標本ブロック底面を支持する。さらに、落とし込み穴の左右両側と背側に保護板（5 t アクリル板）を接着して立て、標本架台とした。

保護板は、標本ブロック周囲を覆って切出面を表現する役割を併せ持つ。概ね、両側面・背面とも、切出面（自然面ではない切断面）上縁の形状に似せてアクリル板を加工した。ただし、ブロックの崩れ落ちた隅部などでは曲面に追従する表現が困難で、厳密な表現はできていない。いずれも切断面の

一部を表現するにとどまった。特に背面は全面が切出面だが、中央部右寄りの切断面部分を概ね表現するのみとなっている。なお、先述のとおり、標本ブロックの切出面は、当該ブロックの背面全体、左右両面のそれぞれ一部、底面全体、の4箇所である。

次の手順としては、この標本架台を傾斜台天板に固定し、そこに標本ブロックを嵌め込む。

### ③標本ブロック+傾斜台・標本架台アセンブリの構成

傾斜台に標本架台をステンレスボルト（四隅に各1箇所、計4箇所）で固定し、定位置に標本ブロックを嵌め込むと同時に、4本のピンを標本ブロックに刺突して直接固定する。この傾斜台・標本架台・標本ブロックが構成する演示具・標本資料複合体を、ここでは仮に〈標本ブロック+傾斜台・標本架台アセンブリ〉（以下、〈標本架台アセンブリ〉）と呼称する。今後これを、標本の展示・移動・保存に関わる当該博物館資料の最小不可分構成単位として扱う。〈標本架台アセンブリ〉から標本ブロックを分離することは可能だが、原則としてそのような取扱運用は行わない。当然ながら、通常は〈標本架台アセンブリ〉がケースに収納された形態を常態として取り扱う。

### ④展示・保存用ケース

〈標本架台アセンブリ〉を、展示・保存用ケースの木製台座上にビス（ユリアねじM4）で固定し（写真3-2～6）、アクリル製保護カバーを被せて木製台座にユリアねじM3で固定する。当該ケースが事実上、外部からの干渉に対する標本保護の機能を担う。

展示・保存用ケースの木製台座は、縦500mm×横500mm×高さ40mmの平台状とし、表面は黒色のメラミン樹脂化粧板の貼付仕上とする。木製台座天板には〈標本架台アセンブリ〉固定用のねじ受を4箇所、両側面にはアクリル保護カバー固定用のねじ受を左右2箇所の計4箇所に設ける。アクリル保護カバーの大きさは、縦513mm×横513mm×高さ302mm（外寸）。M3ユリアねじで木製台座に固定する（写真3-7）。

以上が、今回のニホンライチョウの巢の標本製作の概要である。

今後は、付帯情報の整理や試料（標本）名称の検討・確定、ネームプレートの作成などを進めてゆくことになるが、当該営巣地点周辺の植生環境の記載が終了した時点で、当該営巣に関わる付帯情報を整理して当該標本とともに紹介するバックパネル等の製作も必要であり、これらが揃って、はじめて様々な場面での活用が期待される。また、国立公園内の典型的なライチョウ繁殖域で採取され、かつ当該営巣や当該つがい（番い）の履歴記録を伴うライチョウの巢の標本は、国内でもごく限られており、貴重な標本といえる。

### 【謝 辞】

当該標本の採取にあたり、次の機関・団体から多大な協力、指導・助言をいただいた。ここに記して感謝を申し上げる。

### 【指導・教示】

中部山岳国立公園立山自然保護官事務所、中部森林管理局富山森林管理署、富山県生活環境文化部自然保護課、富山県教育委員会生涯学習・文化財室文化財班

### 【指導・協力】

富山雷鳥研究会（特に、松田勉・大塚伸の両氏からは格別の配慮をいただいた。）

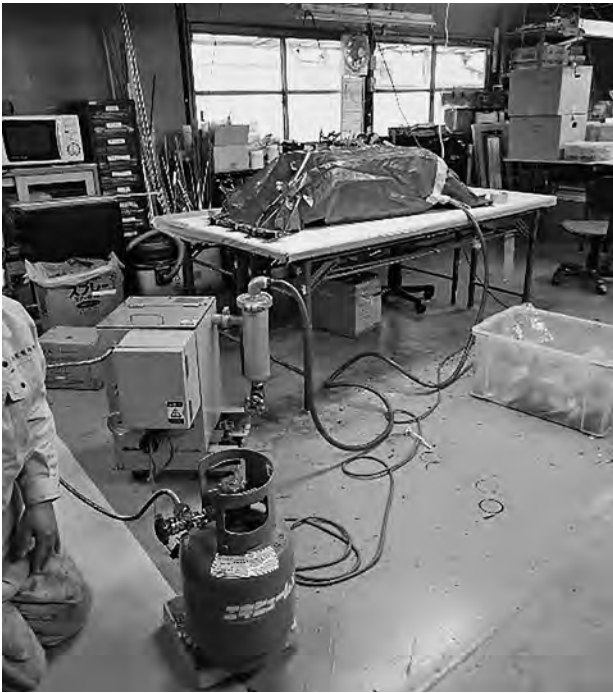
作業状況写真



1-1. 標本ブロックの燻蒸用養生の状況



1-2. 燻蒸ガス注入口の状況



1-3. 燻蒸ガス注入状況



2-1. 霧吹による標本ブロック側面固化作業



2-2. 標本ブロックの上面(産座面)固化作業  
(上部からの薬液注入)



2-3. 標本ブロック深部への薬液注入



2-4. 標本ブロックのプラスチック段ボール(固化作業台座)からの剥離・裏返し



2-5. 手による標本ブロックの固化強度の確認



2-6. 標本ブロック裏面固化作業



2-7. 標本ブロック裏面固化乾燥後の状態



2-8. 標本ブロックの追加固化作業



3-1. ケースの木製台座に傾斜台+標本架台を仮置  
(前方右寄りからの俯瞰)



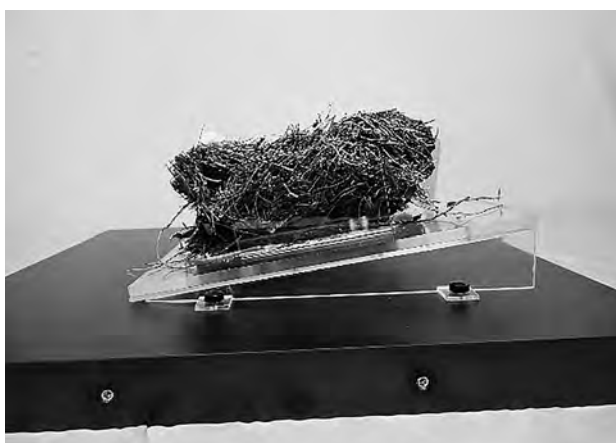
3-2. 木製台座に固定された〈標本架台アセンブリ〉  
(前方からの俯瞰)



3-3. 同 (前方からの俯瞰)



3-4. 同 (左側面観)



3-5. 同 (右側面観)



3-6. 同 (背面観)



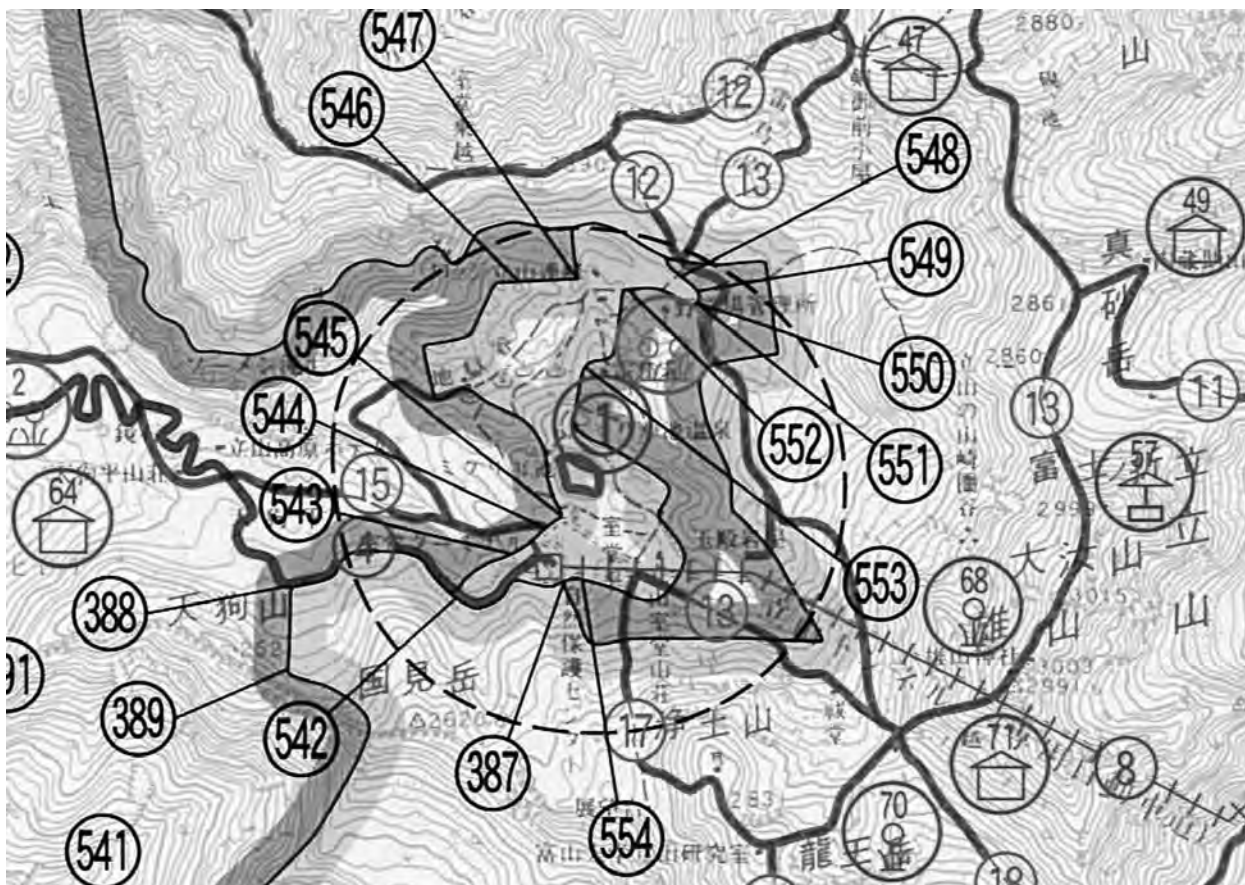
3-7. 〈ニホンライチョウの巣（立山・室堂平採取）の標本〉（前方左寄りからの俯瞰）

[註]

- (1) 富山県立山博物館令和元年度前期特別企画展『立山ふしぎ大発見!』(富山県立山博物館、2019)
- (2) 立山周辺の規制区域。濃い色が特別保護地区、やや濃い色が特別地域(第1種及び第2種)『中部山岳国立公園』(地図)(環境省ホームページから引用)



- (3) 室堂平における第2種特別地域(中央の室堂が含まれる黒線で囲まれた範囲)『中部山岳国立公園区域及び公園計画図』(環境省ホームページから引用)



- (4) 酸化エチレンを主成分とする「エキボン」の後継商品として、HFC-134aを噴射剤とした混合ガス剤。殺虫力、殺菌力があり、主成分酸化エチレンは、エキボン当時から数十年に渡り使用されており、長期間材質影響がないと実証され

ている。藪本学（日本液炭株式会社 事業統括本部開発商品事業部ガス営業部）「文化財を後世に残す責務と文化財保存の現状」（文化財虫害研究所 [編] 『文化財の虫菌害』68号所収、文化財虫害研究所、2014年12月）16頁

- (5) ビニロール®はアクリル共重合樹脂、酢酸ビニル共重合体を主体とした溶液タイプの合成樹脂。UV、熱による再剥離を目的にしたダイシングテープやカッティンテープ用粘着剤、高耐熱性粘着剤、屈折率を調節した粘着剤等、幅広く使用されている。品名(現行)はビニロールSH、主成分は酢酸ビニル、溶剤はメタノールで主用途は一般接着剤である。(昭和電工株式会社ホームページから引用)





## 海保青陵の立山資源開発提言に見える本草学との関わり —津田随分齋を中心に、本草家を介した情報交流の視点から—

吉野 俊哉

### はじめに

江戸後期に活躍した異色の経世家海保青陵（宝暦5年〈1755〉～文化14年〈1817〉以下、青陵）は、商品経済が発展した社会の現状をふまえ、富国策による藩財政の立て直しを各地で具体的に説いていった。

その施策を「流通の改革」と「産品の増産、品質向上、新産物の開発」とに分けて見たならば、後者には技術革新とともに、物産学とも呼ばれた天産物についての実学的な本草知識の広がりも影響していたと思われる。享保以降の全国的な産物調査の実施や各地で進められていた藩による産物政策でも、それが重視されていくからである。

青陵の経世論には、弟に家督を譲って各地を遊学しての見聞や幅広い交遊から得た情報のあったことが指摘されており<sup>(1)</sup>、その中には具体的な産物情報も散見される。それらを見ると、本草学に造詣の深い医家などと交遊があり、そこから得た情報が反映していたのではないかと思われるが、これまでそれらが本草家との関わりからの視点から論じられることはほとんどなかった。

筆者はこれまで近世後期に隆盛した本草学の諸相を調査する中で、それらの知識が様々な場面で社会生活に影響していたと感じてきたことから、青陵もまた幅広い交遊の中で具体的な本草学の情報に接し、それを産物開発の具体的な提言に反映させていたのではないかと考えるようになった。

青陵は、金沢に滞在した文化2年（1805）夏から3年（1806）8月までの一年あまりの間、加賀藩で産物政策の中心にあった村井長世などの重臣や領内各地の商人、十村らと交流を持ちながら、藩の財政政策について自由な立場で情報を交換していた。そして、金沢を去る直前（文化3年7月1日～4日）には立山へも訪れており、山中での様々な見聞を書き残している。

その後、同年9月に京都に居を定めて以降は遊学せず著作に専念している。金沢滞在中の見聞に基づく『綱目駁談』、『陰陽談』もその時に書かれており、同書の中では加賀藩の産物政策に問題点を指摘し、藩の財政を豊かにするための経済政策を詳述している。例えば藩札発行、大坂商人からの資本導入の他、藩財政再建に資する領内の鉱物資源や薬草等の開発、薬種・塩硝・織物等の産物を改良・増産し、藩の保護で藩外に売り捌き増収を計るなど積極的な富国政策の提案である。

この二つの著作いずれにも、立山山中での見聞を細かく引用しながら山中に埋蔵する地下資源開発の可能性を指摘した部分が見られるが、これは立山での資源開発の可能性に言及した最も早い時期の指摘だったとされるものである<sup>(2)</sup>。その内容は科学的に正確とは言えない部分があるとは言え、具体的な鉱物資源の名前を挙げその価値を述べる部分には、天産物を実生活の豊かさに結びつけるために理解しようとした近世本草家と同様の視点を感じられる。青陵自身が本草学に傾倒していたとは思われないが、立山山中の鉱物に関する記述を見ると、本草家や医家との交遊を通して鉱物資源の種類やその活用について初歩的な情報知識を得ていた可能性が強く感じられる。

当館では、青陵が京都へ移った直後の文化3年9月に、その2ヶ月前の立山登山での見聞を実弟へ書き送った直筆の書簡（以下、『書簡』）を所蔵している。その内容には立山登山の見聞を伝えるだけでなく、後に『綱目駁談』、『陰陽談』に引用した立山山中の資源開発との記述とのつながりを考える上でも重要な内容を含んでいると思われた。

そこで小論では『書簡』の内容を手掛かりに、立山山中での見聞に見える本草学的な視点の存在とその背景

に垣間見える本草家との交遊、そして同時代の本草家たちの情報ネットワークとの関わりを指摘したいと思う。

次章以下、まず『書簡』と『綱目駁談』、『陰陽談』に引用された立山での見聞を対照しながら、青陵の立山登山の実態を紹介する。そして青陵が立山山中に埋蔵すると指摘し開発の必要性を提言した具体的な地下資源の記述と本草学の情報や知識に着目して、『綱目駁談』の中で、名前を挙げてその知識と人物を称賛する本草家津田随分齋の存在を中心に、当時の金沢や上方の医家、本草家との交遊を通して、青陵が著作の中に援用した本草学関連情報を入手していた可能性について考察したい。

## 1. 当館が所蔵する『書簡』について

『書簡』は、当館開館直前の平成2年（1990）に建設準備室が古書店から購入したものである。その経緯と『書簡』の梗概等については高瀬保氏の論考に詳しい<sup>(3)</sup>。

縦15.8cm、横218.8cmの巻紙（本紙部分）に書かれたもので、一廻り大きな乳白色の厚口和紙で裏打ちし軸を芯にして巻かれた簡易な卷子の体裁になっているが、見返しや発装、巻紐はない。

青陵は、書簡を出す際には手許に写しを残し、宛先、発信の日付、さらに相手からの返書の日付なども追記して保管していたようで、この『書簡』はそのような写しとして作られたものと考えられている<sup>(4)</sup>。

『書簡』の端裏書には、

九月十一日封／同月廿五日着／十月朔日状封ス／禎文賢弟 鶴／萬福

とある。

宛先の「禎文賢弟」は、安永5年（1776）22歳の時に家督を譲って家を継がせた3歳年下の実弟角田彪（以下、彪）を指す<sup>(5)</sup>。「鶴」は青陵の号「阜鶴」の略で、書簡や著作の中で自称として用いている。

青陵は、儒学者角田青溪の長男として江戸で生まれ幼年より宇佐美瀧水に儒学を学んだ。後に儒者として学問で身を立てるべく自由な生き方を求め、彪に家を継がせ自身は曾祖父の姓である海保に復姓した。以降江戸や京都で学塾を開き、各地を遊学する自由な生き方を実践していった。その一方で、彪のことは自分とは対称的で真面目な性格として一目置いていたようで、『書簡』では敢えて「賢弟」としているのではないかと思われる。『稽古談』では彪を評して「鶴舎弟一人アリ、鶴トチガヒテ甚敬謹之性質也（中略）舎弟ハ敬謹家ニテ、且、幼少ヨリアマリ他所ヘモ出ズ、多クハ両親ノ側ニ給仕セリ、鶴ハ幼少ヨリ他処ヘ出デ、友達多シ」としている点にも同様の意識が窺える。

彪は尾張藩に仕え当時は江戸藩邸にいたので、『書簡』の本通は江戸へ届けられていたことになる。端裏書には「九月十一日封」と書かれているが、本文の末尾には「重陽後一日封」とあるので、発信は書き上げた翌日だったと見られる。そして、青陵が9月11日に発信したこの書簡に対して彪は10月1日付で返書を寄せ、それには青陵からの書簡は9月25日に届いていた旨が書かれていたものと推定される。青陵は写しを作った際に先ず備忘のため発信日を記録しておき、その後に彪からの返書を受け取って日付を書き足して保存した<sup>(6)</sup>ようで、『書簡』を熟覧した際、筆者には「九月十一日封」の部分とその後の部分は墨の濃さが違うように見えた。

『書簡』の記述<sup>(7)</sup>に拠れば、青陵は立山を訪れた翌月（8月）11日には金沢を発ち、途中越前府中で20日を過ごしその間に講書を行っている。そして9月1日に越前を出発した後大津に2日間留まり、9月7日には京都に到着した。そこで、きちんとした居所を決めるまでは木屋町の銭屋平兵衛の許で仮住まいしている。『書簡』の発信は9月11日なので、これは青陵が京都へ着いて間もなく、取り急ぎ到着の報告と近況を知らせるために出されたものであった<sup>(8)</sup>。また仮住まいした際には竹中文卿と近江屋彦右衛門の世話があったので、彪には、ついでが有れば彼らに（彪から）礼状を出して欲しい旨を記している<sup>(9)</sup>ところを見ると、彪もこの両者とは旧知だったと見られる。

青陵の著作には、交遊する人士から意見を求められたことへの返書とした、特定の相手の立場や個々の問

題点に合わせた持論を「談」として書き残したものが多く見られる。その内容はプライベートな部分にも触れていることから、そのような著作は刊行を意図していなかったものと考えられている<sup>(10)</sup>。それらも『書簡』同様に漢字と片仮名を用い、見聞を事例にした平易な文章で相手に語るような文体で書かれている。この「談」という青陵の著作の体裁は、まさに特定する相手に語り聞かせる助言を速記したようでもあり、『書簡』と大変よく似ている。この類似を見ると「談」として書き残された著作には、この『書簡』のように手許に控えて残された内容を下敷きに、加筆修正して著されたような事情が推察される。

## 2. 『書簡』と『綱目駁談』、『陰陽談』に記された立山山中の具体的な見聞

『書簡』、『綱目駁談』、『陰陽談』それぞれに記された立山山中の記述を比較してみると、いずれでも地獄谷については独自の視点が披瀝されているが、そこに文学的な潤色などは見られない。書かれた時期は『書簡』が最も早いので、それ以降に書かれた2つの著作は『書簡』の内容を下敷きにしつつ簡略にしているものと思っていたが、むしろ後年に書かれたものの方が詳しい部分もある。『書簡』とは別に道中日記のような里程など細部に亘る記録が別に存在したのかもしれない。

『綱目駁談』は、「加賀藩で交遊した大夫」に宛てて藩の産物政策への進言として書かれ、公表を意図しない私的な内容を含む。青陵の著作を研究してこられた長山直治氏はこの「大夫」を、この時期に加賀藩で産物政策を推進した産物方主付村井長世と指摘している。また『陰陽談』は文化10年(1813)に執筆され、「加賀藩領内の村に住む藩政に深く関わる商人」に宛て藩の富国策を論じたもので、青陵の研究者蔵並省自氏はこの「商人」を越中戸出村の武田尚勝(竹村屋茂兵衛)と推定している<sup>(11)</sup>。武田は文化8年(1811)に京都で青陵が講義した『洪範』の筆録を、後に『洪範談』として刊行するなど深い交流が窺える人物でもある。

『綱目駁談』、『陰陽談』はいずれもテーマを加賀藩の現状分析と財政立て直しとしており、その両方に立山での見聞が事例として引用されている。中心となるのは地獄谷で見た鉱物資源だが、それ以外にも山中での見聞が詳しく書かれていることから、当時の登山記としても史料価値があるとともに、青陵の立山への印象や山中で関心が高かった場所を知ることができる。

以下、まず登山道に沿った立山山中の記述を比較し、最も印象が強く、また資源についての本題となる地獄谷での見聞を整理する。

### 2-1 頂上までの立山登山道

山中での見聞を記した部分は、『書簡』では「○鶴今年ハ七月四日ニ越中ノ立山ニ登リ申候」と書き出した長文の描写が続く。具体的な地名を挙げ、おおよその里程も細かく書かれている。

仲語の案内で禅定道に沿って山頂へ登り、その後地獄谷を巡る一般的な旅程の描写はこの時代に書かれた紀行文と比べて大きな違いはない。ただ、山中の景色に対する個人的な感想などはほとんどなく、見たままの登山報告の要素が強いようである。

#### ① 藤橋

藤蔓ニテ谷川へ橋ヲ掛ケタルモノ也 (『書簡』)

文中に感想は書かれていないが、ここで転倒して難儀したことを詠んだ漢詩<sup>(12)</sup>が添えられている。

#### ② 「桑谷ノ休憩所」

桑溪トイフ処ニ辻堂ノ様ナルモノアリ 辻堂ハアロフハズナシ 唯亭ノ様ナルモノ也 (『書簡』)

当時は、桑谷には休憩のために茶屋があった。

#### ③ 「称名滝」

山中ニ瀑アリ 長サ三十六丁トイフ 十丁斗ハキツトアリ 幅五十間トイフ 二十間アマリアルベシ 一里コナタヨリ近ヅク事ナラズ 一里半外ヨリ望ム事也 勝妙瀑トイフ (『書簡』)

立山ノ藤橋ノ下ノ流れハ、下ハ常願寺川也、上ハ勝妙ガ瀑トイフ瀑也（中略）コノ瀑ハ立山ノ路草生坂トイフ坂ヨリマツスグニ見ユル也、瀑ノタキツボヨリ草生ノ山ノ根マデ一里半、草生ハ藤橋ヨリ三里ノボリタル処也、土人云瀑ニ一里近キ所ヨリサキヘハユカレズ、瀑ノ響ト霧トニテ進ムコトナラズト云ヘリ、其辺ニハサゾ々金玉宝物タクサンアルコトナルベシ（『綱目駁談』）

禅定道途中の名所「伏拝」から称名滝を遠望していたようである。但し、滝の感想は景色の感慨ではなく、その付近にあると考えた鉱物資源のことであった。藤橋からは、黄金坂、草生坂、材木坂など説話がある場所を通して登る道である。称名滝の高さには関心を持ったようだが、青陵の実証主義的な性格からすれば間近から滝を確かめたかったということであろう。

#### ④「弥陀ヶ原、立山温泉」

コノ辺ニハ木ナゾ一向ナシ、唯五葉ノ松ガ地ヲホフテオルギリ也、弥陀原野トイフ平坡三里アリ、コノ奇ナル草木アリ、木モ四五尺也、雪ニテノビラレヌト見ユル也、雷鳥トイフ鳥アリテ鳴ク也、コノ鳥ナニヲ食トシテ山上ニナルヤラトントシレヌモノ也（『綱目駁談』）

立山高サ室堂マテ九里八丁也。上ルコト四里半バカリヲ桑谷ト云フ。桑谷ヨリ上ヘハ弥陀原野也。此弥陀原ヨリワカル道アリテ、温泉アリ（『陰陽談』）

「五葉ノ松」はハイマツ。「奇ナル草木アリ、木モ四五尺也、雪ニテノビラレヌト見ユル也」などには植生への関心も見られる。「雷鳥」を見て、「何を食べているのか」という疑問は生活感のあるユニークな感想である。この部分は博物的な視点から本草家の採薬登山の見聞に似たものを感じさせるが、産物を見る眼は、植物や薬草ではなく鉱物や岩石などに向いていたようである。

#### ⑤「一ノ谷鎖場」

一ノ谷トイフ鎖ヲ攀（『書簡』）

藤橋ヨリ七里ホドノボリテ一ノ谷ト云フトコロアリ大キナル川也、大石ノ背ヲ踏テ石ヲ攀テノボル鎖場トイフ、鎖ニツルサガリテ上ルコト也、此川ナドモ水ニ落合フカ（『綱目駁談』）

登りは難所一ノ谷を越え、鎖場を登ったことが書かれている。

#### ⑥「室堂」

郷廩ノ如キモノニツアリ（『書簡』）

室堂小屋を倉のようとした形容は他見しない。

九里八町上レバ室堂トイフ処ニ至ル（『綱目駁談』）

#### ⑦「頂上」

室堂ヨリ五十丁ミチ一里半 又鎖ニテ登ルヲ絶頂トス 卉木モナシ 石ノ碎末斗也（『書簡』）

頂上では快晴だったようで、ご来光を拝している<sup>(13)</sup>。

室堂ヨリ一里半ノボリテ絶頂也、御前トイフ也（『綱目駁談』）

#### ⑧「劔岳」

御前トナラビテ御前ヨリモ少シ高キ山、御前ノ北ニアリ、劔ト云尖頭削立シテ数シレズ、筍ヲタクサンツミタルヨフナ山也（『綱目駁談』）

（註一劔岳を指して）ロクシヨフニテ塗りタルヨフナ山也、コノ山ナドニハ決シテ金、銀、玉、宝沢山アルニチガヒナシ、凡ソ立山ヨリ東ハ信州ザカイ也、昔シ佐々氏立山ゴヘヲシテ信州ノ松本ニ出タリト土人語レリ、然レバ人ノ通フベキ路アルニチガヒナシ（『綱目駁談』）

山中を案内する仲語の話の聴きながら道中の名所を経て頂上へ登ったことがわかる。200年以上前の佐々成政のザラ峠越えの話も途中で聞いていたことがわかるが、他の部分では信州側からの材木盗伐の横行とその改善が不十分な加賀藩の姿勢に触れている<sup>(14)</sup>ので、ザラ峠越えの話からは盗伐に来るルートの問題視したことを示している。その他に仲語から聞いていたであろう道中の景観にまつわる立山信仰に付随した説話には興味を持たなかったようで、それについての感想は述べられていない。

## 2-2 地獄谷の記録

『書簡』の記述を見る限り、具体的に青陵が興味を示し記載していたのは地獄谷である。立山では、経世家青陵は、未知の場所から尋常ではない場の雰囲気を感じ、関心のあった「礬石」、「礬石」、「雄黄」、「雌黄」といった鉱物が埋蔵する気配に注目したということであろう。立山山中には、これまで存在が知られておらず、新たに産物となるものがあるに違いないという確信のもとに、それを実証的に見聞したいという本草家が採薬に期待したような意識があったようである。

この時代、禅定に限らず様々な立場の者が立山へ登っていたが、そのような人々が書き残した紀行文や日記は登山目的やそれぞれに興味を持った事柄を中心に書いており、その視点は一様ではない。例えば、京都の本草家山本章夫が嘉永4年（1851）に採薬を目的に登山した際の日記<sup>(15)</sup>は、立山山中で目にした植物の記録が中心である。

それに対して青陵は、埋蔵する未知の資源を利用することで財政立て直しに役立つという意識で山を見、自分の経験や知識を以て産物政策に当たる役人たちを説得するための根拠としたかのように見える。青陵にとっては、本草学もそのために必要な知識の一つだったようで、地獄谷を観察しそこに具体的な鉱物名を挙げているのは、運良く立山で資源となる鉱物を目にして雀躍するのではなく、それまでに持っていた天産物の知識と場の持つ力から、そこに豊富な資源が埋蔵している可能性を感じ取ったということであろう。

### ⑨「地獄谷」

室堂ノ北ニ地獄谷トイフモノアリ 礬石礬石雄雌硫黄杯甚多シ 地中ヨリ吹き出ス事花火ノ通也 ヲソ  
ロシキ事言フ斗ナシ（『書簡』）

地獄ヲハ二時バカリ見物セリ、地獄ノ小シ南ニ池アリ、水ノ色藍ノ如シ、サイノカワラト云フ也、凡ソ  
コノ辺ハ明礬、礬石、硫黄アレバ、甚ノ宝物産スルコトナルベシ（『綱目駁談』）

室堂ノ北ニ地獄トイフ処アリ、明礬硫黄燃出シテ昼夜烟ノノボルコト二三十ヶ所アリ、アレハツイヘナ  
ルモノ也、皆モヘテナクナリテシマフ也（『綱目駁談』）

燃へ出ス穴大ナルハ径リ二間モアルベシト思ハル、ソノ穴一パイニ烟ノボル、其響遠雷ノ如シ、中々チ  
カヅカレス、近ヅカバサゾ>>オソロシカルベシ、地獄ノ中ニ血ノ池トイフモノアリ、マツカナル水也、  
朱ナルベシ、貨殖伝ニ山上ニ朱アレバ其下ニ金アリト云ヘリ、決シテ金気ナルベシ、凡ソ地獄ノ吹出ス  
烟ノ色種々也、土人名ヲツケテ紺屋ノ地獄、烟草屋ノ地獄、団子屋ノ地獄ナド>>云、其色ニテ其下ニアル  
モノヲ知ルベシ（『綱目駁談』）

立山ノ室堂ノウシロニ、地獄トイフ所アリ。余、登山セシ時ニ、半日バカリ地獄ヲ見タルコトアリ。  
地ヨリ硫黄・焰硝ノフキ出ス所也（『陰陽談』）

青陵は仲語から地獄巡りの案内を聞き、半日近くかけて地獄谷周辺を隈無く観察して回っていたことがわかる。金沢を離れて約一ヶ月後に京都から彪に書き送った『書簡』に記した立山登山見聞の感想には、

加候ハ古風ニテ古法ニ念着シテ 世ノ流行ヲ知ラヌ国風ユヘ 禁シテ礬硫（註一明礬、硫黄）ヲ取ラズ  
飛州信州ヨリ盗ムヨシ也 大方本藩ノ木曾ノ民杯来ル事ナルベシ

とある。有用な資源があることの驚きやその開発の可能性ではなく、加候（加賀藩主）の産物への関心の低さ、農本政策に固執する藩上層部の頭の固さを揶揄する内容のようにも見える。しかもそれに続けて、一年あまり滞在した北陸の地に対する感想には、

北国ノ上京候得ハ 別而京都ハ美敷 天気杯迄日々美日也 鶴北国ニ二年居 北地之様子見候ニ 土地  
ハ富タレトモ夷狄ナリ

とある。これらを、身内である彪にのみ伝えた本音であったと考えるならば、青陵自身は加賀藩政の旧態依然とした雰囲気になじめなかったこと、北陸の風土にも好感を持っていなかった恨み節とも思われる部分である。

### 3. 立山の鉱物資源の開発提言とその背景

地獄谷を一見して、鉱物資源について前述のような指摘をしていることから見ても、これが物見遊山の登山に終始したものでなかったことは確かであろう。しかし、何の知識もなく初めて山中で見た地形から資源の存在や鉱物の種類、用途などを直感することはできないだろうから、この指摘の背景には基本的な本草学、特に鉱物の知識と、事象は「理」で合理的に説明し理解できるとした青陵の独自の視点があったと見てよいだろう。前者の知識については、奇石類の玩弄ではなく鉱物の特徴や形状、有用性などを、それまでの本草家との交遊の中から少なからず得ていたものと思われる。

そして青陵は基本的に、資源の埋蔵が有望な土地であればそれを開発し、産物として売り捌き収益の増加を目指すことを企図していたと考えられる。そのために必要な知識は本草学に長けた者から得、技術や資本は江戸や大坂の山師や商人から導入するといった筋書きを持っていたと思われる。それまで各地で見聞した事柄や築いた人脈は、このようなところにも役立てられたのであろう。

ここで、青陵が立山での資源開発に注目した根拠は2つあったと思われる。1つは、青陵の思想の基底にある実証的な視点から、「理」に基づいて資源の存在を信じていたこと。もう1つは加賀に来る前から各地で見聞した類似例や医家、本草家らとの交遊から得た基本的な本草学的知識、天産物の存在やその利用価値には少なからぬ関心があったであろうということである。但しここで考慮しておきたいのは、青陵が加賀藩の招聘で来藩した訳ではなかったことである。これは、藩に対して比較的自由に現行のやり方を批判的に提言する立場では好都合だったと思われる。しかしその一方で、加賀藩がそれまで独自に持っていた立山の硫黄などにかかわる情報や、奥山廻りによる信州側との国境管理の実態に関しては青陵には十分に伝わっておらず、それらは提言に反映されていないようである。青陵は、藩が御締山にして立山山域での自由な開発と販売を禁じていた点に批判的な目を向けていたためか、藩の方でも100年以上前に立山の硫黄生産に注目していたこと<sup>(16)</sup>には言及していない。

#### 3-1 青陵の「理」に基づく視点

立山地獄谷で特徴的な臭気を伴って噴出する硫黄はともかく、礬石（砒素を含む有毒鉱物）、礬石、塩硝、明礬が沢山あるはずというのは、青陵の「理」に基づいた見方である。青陵の「理」とは、『陰陽談』でも「凡ソ理ハ天地間ノスジユヘニ、コノ理ニテミチビキ、理ニテトケバトケヌコトナキコト也」と述べる、「必然性」の意で、事象を客観的、論理的に把握した事実に基づき、そこから当然の帰結として結論づけられる結果を導く原理とも言えよう。

青陵は、その教養の中にあつた儒学的な「理」や桂川甫周らを通して触れた蘭学由来の科学的、合理的視点の影響を受けた思想を形成したが、その独自の視点<sup>(17)</sup>を元に自然界を「理」で捉え、立山の天産物を見たときにもそれを当てはめ、地形や地勢を根拠に、そこに資源があるのが道理であると自信を持って断言する。青陵の「理」は、現象の因果関係を重視すると言う意味では科学的と言えるのかも知れないが、逆の意味でこれは青陵が本草学者ではなかったことの証左とも言えるだろう。だから青陵にとっての本草学とは、あくまで産物政策を論じる必要から自然界に存在する資源の種類、産物となる価値を見出す手段の一つという位置づけだったと思われる。

しかし前述の『綱目駁談』にあつたような、地獄谷で「血の池」が酸化鉄のために真っ赤なのを見て「マツカナル水也、朱ナルベシ」と、それが朱（硫化第二水銀）の埋蔵を示すと断定したり、「理」に照らしてその場所に金があるのは当然とする根拠に、実態を離れた「貨殖伝ニ山上ニ朱アレバ其下ニ金アリト云ヘリ<sup>(18)</sup>」とする古代中国の道家思想を当てはめたりするのは、観念的な理解であつたとしか思われぬ。

同様に、天地の「理」に拠る立山山中は、

此地脈ニハ、焰硝・明礬沢山ニアル理也。凡ソ天ヨリ降ルモノハ六角ナリ。（中略）地下ニアリテ、ホ

リ出シタルモノハ皆四角也。明礬・焰硝凡ソ硝トイフ類ハ皆四角也。立山ハ此四角ナルモノ、多フ出ル山ト見ユル也。硝ノ類ノ多フ出ル也。地獄ノ烟ノ立騰ルコト、大ヒナル地獄ハ烟ノ上ルコト五六丈モ上ルベシ（『陰陽談』）

甚大ヒナルハ、立山ノ御前トイフトコロヨリ、ヨフ見ユル也。勢甚猛ナルモノ也。フキ出ス煙ナルコヘ也。烟ノ色イロ々アリ。黄ナルモアリ、青ナルモアリ、白キモアリ、黒キモアリ。余思フニ、コレハ吹出ス物ニヨリテ、色チガフコトナルベシ。何ノ色ハ何ノ物也トイフコトハ、イマダセンギセネドモ、烟ノ色ニイロ々アルハ、物カツイロ々アルニチガヒナシ。明礬ハ何色ニ烟アガルモノ也、焰硝ハ何色、硫黄ハ何色トイフカチアルモノナルベシ（『陰陽談』）

是モ大坂ノ道修町ナドニテキ々アワセタラバ、決テワカルベキ也。イヅレニモ立山ハ産物ノ多キ山ナルベシ。木モハヘズ、草モハヘヌコヘニ、是明礬、硫黄ノ類ナクテハ叶ハヌ也。是天地ノ理也。何モ生ゼヌトコロトイフハナキコト也。草木ノ生ゼヌトコロハ、草木ホドノ財貨ヲバ、是非生ゼネバナラヌ理也。木ハ五葉ノ末ヨリ外ニハナシ。鳥ハ雷鳥ナラデハオラズ。獸ナドハタヘテオラヌコト也。是水晶カ、玉ノ類カハ是非ナフテ叶ハヌ理也（『陰陽談』）

などの記述に見られるものであった。

とは言え、これらを非科学的な荒唐無稽のことと読み解くことは、ここでは意味がないだろう。青陵の意図は、見たままの事象の因果関係を重視することで、それまでは注目されて来なかった資源を開発することの重要性に目を向けさせることだったと思われるからである。その上で「是モ大坂ノ道修町ナドニテキ々アワセタラバ、決テワカルベキ也」と言うのは、加賀へ来る前から大坂の道修町界隈で石薬や鉱物の知識に近い薬種商たちとも親しく交流し、人脈を持っていたことが前提にあったと考えてよいだろう。

当時、幅広い天産物を民生厚用に役立てる知識の集積は本草学の範疇である。青陵はそれを、後述する津田随分齋ら本草家との交遊に与った部分が大きかったと考える。しかし、青陵の関心が本草学に傾注していった形跡は見られない。

青陵が立山では地獄谷に興味を持ち、そこから望む山々も資源が眠ると捉えていた点は非常に興味深く、仮にその開発が成功していたなら加賀藩の財政にもいくらか影響を与えた可能性はあろう。とは言え、青陵自身には実務的な鉱物資源開発の経験は無く、この点は本草家として知られた平賀源内が中津川や秋田藩で鉱山開発を提言、かつ指導していたのとは違う。青陵自身が直接技術的な指導を行うのは現実的ではなく、ここでは自らが理論を説くことで、藩の産物政策で資源の活用が財政の改善につなげられることの動機付け、或いはその可能性・方向性を示したものと見るべきであろう。青陵の説いた立山での産物開発とは、財政改善のための経済政策の可能性、或いは動機として挙げているものであって、本格的な資源の開発に伴う採算や技術を含むものではないということである。

つまり青陵の提言は、「鉱山開発の助言」ではなく、今後それまで目が付けられていなかった新たな資源の存在に着目しそれを富に変えることの重要性を立山来訪で見聞した埋蔵資源を事例として示したことに意味があったと考える。

### 3-2 立山を訪れる以前からの見聞や経験に基づく視点

青陵の前述の提言の背景には、以前からの幅広い交流で得た知識や人脈があった。それまで開発の手が入っていない立山山域で新たな産物を開発し、他藩へ輸出することで増収を計って藩財政を改革するという構想には、具体的な輸送や販売ルートの開発し品質の向上といった現実的な問題が関わってくるが、青陵はそれまでの知識や経験からそれらの問題をどう見ていたのか、著書の記述から辿ることにする。



### 3-2-1 江戸・大坂での人脈、情報

本格的な開発を行うためには、資金や技術が必要なことは青陵も十分に分かっていたはずである。そこで一連の提言で注目されるのは、青陵の著作に現れる「山師」という今ではやや胡散臭い響きも感じる語である。これも資金力、知識や技術、或いは販売網を持った者を指した「藩外の資本と技術」の意のメタファーだとすれば、藩政に関与する中枢にあった藩士や商人たちに対して、新たな産物を開発するにはそれを呼び込む魅力をアピールする必要性を伝えたかったのではないかと考える。

つまり、大坂資本や道修町の薬種問屋との人脈から販売力、資本を導入し、大坂などで関係を持った本草学者などからは技術を提供してもらえば、立山の資源開発と加賀藩の財政改革は可能なのではないかと説いた訳である。そして青陵がそのためにまず必要と考えたのは、旧態依然とした藩の体制に改革の動機付けを行うことであり、藩士や藩政への関係者に助言することで藩に重い腰を上げさせるためであったように思われる。

以下のような記述には、それが感じ取れる。

江戸ニテハチラリト其サタアレバ、ヅキニ山師ツキテ、願ヒテ遠方ニテモユキテ吟味スル時ニ、忽チ銀主ツクコト也、一体空ナルヨフナモノナレドモ、銀主モ山心ノアル男デナケレバツカズ、少々ノ費用ハ上カラ下サレテモ、鉛銀ナドノ出ル所ヘハ、往フトイフ人ヲツカワサレテ御見セナサルコトヨロシ  
 (『綱目駁談』)

立山ノ明礬ヲ大ソフナルコトニ思召サレバ、扱不巧者ノ人ヲヤルベカラズ、大キニ損ヲスルコト也、薬種屋ノシクジリモノナドニブラツキ男アラバソノ人ヲ山代アタリヘヤリテ、山代ノ百姓ノ小利口ナル男ヲ選ミテ先山代ニイテ、ヨク々々明礬ノアル処ヲキ々正シテ、往テ見テ先カヘルコト也、扱明礬ヲホルコト掘リツケタル人ニホラスコト也、鶴下坂シテ大坂ニテキ々正シテ、明礬ホリヲ御国ヘ下スベシ、カマヘテ素人ニ掘ラセヌコト也、餅ハ餅屋也、(中略)如シ山代ノ明礬ヲ試玉ハ仰セコサルベシ、鶴宜シキヨフニトリハカロフベシ、ソノ時ニ黄連ノヨフナルモノモ談ズベキコト也 (『綱目駁談』)

御国(註一越中国加賀藩領)ノ鉛ハ天下ノ絶品也、大カタ立山辺ヨリ出ルコトナルベシ、立山ニハ鉄モ銀モ産スルトイフ人アリ、唯今マデステオカレタルユヘニ知レヌコトナルベシ (『綱目駁談』)

これらは実際に特定の人物を指しているものではないが、かつて青陵は江戸ではそのような山師、大坂では道修町の薬種屋とも話を通じ、いざとなれば役に立ちそうな「薬種屋ノシクジリモノ」たちとの人脈は広がったと思われる。

またこれとは別に薬種が関連する事例では、加賀藩領内で生産する黄連は品質が高く、流通量の増加もあり「加賀黄連」として一定のブランド価値で取引されていたことを引き合いにしている部分がある。

薬種屋に関連する『稽古談』の記述には、

扱黄連ハ加賀ノ白山ノ麓ニ産スルモノヲ上品トス。即、加賀黄連ト云也。加賀ニテハ一向ニウツカリトシテ、黄連ハコノ方ヨリ外ニハナキトバカリ思テオルニ、唯、直段日々ニサガリテ、ラチモナキヤスウリヲ、セネバナラヌヨフニナレリ。ソレヲモ知ラズニオリシ也、鶴、京・大坂ノ薬種屋ニ、コノワケヲキクニ、薬種屋云ハク、昔ヨリシ加賀黄連ト云テ、加賀デナケレバナラヌヨフニイタルニ、近年、丹波ヨリ黄連ヲビタダシフ出テ、今ハ丹波ノ黄連ヲ、加賀黄連トシテウリカイヲスルコト也

とある。青陵は日常の商業活動、市場の動向にも目を向け、情報を得ていたようである。

この事例は『陰陽談』でも触れており、

加賀黄連ト云テ、黄連ハ加州ノ名産也。ユヘニ加人ハウツカリトシテ、黄連ハ此方ノ名産ジヤ、京大坂ノ薬種屋ニテモ、加賀黄連トバカリイフテ、外ノ国ノ沙汰ハナキ也ト、カタク覚ヘテオルコト也。然ルニ今ノ加賀黄連ハ、半分ヨリ多ク丹波ヨリ出ヅル也。丹波ニテハ山ニツキテ黄連ヲ作ル也。丹波デ作りタル黄連ヲ、加賀黄連ニシテウル也。ソロモノコトハ土地ニ理屈ハナキ也。シロモノ品ヲ賞スルコト也。丹波ニテ作りタルガ、加賀ホドノ品ニユケバ、是丹波ノ黄連ヲ、加賀黄連トイフテモ、ズイブンヨキコト也。今ニ加州ノ黄連、一向ニ直段サガルニチガヒナシ。コレヲウツカリト知ラズニオレバ、大

キニ国中へ入ル金ノ高ノ知レヌコトナル也。

とあるのは、商品経済の発展した近世後期にあって薬種屋の持つ市場影響力を踏まえ、歓迎される「特産品」や「名産品」のブランド力が重要なことを指摘していると思われる。但しここでの記述はそのブランド価値に便乗する、丹波からのいわゆる「産地偽装」の台頭に「ウツカリ」として手を拱いている加賀藩の稚拙さを指摘している点が注目される。

それと同様に立山産の鉱物資源についても、広く藩外に売り捌かれ特産として知れ渡ることの必要性、つまりブランドとしての価値を意識することも含んでいたように思われる。

もちろんそこに至るまでには、品質の確保や増産により市場での流通量が増えることを必要とするが、そこに上方の商人の力を借りる必要があると考えるのは、ここにもそれまでに青陵が築いた人脈が前提にあったと見る。

そしてこの大坂の商人たちとの関係を論ずる上では、大坂での木村兼葎堂との交遊の実態を知る必要もあると考える。文人、豪商、本草家であった兼葎堂は大坂における人的ネットワークの中心であり、事実青陵は兼葎堂を頻繁に訪ねているからである。

そこで、『兼葎堂日記』の記載をもとにした年譜<sup>(19)</sup>を見ると、青陵はかなり頻繁に兼葎堂を訪ねていたことが分かる。

- ・寛政元年（1789）3月16日、4月18日
- ・寛政3年（1791）8月18日、10月29日※但しこの日兼葎堂は留守
- ・寛政8年（1796）1月19日、4月27日、（10月3日※青陵の紹介で和久田豹吉が兼葎堂を訪ねる）
- ・寛政12年（1800）6月24日※但しこの日兼葎堂は留守

しかも大坂へ訪ねるだけでなく、寛政3年に兼葎堂が一時伊勢に住まいを移した際にも、わざわざ足を運んで訪問するような親密な関係があった<sup>(20)</sup>ようである。また、寛政8年10月3日には青陵が兼葎堂に紹介した知人が訪れている。こうした事実の背景には、青陵自身も当初は然るべき人物から紹介を受けて兼葎堂を訪ねていたに違いなく、その後兼葎堂とは密接な関係ができていたことを窺わせる。特に、兼葎堂が小野蘭山（以下、蘭山）の門人であったことと、蘭山の門人たちとも個別に横のつながりを持っていたことは重要である。後述する津田随分齋もまた個別に兼葎堂を訪ねているが<sup>(21)</sup>、ここでは兼葎堂をキーマンとして蘭山を中心にした京都や大坂の本草学ネットワークともつながりが垣間見え、青陵は兼葎堂や津田随分齋らとの交遊を通じて、そこに集まってきた情報を得る機会があったのではないかとと思われる。近世本草学では、比較的身分に拘泥せず同好の士や師弟関係などのサロンが形成され、そこでの人や情報、実物（標本）の交流が知識の広がりや深化に重要な役割を果たしていたからである。

しかし、それを裏付けるような青陵と兼葎堂との具体的な交流の存在を示す史料は、現時点では管見できていない。この詳細は今後の研究の進捗に期待し、小論では研究の方向性を提起するにとどめたい。

### 3-2-2 加賀藩領内で立山以外の地域の情報

加賀滞在中、立山だけではなく領内各地で産物に関する情報を得ていた跡も見える。もちろん全てが開発に結びつけられるものではないが、開発へ目を向かわせる動機につながる要素は感じられる。

凡ソ五ヶ村ノ辺飛驒ザカヒハ、本草家二見セタルホドナラバ、サゾ>>宝玉ヲ得ルコトナルベシ、金府ノ東硫黄山ニハ瑪瑙ヲ生ズ、御留メ山ノ由、御留メナサルハ宝ノヘルヲイトフトイフ御心ナルベケレドモ、モヘルモノニアラズ、又ハ生スル也、立山ノ明礬ノヨフニヤケテシマフモオシキコト也、宝物ノ身ニナリテ見テモ、何年ニモ一タビモ人ニ賞翫セラレズニ朽チハツルコト、面白フアルマジキカ、瑪瑙ノアル山ニハ鉄ヲ生ジル理也、硫黄山ナドハ決シテ宝多カルベシ（『綱目駁談』）

「金府ノ東硫黄山」とあるのは「（いおうざんか）医王山（ようぜん）」を指したものと思われる。医王山の麓、才川七村、大西村付近は瑪瑙や玉髓、碧玉の産出で有名であり、加賀黄連は多くが医王山で産出したものであった。青陵は砺波郡

戸出村、高岡でも商人や十村との交流があり、越中西部の情報はそのような所からも耳に入っていた可能性がある。

また越中東部については、

(略) 愛本ノ水上ハ甚奇ナルコトダラケニテ、水晶ナド多キ所ナルベシト思ハル、水晶ノアルトコロニハ青礫石出ルモノ也、大キニ貴キ薬品也、鶴甲斐ニ逗留セシ時ニ石森トイフ所ヘユキテ、青礫ト水晶トヲ拾フタルコトアリ、一タイ甲斐ハ山ハ高ケレドモ山浅キヨフニ見ユル也、甲斐ノコトユヘニ浅キトイフニモアラネドモ見ユル也、甲府ヲグルリトカコヒテ高山アリ、山ノイタダキハ多クハ水晶也、地藏ヶ嶽トイウフ巔ニハ、水晶ノ長サニ丈バカリ、太サモ四間マワリホドノ水晶アル山、今ハ其ノ水晶ニ堂ヲタテ、堂ノ本尊ハ水晶也ト云ヘリ、一体甲斐ハ山ノ山ノトントノ中也、四面皆山ニテ南一方小シ開キテ、遙カ南ニ身延山アリ (『綱目駁談』)

とあり、現在の黒部市宇奈月町愛本新の情報を含んでいる。朝日から入善舟見方面では石榴石、切子砂と呼ばれたガーネットや六方石(水晶)などの存在が近世の本草書でも知られていることである。

青陵は、立山から下山の後にわざわざ沼保村(現朝日町沼保)の十村伊東彦四郎を訪ねて逗留している。『綱目駁談』には、

越中愛本ノ北ニ水ノカヲラヌ田地アリテ、民歎クコト久シ、沼ノ保ノ十村彦四郎ノ工夫ニテ、愛本ノ水上ヨリ水ヲツケテ、山ノ腹ヲ水ノ通ルヨフニシテ、水ヲカケテ今ハ沃田トナレリ、実ニ相公様ノ時ニテ、伊東彦四郎方ニ逗留セシ時ニ、愛本ノ水源ノ話ヲキケリ、伊東ハソレヨリ立山ヘワキ道ヨリノボリタルコト語レリ

とある。伊東が藩に開鑿を願い出た愛本新用水(享和2年<1802>完成)についても話を聞いており、新川の天産物に関する情報はこのようなところからも入手していたことがわかる。

また、下新川で産する水晶などを指摘する背景には、加賀来訪以前にも甲斐を訪れた際の見聞、水晶や青礫石<sup>(22)</sup>を目にしてそれを拾うことがあったというような石薬に関する知識も持ち合わせていたことが分かる。これも青陵の背景にある情報量の広さが垣間見える一例であろう。

それとは別に、山中や山代の温泉を訪れたことを元にした事例も見られる。

白ラ山ノ凡ソ東方ノ山ノ中ヘ入テ見タルホドナラネバ、決シテ珍宝ヲ見出スベキモノヲト常々悔ユルコト也、鶴又山中山代ニ入湯セリ、山中ノ湯ハ硫黄也、山代ノ湯ハ明礬也、スレバ山中ノ東ニハキツト硫黄ノ出ル山ナフテ叶ハヌ也 (『綱目駁談』)

温泉に硫黄成分が含まれることは珍しくないが、これを硫黄や明礬の開発に結びつけるところに青陵の産物観が見える。

この他にも、立山では現地ですぐに接した人々に対するユニークな見方が見られる。旧知ではなくとも行った先々で現地の情報をつかんでいたようで、現地のことは現地の者から聞き出して確認する実証的な意識や、人を通じての情報収集が多い青陵の特徴が現れている。

以下の引用部分は、道中岩峯寺や芦峯寺で出会った者、山中での仲語などからの話を元に持論を述べている内容だが、現代の目からは鄙地を見下した差別的な意識が見えなくもない。

在方ノ御史ト先方トハコノヨフナル時ニ、甚ダ巧ヲ立ル勝手宜シキ也、芦峯岩峯辺村度支コレヲ聞出シ、村御史同道ニテセコヲツレテサガサスベシ、如シサガシテコザラヌトイフテ、外ノ人ユキテサガシダセバ、右ノ村御史、村度支ノ御奉公ヲ身ニシマズ、ソレヨリモ有ルモノヲカクシテナイト云フ咎ニオチルワケノモノナリ、カヨフニ示シタルホドナラバキツトサガシ出スベシ (『綱目駁談』)

如シ又蘆倉、岩峯ノ辺ノ人ニ出会ノ時アラバ、問フテ見玉フベキ也。如シ玉ノ類カ、硝ノ類ズイブンアリテ、土地ノ人内々取りテ、ウリ出スナド、フヨウナルコトナラバ、是表向キニシテウラセテヤルガ、上ニモ下ニモヨキコト也。(中略) 凡ソ山ニ産物多キ所ハ、古ヘヨリイ、ツタヘテ山ノ神、山ノ内ノ物ヲトルヲキラヒテ、大キニアレルナド、イ、ツタフルコト、多クアルモノ也 (『陰陽談』)

#### 4. 青陵の提言の背景に見える本草家、加賀藩産物方関係者との情報交流

ここでは、青陵が交遊した医家や本草家を具体的に挙げ、彼らから得たと思われる本草学の基本的な知識が青陵の産物や資源の見方に影響した事例を取り上げる。特に京都や金沢で接触があったと考えられる津田随分齋の存在を中心に、上方と金沢を舞台に広がっていった本草家の情報ネットワークとの接点について考えてみたい。

##### 4-1 津田随分齋

津田随分齋はこれまであまり知られていなかった人物だが、青陵との交遊関係だけではなく、上方を中心とした医家や文人たちの情報ネットワークと金沢とのつながりの点からも注目される。この関係を具体的に示すことで、青陵の知的背景の幅の広がりも見えらると思われる。

津田随分齋は、寛保2年（1742）に金沢に生まれた医家、本草家、俳人であった。名を養（以下、養または随分齋・養）と言ひ、随分齋、豹阿弥、菜窠、菜窩道人、青野など多数の号も用いている。隠居後に俳人となり豹阿弥、青野と号するようになるが、それ以前には随分齋と書かれたものを最もよく目にする。諸文献に見える名は養の他に、養徳、養徳夫。諱は善または合。字は合同、合大。通称は太一、太一郎、道乙などと記されるものである。更に上方で遊学中には「洞貝武十郎」の変名も用いていたようである。金沢で放蕩の末明和5年（1768）に上方へ行き、後に大坂で医家を開業したという<sup>(23)</sup>。天明3年（1783）には、母親の病気を機に15年の上方遊学を経て42歳で金沢に帰っている。その後、経緯は不詳だが加賀八家の1つ藩年寄横山家に家中医として仕え、文化10年に金沢で没している<sup>(24)</sup>。若い頃は放蕩し、後に弄石家、医家、俳人と幅広く活躍した文化人、自由人の姿が見えるが、一方で多方面の才能を持て余した奇人として知られた<sup>(25)</sup>ようである。この他に小論で注目した本草学については、特に弄石を通して木内石亭との関わりがあったことについては後述する。

また、養の嗣子には津田煥（以下、煥または随分齋・煥）がいる。名は煥。字は君若、右内または宇内。号は随分齋。生没年は未詳である。正確な時期は不明だが京都へ遊学し、寛政4年（1792）に金沢出身の典薬大允荻野元凱（元文2年〈1737〉～文化3年）に入門。前後して蘭山にも入門して本草学を修め、寛政9年（1797）9月には白川山から比叡山に向かう蘭山の採薬行に同行している。この採薬の同行者には加賀出身の者が多くいた<sup>(26)</sup>。また、同門で京都山本読書室二代となる本草家山本亡羊とも親しかった<sup>(27)</sup>。ここからは、当時上方で活躍した本草家とのかなり広い交流を持ったことが見える。

養は寛政12年に60歳で隠居し、煥はその家督を継ぎ養と同じく藩年寄横山家に家中医として仕えるが、のち藩医となったという<sup>(28)</sup>。そして養の隠居後には煥もまた父と同じく「随分齋」と号しているの、「随分齋」は親子二代を指していることになる<sup>(29)</sup>。但し寛政12年以前からも煥が随分齋を名乗っていたことを示す史料もある<sup>(30)</sup>ので、養の隠居が必ずしも明確な襲名の区切りではないようである。ただこのことが問題となるのは、親子とも上方に遊学して医家となり、そこでの交際範囲も類似し、しかも金沢に帰り横山家の家中医となっているなど酷似した経歴のため、史料に見える「随分齋」が実際は養、煥のいずれを指したものなのか区別が付きにくい部分のあることである。そのためこれまでも混同されたまま記載の資料があり、注意が必要である。随分齋・煥はその後安政2年（1855）には金沢で種痘所の設立に関わり<sup>(31)</sup>、医学史上に再度現れてくる。このような明らかに年代の違いから分かる場合はともかく、それぞれの活動時期が重複している場合には推定に拠らざるを得ない場合もあった。以下小論では、可能な限り養と煥を区別するが、両者に当てはまる、または判断がつかない場合は単に「随分齋」の名称を用いていく。

##### 4-2 津田随分齋・養、煥と青陵の接触

青陵は、随分齋と接したことで石類に関する基礎情報、特に加賀や越中に産出する鉱石類に関する情報を

得ていたのではないかと思われる。そしてそこで立山に産する鉱物類の知識を得ていたとすれば、それが青陵にとって鉱物の開発に興味を覚えた契機となった可能性も考えられる。

青陵と随分齋の関係を示す直接の手掛かりは『綱目駁談』にある、

(註一立山山中の鉱物については) 本草ニ巧者ナル津田随分齋ナドヲツカハサシテ見セラルベシ、シカモ津田ハ草ヨリモ金石玉ノルイ巧者也トテ、京師ニテハ蘭山トイヘドモヤハリ津田ニ相談セシホドノ本草家也、扱葉草モサゾアルベシ、皆津田随分齋モノナリ、津田ハ業ニ巧者ナルノミナラズ、大勇気ナル人也、京師ニテ腑分ヲシタルトキニ、死人ヲ自ラ解キテ指ト頭トヲ風呂敷ニツ>ミテ持チカヘリテ、宿ニテ解キタル人也、サレバ山中ナドヲイトフ人ニアラズ、一体本草家ハ年中採葉ニ出ルユヘニ、山ヲアルクコト甚巧者也、谷ヘオリ水ヲワタルコトナドナントモ思ハズ、山中ヲ独リアルクコトヲ楽ミニスルヨフナルモノ也、礬石、礬石、金、銀、鉛、銅ノアルトコロハ決シテ津田巧者ナルベシ

の記述である。

ここから、青陵が見た随分齋像を整理すると、概ね以下の5点にまとめられる。

- ①本草学に秀でている。
- ②特に草木よりも鉱物に関する知識が秀でており、その知識は(本草学の大家である)蘭山を凌ぐほどである。
- ③京都で屍解剖があった時、自ら解剖を行った後、屍の頭部と指を自宅へ持ち帰り詳細な解剖を行った豪胆さを持つ。
- ④山野での採葉の経験が豊富である。
- ⑤山に入って礬石、礬石、金、銀、鉛、銅等の鉱物資源を探索するのに秀でているはずだ。

青陵は随分齋の本草家としての実力を相当に高く評価していたことが分かる。但しこれが養、煥のいずれを指しているかはっきり分からない部分は残るので、以下その区別に留意しながら関連する医家・本草家を挙げ、併せて青陵との関連を整理する。

随分齋・養が上方でどのように、また誰に入門して医学や本草学を修得したのか明確な記録はないが、断片的に各所で現れる随分齋の名前を拾っていくと、改めてその活動範囲の広さが浮かび上がる。

①②⑤についての具体例として、まず随分齋・養は上方では弄石を通して木内石亭と交流し情報交換していたことが挙げられる。木内石亭が弄石を集大成した『雲根志』の三編卷之三(寛政3年<1791>刊)では、「変化類」に分類する「冬瓜化石」の説明に「冬瓜の化石は賀州金沢津田氏の珍藏にあり。同州河北郡伝燈寺の石澗中に得たり(略)」とあり、その図も載せている。それ以前にも、金沢へ帰ってからの天明7年(1787)に随分齋・養が石亭に能登産の「天狗爪石」を贈った記録<sup>(32)</sup>や、その10年後の寛政9年10月7日に近江石山寺畔の秋月館で開かれた石亭ゆかりの「奇石会」にも収集品を出品している<sup>(33)</sup>。

しかも、随分齋・養は自ら全国の鉱物、奇石などを産地別に分類した目録『石丈野史』三卷<sup>(34)</sup>を著しているが、これは本草学、特に弄石に関しては膨大な情報を持っていたことの証左である。恐らくは自身も蒐集に執心していたものと思われるが、木内石亭との密接な関係を持ち弄石社の人脈を利用しなければ、このように広い地域からの情報は集められなかったに違いないだろう。『石丈野史』に序文や跋文はなく作成の意図や経緯は不明だが、上巻表紙に「津田養徳夫撰、男煥君若撰」とあることから、この執筆には煥も関わっていたことが明らかになる。ここから煥もまたこの分野には豊富な知識を持っていたことが窺える。

因みに同書で越中産に分類された石品のうち、特に立山を中心に産出としているものには、

- ・自然銅 立山
- ・石炭 立山
- ・硫黄数品 立山地獄谷
- ・自然瑪瑙硯 立山唱名か滝の流れ有 願寺川
- ・材木の化石
- ・立山材木坂
- ・雲母 立山一の越

が挙げられており『雲根志』の記載と重複したものも少なくない<sup>(35)</sup>。

②は言外に養が何らかの形で本草学を蘭山から学んでいた、或いは親しく情報交換する立場にあったことを窺わせるが、養自身が蘭山に入門した記録は見当たらない。④から見えるのは、青陵は本草家の活動実態

をよく知っていたことである。ここに蘭山の名前が出ていることから、青陵は当時の本草学の実態を蘭山本人或いはその門人との接触から認知していたと考えられる。

本草学の研究では古典文献を博搜して関連する情報を抄出していく「文献学」の面もあるが、蘭山を中心とした学統は青陵が「本草家八年中採葉ニ出ルユヘニ、山ヲアルクコト甚巧者」と評しているように、山野での採葉、実物を自分の目で観察して記載する博物的な実習を重視していた。青陵の記述からは、随分齋がフィールドワークを行い自分で山野を巡って本草学を修得していた姿が見える。

煥は蘭山に入門していたことがはっきりしているので、『綱目駁談』に「京師ニテハ蘭山トイヘドモヤハリ津田ニ相談セシホノド本草家也」とあるのは、その知識水準を知る上で注目される内容である。しかしこれだけからはこの「津田」が養、煥のいずれを指したのか明確ではない。

この時代の本草学での石類の知識には、石薬から鉱物類に関する博物的な側面と、弄石と称される奇石や神代石（考古遺物）を攻究する流れがあり、その中心となるのは前者では蘭山、後者では石亭とされる<sup>(36)</sup>。『綱目駁談』に見える「津田」が養を指すものだったなら、石亭とのつながりが深く弄石に詳しい点で、蘭山が一目置くほどの知識を持っていたのは間違いないだろう。しかしまた、これが養ではなく蘭山の門人である煥だった可能性も考えられる。煥自身も後年に江戸で開かれた薬品会では石品を出品している<sup>(37)</sup>ことや、養と『石丈野史』を共著するほどの知識を持っていた事実から、師である蘭山が素直にその力を認める高弟であったことも否定できない。青陵はこの点を区別して書いていないが、いずれにしても青陵が随分齋との接触によって本草学の実態を理解し、鉱物類に関する知識を得ていた可能性は高かったと見られる。本草学の中でも、自分の目で実物を確かめること重視した学統の蘭山と、合理的実証的な青陵の思想には似た部分も感じられ、青陵が随分齋を称揚したのは理解できるところである。

また③に関しては、随分齋が京都で行われた解剖に参加し、自身が解剖に習熟していたことに触れた資料がある<sup>(38)</sup>。但しこれも養、煥いずれを指したのかは断定しにくい。

漢蘭折衷の医家が主流になっていた当時の京都で、山脇東洋が宝暦4年（1754）に官許を得た人体解剖を行ったことはよく知られている。その後金沢出身の官医荻野元凱に学んだ河口信任が明和7年（1770）に京都の西郊で師の元凱とともに刑屍を解剖し、その所見をまとめた『解屍編』を明和9年（1772）に刊行した。この時に養が参加した明確な記録は見えないのだが、もし③の記述にあるのが養であったならば、それはこの時に行われた解剖だった可能性が高い<sup>(39)</sup>。この仮説に基づけば、養は京都遊学中に元凱と接し医学を通して親交があった可能性もある。もしそうならば、後に煥が元凱に入門していたこととも無関係ではないかもしれない。

一方、煥は寛政4年に荻野元凱へ入門したことは分かっているが、上方で遊学した時期は明確ではない。ただ、ずっと後の安政2年に前述の種痘所設立に関わっていたことから考えると年齢的には明和7年の解剖に立ち会っていた可能性は低いと思われる。

そこでこれらをふまえて、青陵と随分齋の活動を時系列に整理する。養は天明3年（1783）には金沢へ帰っていたのに対して青陵は天明9年に初めて上洛し、途中大坂や越後へも行くことはあったが寛政13年（1801）までは京都に留まっていた。ここから考えると、上方で養と青陵が直接接触するタイミングは無かったが、煥とは上方で接触する機会があった可能性は高かったと思われる。煥自身は蘭山の門に学び、しかも養と同様に石品に詳しくはたはずなので、もし二人に接触の機会があったとすれば、青陵は煥から鉱物類を含む本草学に関連する話や『綱目駁談』にある養が行った可能性のある解剖の話も、京都で聞いていた可能性が高いだろう。そうでなければ、青陵は金沢に来た文化2～3年の頃、つまり養が隠居後（煥が随分齋を名乗り横山家の家中医となって以降）金沢で煥と再会したか、或いはそこで初めて養と直接会って聞いたものと考えられる。

ただ、青陵と随分齋との関係を小括したとき、いずれにしても疑問として残るのは青陵と随分齋の接点である。これについては現時点で両者の明確な接触の事実は確認できず、推定に拠らざるを得ない。ただ、も

し両者の交遊が第三者を介して始まったとするならば、青陵と関係する人々をつなぐキーワードの一つには「師弟関係」が挙げられる。例えば、青陵と京都の医家との交遊では、三谷公器との『文法披雲』をめぐる師弟関係、公器と蘭山との師弟関係、随分齋・煥と蘭山との師弟関係、随分齋・煥と元凱との師弟関係、元凱と河口信任との師弟関係など、そこには複数の縦の人脈と医学・解剖・本草学・弄石などを通じた横のつながりが交差して新しい関係が結ばれていったことが推定されるからである。この点では、書簡、日記などの個人的な交遊を示す史料を基に人と情報のつながりによる学問の学際的な展開を明らかにする研究の進捗を俟ちたい。

#### 4-3 加賀藩産物方主付村井長世と青陵のつながり

加賀藩では、産物方を設置する以前からも度々領内の産物調査が行われており<sup>(40)</sup>、薬種に限ったものでは比較的早い時期である貞享2年(1685)、藩医らが調査を行い『加能越所産薬種考』<sup>(41)</sup>を作成した例がある。同書には越中産の黄連に「上品他国へも出申由申候」、黄柏に「大型にて商売にも仕由申候」といった流通関連の情報が見られるが、黄連のブランドとしての価値については、前述のように青陵も指摘しているところである。

その後、享保から元文にかけて全国的な産物調査や幕府による採薬使派遣が行われたが、この時加賀藩では享保20年(1735)4月に御算用場に産物調方を設け高畠金左衛門、行山伝左衛門を産物方主付に任じて調査記録を集約している。それは、時期的には幕府に提出した加賀国産物帳の元資料になった産物書上を藩内各郡単位で作らせたり、本草家内山覚仲、稲新助らが中心に産物調査を行い、それをまとめた『享元塵余志』が作成されたりした頃である。

このように度々調査を行い情報が蓄積されても、それを活用する知見や時代に合う改革を進める藩内の空気が醸成していなかったためか、それらを活用した成果は上げていなかったようである。加賀藩での本格的な産物政策が始まるのは安永7年(1778)4月、村井長穹を加越能三州産物調方主付に任じ領内産物の現状調査や産物銀貸与などにより領内産業の育成を目指してから<sup>(42)</sup>だが、その際にもまず着手したのは産物の実態調査であった。しかもこの時の政策では、それまで政策的に藩外への輸出を禁じていた産物でも益があるなら他に支障がなければ他藩へ販売を許可するという方針のあった点が注目される。

只今迄御留に相成候品に而も、御益に相成候儀有之候者、売出候儀御ゆるし可被成候。乍然御益のみを相考、外之障に成候儀を構不申様に有之候而は難成事に候間、其考も有之候様にと御意に付、奉畏候。  
(『加賀藩資料』第九編 安永七年四月廿七日)

これを承けて、郡奉行から領内へ産物調査の触書が発せられた<sup>(43)</sup>。

そして前述の方針もあってか黒部奥山で未開発林の木を他藩へ輸出することが計画され、それまで領内の材木保護のために七本の制を定めたことで不足した用材を他藩から輸入していたのに対し、領内で用材を自給するだけでなく一部は江戸にまで販売された<sup>(44)</sup>。

しかし村井長穹は天明5年(1785)9月に罷免され産物方は廃止されている。これは天明3年に起きた飢饉があつこともその理由と言われるが、政策が円滑に進まずこの時は十分に成果を上げなかったことも窺われる。

政策上その後は時間が空くことになったが、安永7年の調査が不十分だったためか、再び文化8年(1811)になって郡奉行に命じ至急委細の調査報告を差し出させている。

御領国諸産物調査帖安永七年指出候通に、当時之分不残委細書出候様、御勝手方年寄中江申聞候条、早速被相調理、帳面に仕立、当月廿日迄に可被指出候 (『加賀藩史料』第十二編 文化八年十月二日)

ここにある「御勝手方年寄」が同年3月に就任した村井長世(以下、長世)であった。長世は金沢滞在中の青陵と関係が深くその思想に共鳴して改革に積極的であったから、青陵が文化2年に金沢を来訪し改作法以来農政を重視してきた旧態依然とした政策を批判し、重商主義に基づいた藩の増収を説いたことに影響を

受けた。それをふまえると、ここには安永7年の政策を仕切り直して最新の産物データを収集し、改革を押し進める意図があったものと考えられる<sup>(45)</sup>。

そして、この時の調査に関連してもう一つ注目されるのは、享保元文の頃に産物調方がまとめた産物調査の写本が、文化8～10年頃になって新たにいくつも作られていた<sup>(46)</sup>事実である。なぜその時期になって敢えて80年余も前の記録を活用しようとしたのか疑問が持たれるが、前述の文化8年に出された郡奉行への指示があったとことと併せて考えると、産物の現状を把握するとともに過去の情報との比較の重要性を感じた点に、長世が進めようとした産物政策の特徴があったのではないかと思われる。

例えば、元文2年の加賀領内調査の書き上げを元に本草家稲新助と内山覚仲が編纂した『加賀国産物志』は重要とされたようで写本が何種類も作られたが、その中には長世が前田土佐守直から借用したものを文化8年に自ら筆写し、同家の家中医でもあった本草家阪元慎<sup>(47)</sup>が校正と付記した写本もある<sup>(48)</sup>。

これらの具体的な活用を示す記録は管見しないが、青陵が『綱目駁談』や『陰陽談』で説いた加賀藩の産物政策への提言では具体的な魚介や材木などの他、塩や農作物などにも及ぶ。その具現には藩内の産物に対する現状とともに過去の実態の正確な情報が必要だったとすれば、産物情報の写本が作られていた時期と長世が産物政策をすすめた時期との重なりは相関する。

それに対して、『綱目駁談』で語られている立山山中の鉱物資源の提言は、かつて藩が行った硫黄試掘の情報<sup>(49)</sup>などには全く触れられていないことから、これは過去の調査をふまえたものではなく、青陵が立山山中で見聞した記憶と、随分齋たち本草学者から得られた鉱物の知識を「理」によって解釈し、新しい視点から立山での地下資源開発論として長世に提言したものだと思われる。

文化10年9月には長世が産物方御用を命じられ、産物方役所を設置し産物政策が再開する。それまでの経緯からこの時の産物政策の改革の要点<sup>(50)</sup>は、青陵の助言の影響を強く受けるものであったはずだが文化11年（1814）6月に産物方が廃止されて頓挫し、立山山中での産物開発が実現することはなかった。

頓挫には様々な理由があるだろうが、青陵との関わりから見れば、その提言自体が藩からの正式な諮問に拠るものではなかったこと、そして青陵の説く提言も、理論上はともかく、藩内で一致して賛同されていた訳ではなかったことが大きいだろう<sup>(51)</sup>。

#### 4-4 長世と坂元慎、村松標左衛門の存在

これまで見てきたように、産物政策と産物調査は不可分である。享保元文の調査で中心となったのは稲新助や内山覚仲らの本草家であり、文化文政年間の産物政策で享保元文の調査内容の再度見直しに関与していたのは、長世とその配下の本草家坂元慎（以下、元慎）や村松標左衛門（以下、標左衛門）らであった。

標左衛門は、長世に仕え加賀藩産物方植物主付に任命され産物政策を現場で支えた本草家であったが、その抜擢には同じく長世に仕えていた元慎の推薦があった可能性もある<sup>(52)</sup>。標左衛門と元慎はともに蘭山の門人だったので、そこには同門の縁も関係していたのかもしれない。そして、随分齋・煥もまた蘭山の門人であったから、金沢でも間接的に随分齋や青陵が関係した本草学、物産学の情報ネットワークが重層的に存在していた可能性も考えられる。

元慎は前述のように藩年寄村井家に家中医として仕えたが、医家としてよりもむしろ本草家としての活躍が注目される。前述の『加賀国産物志』の校正だけではなく、長世が作らせた植物図譜『屋漏堂花譜』（「屋漏堂」は長世の号）にも序文を載せる。同書は長世が早田淑慎に図を描かせ元慎に註釈を付けさせた博物書で、享和元年（1801）9月に完成したものである。長世は花譜の他に禽譜、虫譜までも作成させていることから、博物的本草学にも造形が深く、産物政策のための資料収集だけではなく博物的な本草趣味を持つ文人的な側面も持っていたと推察される。今後、金沢での学芸活動の担い手としての活動の点からも研究の必要があろう。



## まとめにかえて

これまで、青陵の経世思想形成と本草学の展開とは異質なものに見えていた。しかしこの時代の経世論は経済理論の構築ではなく、治国安民を図る具体的な政治体制や社会経済のあり方を説くものであったことに鑑みれば、同時代の本草学がまた生薬学を基とし直接民生厚用に資する実学であった点で、むしろ両者は近い立ち位置にあったように思われた。

近世後期に隆盛した本草学の知識は、実学や学芸活動の様々な分野の基底にあって、その援用は想像以上に多岐に亘り、そこには師弟関係や同好の士との情報交換による深化、サロンの形成、モノと情報の交流を介した広がりが見られた。その展開を、自然界を広く観察し記載していく博物学系と民生厚用の実学に軸足をおく物産学系とでも言うべき型に括るならば、後者は産物調査を通して経済政策などにも関与したと言えるだろう。その実例は各地に散見されるが、小論は青陵の経世論と本草学に依拠する教養に関連する事例として、加賀藩での産物政策に対する助言にあった立山での資源開発を取り上げたものである。

青陵の学問的教養の根幹は儒学だが、現状に即した情報の収集は、各地で各層との交遊を通じた人とのつながりが基本であった。そしてそのような、人を介した横の情報ネットワークが果たした役割の大切さは近世本草学の展開でも同様であった。そこでは、人脈の中にも情報のキーマンが存在し、その関係者にどこかでコミットすれば本草学の範疇で情報ネットワークにつながることができ、そこから情報を得て自分の専門の中に援用できるシステムが形成されていたと考えられるからである。

青陵は交際範囲が広く、また本草家との関係だけが思想形成に影響したものではないが、医家や本草家を通して彼らの情報ネットワークと関係していたと見る視点は必要であろう。そして、交遊する人物が本草学に限らず様々な分野にネットワークを持つマルチな人物であることは青陵にとって大きなメリットだったに違いなく、本草学のつながりで言えば木村兼葭堂はまずその筆頭に挙げられるだろう。そこから兼葭堂の師である蘭山、弄石を通して随分齋と関係が深い木内石亭<sup>(53)</sup>を通じて直接、或いは間接的に全国的な情報ネットワークともつながっていたと推定されるからである。

この時代の本草学ネットワークの特徴は、人的な広がりだけではなく、専門性が細分化されていないことで一個人が興味によってカバーした分野もまた広がったことがある。そうすると青陵が交遊を持った文人、医家、本草家たちが個々に持つ知的背景の幅の広さもまた、間接的に青陵の思想形成に影響したのではないかと思われる。青陵が実際に立山で見聞きしたことを元にその開発を提言するためには、その前段階として少なくとも石品に対する資源としての基礎的な産物情報の蓄積が必要であり、それは立山来訪の以前に医家、本草家との交遊の中から得ていたものと考えられるからである。

金沢滞在中の青陵の交友関係や加賀藩政を対象にした著作に関しては、現在まで多くの先行研究があり、中でも青陵と各地の医家との交遊の重要性は、合理的な思考様式や文人的教養の点で早くから指摘されてきた<sup>(54)</sup>。そんな当時の医家とは、その多くが生薬の知識とともに博物的な知識を豊富に蓄えた本草家でもあり、同時に地方都市にあっては俳諧や漢詩などの文人趣味を通して地域の学芸活動を主導していた知識階級でもあった。そう考えると医家と本草家、文人と呼ばれた人々の持つ知識や教養には重なる部分が多く、医家との知の交流に注目することは、青陵の思想を多面的に分析する上で重要な指摘だと思われる。近世後期の本草学が自然界の理解を進める方向、各地で天産物を探索しその実態を把握する方向へ展開したことに鑑みれば、青陵が産物の開発や品質などを論ずる背景にも、医家や本草家との交流で得た実学的な天産物の理解や各地の産出情報が含まれていたのは当然であろう。

また、金沢を訪れる前から塾を構えた京都や大坂の医家や文人、そして金沢での藩政の改革に関心を持つ上級藩士や商人たちとの交遊による情報のつながりは、地理的なものだけではなく、友人やその師といった人的なつながりとも重層的に交差したものであった。特に小論でキーマンとして取り上げた随分齋、兼葭堂の両名は活動範囲が広く、青陵同様に当時においてユニークな生き方をした人物でもあり、青陵は交遊を

通して彼らの人脈にコミットすることによって、直接出会っていたか否かは不詳としても、同時代の木内石亭、蘭山、山本亡羊など本草学の大家とも情報のつながりを持ち、その影響を受けていたのではないかと思われる。

このような視点に立てば、青陵の思想が生み出されてきた教養、知的背景の幅はこれまで考えられていた以上に多岐にわたり広がったと考えてみる必要があるだろう。

#### 【註】

- (1) 八木清治「海保青陵の交遊—青陵像再構成の試み—」（『福岡女学院大学紀要』1号、1991）、大島秀夫「海保青陵と京都における医学の展開」（『季刊日本思想史』十八号、1982）など。
- (2) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的的研究』（角川書店、昭和47）「第八章 海保青陵とその立山開発論」、廣瀬誠『立山のいぶき』（シー・エー・ピー、1992）「立山の産業開発」など。
- (3) 高瀬保「海保青陵書簡の考察—加賀藩政との関わりについて—」（『地方史研究』第二四〇号、1992）
- (4) 同論文、5～6頁参照
- (5) 青柳淳子「海保青陵の伝記的考察」（『三田学会雑誌』102巻2号、2009）、215～217頁参照。高瀬氏は賢弟とある点から禎文を弟子と見ていたが、青柳氏が「角田家系譜図」と磯ヶ谷紫江『墓碑史蹟研究』第39冊（後苑荘、1926）収載の「角田青溪墓と墓誌銘并序」を史料として、青陵の父角田青溪の墓誌銘から「禎文」が実弟角田彪の字であることを明らかにしている。
- (6) 高瀬保（1992）前掲論文。
- (7) 同論文、6頁参照。青陵が金沢を発ってから京都に到着直後の行動の詳細は、高瀬保氏による『書簡』の翻刻、解析によって明らかになったことである。
- (8) 青柳（2009）前掲論文、232頁参照。
- (9) 『書簡』には「此度モ竹中文卿セ話也、并ニ近江屋彦右衛門ト申豪富セ話也、又御序之時、両家へ書状被遣可被下候、慥ニセ話致候也」とある。
- (10) 徳盛誠『海保青陵 江戸の自由を生きた儒者』（朝日出版社、2013）331～339頁
- (11) 『綱目駁談』、『陰陽談』の解題は、徳盛前掲書「補説 青陵の著作について」を参照。
- (12) 藤橋でのことを「懸崖上路織如髮／誤杖空叢倒弄軀／五十二翁生未盡／一命繫得数茎蘆」と詠んでいる。『書簡』にはこれを含む藤橋（2首）、桑谷、室堂、五ノ越、雄山頂上のことを詠んだ計6首の七言絶句が載せられているが、この藤橋で転倒を詠んだもの以外の5首は「此五首ハ北国ニ而名高キ詩ユヘ入御覧候」と書き添えている。立山下山後に富山城下で旧知の富山藩儒市河寛齋と交遊した際の作かもしれない。
- (13) 「絶頂四臨無点雲／先鎮真箇出人群／拜来旭日三竿許／下界昏々猶夜分」の詩を作っている。
- (14) 『書簡』には、「飛州信州ヨリ盗ムヨシ也、大方本藩ノ木曾ノ民杯来ル事ナルベシ、山腰以下ニハ檜及栢杯多クアリ、唯禁シテ取ラズ、是も飛信ヨリ取ルヨシナリ」とある。
- (15) 山本章夫『入越日記』に、立山で観察した植物約50種の記録がある。正橋剛二『入越日記 能登・越中・立山に薬草を求めて』（桂書房、2017）に全文の翻刻がある。
- (16) 高瀬重雄「越中立山の硫黄採掘をめぐる考察」（『三井金属修史論叢』第10号、1978）196～200頁参照。加賀藩は地獄谷の硫黄には非常に早くから注目しており、藩の薬種調査記録『加越能所産薬種考』（貞享2年〈1685〉）には立山の硫黄について「下品之由申候然共／微妙院様（三代藩主利常）御代立山より御取寄被遊候を見申候に上品鷹ノ目と申す物にて、他国にも希なる由」とある。また、元禄11年（1698）には豊嶋藤兵衛を立山に派遣して増産を目的に硫黄の見分を行い、試掘した40貫目を藩に献上させた記録もある。
- (17) 青柳淳子「海保青陵における「理」の成立について」（『三田学会雑誌』101巻1号、2008）参照。
- (18) 『史記集解』（貨殖列伝第六十九）で地下資源埋蔵の道理を説く部分の註に『管子』（地数）から「上有丹沙者、其下有銻金」が引用されている部分を指す。
- (19) 八木清治「寛政期の海保青陵—その文人的活動—」（『年報日本思想史』17号、2018）、青柳（2009）前掲論文。
- (20) 八木（2018）前掲論文、76～78頁参照。
- (21) 水田紀久『蒹葭堂日記』（芸華書院、2009）では、寛政5年2月26日に「加州津田宇内」、寛政8年7月19日に「加々津田」とあり、いずれも随分齋・煥が蒹葭堂を訪ねていたものと見られる。
- (22) 雲母の一種。礫石とも言う。石薬として去痰、消化、鎮痛などに用いられた。

- (23) 日置謙『加能郷土辞彙』（金沢文化協会出版、昭和17）、大河良一『改訂 加能俳諧史』（清文堂出版、昭和49）参照。
- (24) 金沢市史編さん委員会『金沢市史 資料編15学芸』（2006）454～455頁参照。「津田随分齋（養）横山家御手医師 文化10（1813）年没墓地」とある。
- (25) 長山直治「加賀藩における海保青陵と本多利明—加賀藩関係者との交遊とその影響について—」（『石川県立金沢錦丘高等学校紀要』第15号、昭和62）には、青陵が随分齋のために寄せた「惟錯帖序」の中に「其遊益甚矣 其為益奇 其事益高」とあり、随分齋・養が煥に医業を譲ったあと、益々その奇矯な行動がひどくなってきたと紹介している。
- (26) 磯野直秀『日本博物誌年表』（平凡社、2006）401頁参照。当該記述の出典は木内政章の『本草綱目紀聞』の「題言」とある。この記述の元になったものは、現在武田科学振興財団杏雨書屋が所蔵する。
- (27) 松田清「山本章夫筆山本亡羊伝「先人言行録」について」（『近世京都』第4号、2021）79頁参照。随分齋・煥は蘭山の門で旧友の間柄で、天保五年に金沢で再会した時のことは、山本亡羊の『入越紀行』からの引用に「随分齋ヲ訪テ曩昔講学ノ旧ヲ話ス。相離レルコト四十年、猶一日ノゴトシ」とあることを紹介している。
- (28) 池田仁子『近世金沢の医療と医家』（岩田書院、2015）92、200～203、248～250頁参照。「表2 金沢城内において藩医以外に藩主前田家の診療に加わった御用医者 の事例」の中に、横山家の家中医として津田随分齋が、文化7年正月、文政7年7月、天保5年5月、天保12年2、3、6月に診療を行ったとある。随分齋・養は寛政12年に煥に家督を譲り隠居し文化10年に没しているの、これは煥を指すものと考えられる。同表からは、天保12年時点で藩医ではなかったことが分かるが、それ以降の処遇については分からない。松田前掲論文では、山本章夫『先人言行録』からの引用の中で随分齋・煥を「官医津田随分齋」と記しているが、これは亡羊の認識による表現なのか、詳細は分からない。
- (29) 日置前掲書、552～553頁参照。「俳諧をさらに学んで青野と号した。道順光明の二子で、別に家を分かちて本道の医を業としたが、酒食に耽り博奕を好み明和五年（1768）齡二十七を以て上国に走り、業を大坂に開いた。次いで母の病に困って郷に帰り、寛政十二年家を嗣子煥に譲り、また随分齋と称せしめ、己は豹阿弥と改め文化十年五月十八日七十二歳を以て歿した。」とある。
- (30) 平野満「小野蘭山の本草学と衆芳軒における門人指導」（小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』、八坂書房、2010）89頁参照。蘭山から能登に住む村松標左衛門宛の寛政11年（1799）年2月の書簡の中に「加州津田宇内は御近国之事御座候間、此方へ御尋被成可宜候。本人只今は随分齋と改申候。金沢下堤町に而御座候」とあることが載せられている。当時金沢に住んだ随分齋・煥の事を京都の蘭山が知っていたことを見れば、寛永12年の養の隠居以前から随分齋と改名していたことを窺わせる。
- (31) 板垣英治『金沢大学の淵源』（金沢大学資料館紀要 創基150年記念別冊、平成24）18頁参照。安政2年（1855）10月に津田淳三ら9名（他は、今村兎朔、田中大玄、島崎元鼎、津田随分齋、伏田元幹、田中兵庫、土岐雄吉、遠藤三六）により金沢の堤町に家を借りて私立種痘所を開いたのがその濫觴である。この中心になった津田淳三は随分齋・煥の養子である。
- (32) 木内石亭『天狗爪石奇談』（寛政8年〈1796〉刊）には「加賀金沢津田氏【俗称太一郎／号随分齋】弄石同癖ノ旧識ナリ 天明七年十二月五日爪石一箇ヲ贈テ（略）」とある。【 】内は割註
- (33) この時の目録『奇石会品目』には石亭を含む弄石社の社友19名の計135種の収集品が載せられており、随分齋・養は5種「能登産 含水瑪瑙」、「出羽産 自然銅」、「越中産 柏枝瑪瑙」、「雷環」、「雷鑽」を出品していた記載がある。
- (34) 原本は失われ、九州大学理系図書館と国立国会図書館に写本（上中下3巻3）が残る。九州大学所蔵本上巻扉には、筆写された際に書き加えられたものと見られる「津田養徳夫撰、男煥君若撰、石丈野史上 諸国産の石について記載」の文字がある。全国各地に産する岩石、化石、鉱石、奇石など1317種を旧国ごとに記載する。その内加越能三国は加賀87、越中44、能登40の計171種で約13%、遊学した京都、及び隣接する畿内（大和、山城、摂津、河内、和泉）295種で約23%と高い比率になる。養、煥ともにこの地域の石類に詳しくあったことがわかる。日本鉱業史料集刊行委員会編『日本鉱業史料集』第十三期近世編下（白亜書房、1990）には九州大学本を底本にした影印があり、小論ではこれを参照した。
- (35) このうち「石炭」、「硫黄」、「やまうみの握り飯」（団塊状の玉滴石を指す。また〈やまうみ〉は〈やまうば〔山姥〕の誤記か）、「材木の化石」（柱状節理を指す）は、『雲根志』にも記載がある。「自然瑪瑙硯」の産地「立山唱名か滝の流れ有 願寺川」は常願寺川上流、称名川の付近を指すものであろう。この他に『雲根志』でも挙げられているものには「山姥鑿」、「鼓石」、「青焰硝」などがある。
- (36) 大沢眞澄「小野蘭山と鉱物—『本草綱目』を中心に—」（小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会前掲書、（15）頁参照。江戸時代の鉱物に関する知識を、木内石亭の『雲根志』に代表される弄石派と小野蘭山をはじめとする本草学派の石

薬としての鉱物、鉱山に関するもの2つに大別する考え方を示している。

- (37) 『植物研究雑誌』6巻5号(1929)には坂元慎が嘉永5年(1852)5月28日に江戸白髭舎で開催した薬品会の趣意書と目録が写真掲載されている。その時には津田随分齋・煥が出品しており、「石鬚、人代石(神代石カ)ナタ形 同上品トボコノ右三種 津田随分齋」とある。それに続く牧野富太郎の署名記事には「右会ノ出品者中ノ津田随分齋ハ小野蘭山ノ高弟デアッタトノ事デアル」とある。津田随分齋・煥が小野蘭山に入門していたこと、出品が全て石品であることから、随分齋・煥も弄石に造詣が深かったことがわかる。但し、出品物自体は養の収集を引き継いだ品だった可能性もある。
- (38) 津田進三「特別講演・江戸時代における石川県医学史」(『日本医学学会雑誌』第二十二巻第二号、昭和51年)98頁参照。「荻野元凱は早くから蘭学に接し明和7年(1770)「刺絡篇」を著し、さらに河口信任らの解屍にも立ち会った。一方寛政10年の小石元俊らの施薬院の解屍には加賀小松の梁田元長が列なっており、津田随分齋もまた解剖に習熟していたにもかかわらず、さらに後年の蘭学興隆期も含めて石川県内では明治まで何故か一回の解剖も行われなかったようである。」とある。随分齋が養、煥のいずれかを指すか、またいつの解剖に立ち会ったのかも曖昧である。
- (39) 煥が元凱に入門するのは寛政4年なので、この時にはまだ上洛していなかった可能性が高い。当時、解剖の所見では山脇東洋が体内臓器解明を重視したのに対して、『解屍編』では頭部の解明を行い脳と眼球の仔細な解剖図を載せている。青陵の記述に拠れば随分齋は頭と指を自宅へ持ち帰り詳細に解剖したことになるが、如何に奇行があったとは言え、これが意味なく猟奇的な趣味による行為とは考えにくく、頭部の詳細な解剖を行ったことが『解屍編』の解剖図や記述に関連しているものとすれば、養の行動に合理的な説明が付くと考える。
- (40) 富山県立山博物館平成20年度特別企画展展示解説書『薬草と加賀藩 立山から百味筆筒への道を探る』所収の、嘉藤潤一「Ⅱ. 加賀藩領内の薬草・産物調査と立山」に調査の歴史と作成された書籍の概要がまとめられている。
- (41) 加越能文庫(金沢市立玉川図書館蔵)。請求番号[16.76-14]。外題には「加能所産薬種考 単」とある。内題に「貞享乙丑年暮者下旬調をく 養叔 玄悦 恭順」とあり、貞享2年(1685)に加賀藩医の堀部養叔、山脇玄悦、坂井恭順が加賀、能登、越中で薬種を調査し書き上げたもの。現存する史料の中では最も古い薬種調査の書き上げである。
- (42) 『金沢市史 通史 近世2』78頁参照。
- (43) 伊東文書『御用留』(富山県立図書館蔵)に、新川郡奉行が発した「安政七年六月 領国産物調理差出方申触書」が残る。同文書は新川郡沼保村の十村役伊東家の文書。文化3年7月に立山から下山後に青陵は伊東彦四郎を訪ねている。
- (44) 平成21年度富山県公文書館特別企画展解説書『近世越中産物の世界』4頁参照。
- (45) 長山直治『寺島蔵人と加賀藩政』(桂書房、2003)110~114頁参照。
- (46) 加越能文庫『郡方産物帳 六 新川郡』(金沢市立玉川図書館蔵)が元文3年に作成された産物帳の写本で文化9年に作成されたものであることは、題簽に小さく朱書きした「文化九年壬申十月廿七日出来」の記載からわかる。同文庫の目録に拠れば、題簽の記載では『越州物産帳』、『能州物産帳』にはいずれも文化10年の日付があり、享保元文の産物調査の写しと見られる。
- (47) 坂元慎、字は元脩、通称元慎(宝暦2年<1752>~文政4年<1821>)は坂元慎と書かれたものもある。また子の尚教も本草家で元慎を名乗ったので、諸史料に見える「坂元慎」の活動は、何れであるか確認に注意が必要である。
- (48) 財団法人研医会図書館がwebサイトで公開する「研医会通信10号」(2007.4.6)には、同館が所蔵する『加賀国産物産書上帳』上・下巻の跋に「右 文化八辛未年 十月 前田土佐守直方賢候ヨリ借用写之者也 村井長世」と記載のあることが紹介されている。岩瀬文庫古典籍書誌データベースでは、同文庫所蔵『加賀国産物』との模写関係が指摘されており、岩瀬文庫所蔵本の巻末には「右 文化八辛未年 十月 前田土佐守直方賢候ヨリ借用写之者也 村井長世ノ右文化癸酉年閏十一月高島木工方所持之本を以如加朱」とある。
- (49) 加越能文庫『立山硫黄之事并河原波山師小屋之事』(金沢市立玉川図書館蔵)参照。「立山硫黄之事」は元禄12年(1699)に豊嶋藤兵衛が立山で硫黄を試掘した際の費用の覚書、奥村湍兵衛の添書、元禄13年(1700)2月の御用番宛ての立山硫黄採掘伺の史料。
- (50) 高瀬保「加賀国産物の江戸への進出」(『富山史壇』22号、1961)32頁参照。
- (51) 長山(2003)前掲書、58~62頁参照。
- (52) 『金沢市史 通史近世2』781~783頁参照。
- (53) 『兼葭堂日記』には、寛政3年9月21日、22日に石亭が兼葭堂を訪ね一泊していたこと。また寛政11年9月2日、寛政12年11月11日には石亭からの書状が来たことを記しており、兼葭堂と石亭も個別に接点を持っていたことが分かる。
- (54) 八木(1991)前掲論文、79~82頁参照。



## 立山芦峯寺の「佐伯武平」と両澤山大慶院（新潟県十日町市） —芦峯寺の媯尊と大慶院の大日姥婆尊の関係をめぐって—

細木ひとみ

### はじめに

芦峯寺集落に祀られる媯尊は、「おんばさま」と呼ばれ、集落の人々に大切にお祀りされている<sup>(1)</sup>（写真1）。近世期につくられた縁起類などには、媯堂に本尊3躰とその両脇に当時の日本の国の数である66躰が祀られていたと記されている。しかし、明治初年の神仏判然令により、媯堂は破却され、現在では14躰が残るのみである<sup>(2)</sup>。そのうちの1躰の像底部に「永和元年六月日 式部阿闍梨□□」と記された墨書銘がある（写真2）。これにより、少なくとも永和元年（1375）には媯尊が芦峯寺で祀られていたということがうかがえるが、当時どのように祀られていたのか、誰が祀っていたのかなど、まだまだ不明なことが多い。



写真1 芦峯寺の媯尊坐像（媯堂の御本尊とされる3躰）

平成29年度（2017）に開催した前期企画展「うば尊を祀る」では、この芦峯寺集落での媯尊信仰と、その信仰の広がりについて紹介した<sup>(3)</sup>。その中で、特に気になったのが、新潟県十日町市新座にある両澤山大慶院との関わりである。しかし、大慶院の御本尊の「大日姥婆尊」と立山芦峯寺の媯尊が関わる話が伝わっているものの、縁起などはなく、詳細なことは紹介できなかった。

そのような中で、令和3年（2021）4月に芦峯寺集落の「佐伯武平」（武兵衛）氏宅から「家の物を処分する」という話を伺い、訪ねたところ、「佐伯武平」氏宛に大慶院住職の「中川光忍」氏より送られた昭和27年（1952）の手紙2通とハガキ1枚、昭和31年（1956）の手紙2通とハガキ2枚を発見した。この時の「佐伯武平」は「佐伯武森」氏のこと、明治10年（1877）3月21日生まれであるから、昭和27年には75歳であったとみられる。

そこで、本稿では「佐伯武平」氏に送られたこの4通の手紙と3枚のハガキの紹介とともに、新潟県十日町市の大慶院と芦峯寺との関わりを探る手がかりにしたいと思う。



写真2 像底部にある墨書  
（写真1の中央の媯尊）

### 1. 両澤山大慶院の大日姥婆尊

新潟県十日町市新座に所在する大慶院は、その開基について、平安時代初期、役行者から8代目の国珍大僧正が祖師の靈感をいただき、出羽の国・羽黒山を開闢（開山）しようとして北国へ下向したが、その途中にこの地に留まって衆生を教化したが、出羽国へ旅立つにあたり、懇望されたので同道していた弟子の珍教阿闍梨に捧持仏不動明王をあたえ、大同元年（806）に珍教阿闍梨が伽藍を造営したのが始まりだというのである。そして、修験密教を相伝し、本山修験・聖護院門跡派の越後の中心道場として布教につとめ、明治維新後に天台宗に帰属したという。

この大慶院の御本尊である「大日姥婆尊」に立山芦峯寺の媮尊と関わる伝承があり、昭和31年(1956)に中川光忍住職がまとめた大慶院発行の案内パンフレットには、次のように紹介されている（傍線は加筆、写真3）。

承德元年（一〇九七）中興開山了善和尚の時、当時の檀当石原道仙は、ある夜、靈夢をみたのであります。靈夢のうちに恐ろしい老婆が現れ「我はこれ冥府三途の河の辺に住む奪衣婆なり。外には極悪忿怒の相を現しているが、本地は大日如来にして大慈悲心を以て衆生を済度す。千歳の昔、越中の国立山へ五穀と麻の種をもって天降り、之を世に広め一切衆生に食物と衣服を与えて生長せしめ、仏法僧の三宝を知らしめ、終には寂滅の本土に帰する因縁を知らしむ。永く立山に鎮座して衆生を済度し来りしが、汝が善根誠に殊勝なり、殊に当地は仏法流布の靈地なればこの地に来りて衆生を済度せん」とす。汝が日頃信仰いたせる了善和尚と同道し、立山へ登り我が尊像を此地に移し、勸善懲惡の因果を衆生にらしむべし。」と告げ、光明輝く大日如来の御姿となり彷彿として消え給うたのであります。

道仙は不思議に思い靈夢の次第を了善和尚に語りましたところ、前世の結縁ならん急ぎ同道いたしましたしようと、兩人立山の芦くら寺に至りこの靈夢のことを物語りましたところ、不思議にも芦くら寺の別当にも同じ御示現があったと、互いに靈夢の符号せるは誠に姥婆尊の御奇瑞の事である。早速御佛を送り奉らんとて姥婆如来三体のうちの一体を授かり、当地に遷座したのであります。また、新たに姥婆如来の台座を作って安置したことから、村名を山本から新座と改称したのであります。現在、本尊佛として安置されていますのがこの姥婆尊であります。

と記されている。



写真3 大慶院発行の案内パンフレット

この大慶院発行の案内パンフレットの内容をまとめると、

- (1) 承德元年（1097）、檀当・石原道仙の夢に恐ろしい老婆が現れて、「我はこれ冥府三途の河の辺に住む奪衣婆なり」と名乗り、本地は大日如来だと語っている。
- (2) この奪衣婆は、越中の国立山へ五穀と麻の種をもって天降り、これを世に広め、一切衆生に食物と衣服を与えて生長させ、仏・法・僧の三宝を知らせしめ、ついには「寂滅の本土」に帰する因縁を知らしめたという。そして、ながく立山に鎮座して衆生を済度（仏や菩薩などが迷い苦しむ衆生を救い、悟りの世界に渡し導くこと）してきたが、石原道仙が善根で殊勝なうえ、当地（十日町市新座）は「仏法流布の霊地」なので、この地に来て衆生を済度したい。了善和尚と一緒に、立山へ登り、「我が尊像」をこの地に移し、勧善懲悪の因果を衆生に知らせるべしと告げた。
- (3) 石原道仙は、了善和尚と立山芦峯寺に来て、霊夢について語ったところ、芦峯寺の別当にも同じ御示現があり、「姥婆尊の御奇瑞の事」と姥婆如来3体のうちの1体を授かり、遷座した。

というのである。つまり、大慶院の御本尊の「大日姥婆尊」像は、平安時代後期に檀当であった石原道仙の見た夢に現れた「老婆＝奪衣婆」の語ったことで、立山の芦峯寺から勧請したとされている。ただし、「はじめに」でも紹介したように、年紀が記された縁起や史料はなく、いつごろから伝えられている話なのか、詳細はわからない<sup>(4)</sup>。

それでも、芦峯寺の媯尊については安永8年（1779）以降の縁起や勧進記に、「御本尊は三体、左手に五穀を納め、右の手に麻の種を執持している」と記されているので、大慶院発行の案内パンフレットに「立山へ五穀と麻の種をもって天降り」と記されているのも、また「姥婆如来三体のうちの一体を授かり」と記されているのも、芦峯寺の宿坊家が布教勧進活動の際に用いた縁起や勧進記の影響を受けていると考えられる。

ところで、大慶院の御本尊「大日姥婆尊」像は秘仏であり、33年に一度の御開帳でのみ、その姿を拝むことができる（写真4）。



写真4 大日姥婆尊像（平成30年御開帳時のお姿）



近年の「大日娑婆尊大開扉」は、平成30年（2018）9月8日（土）と9月9日（日）で、9月8日（土）の午後3時より御本尊の大日娑婆尊像の御開帳（大般若・大護摩供修法）、9月9日（日）の午前9時30分より中川玄祐和尚の晋山式、午前10時より火生三昧（火渡りの儀）が行われた（写真5・6）。33年ぶりの開催のため、この時の式次第は昭和60年（1985）に行った御開帳を参考にしたという。

大日娑婆尊像は高い位置にある厨子の中に祀られており、御開帳にあたって右の指には善の綱が結ばれ、その綱は本堂前の回向柱と結ばれていた（写真7）。頭から脚まで白布をまとっているため、体部分や脚の部分がどのような造形なのかは不明だが、いただいた御本尊の護符がその姿が参考になる（写真8）。しかし、平成30年の御開帳では「立山から勧請された娑婆尊」という話は紹介されず、地元の方でも立山との関わりを知らない方もいた。



写真5 平成30年御開帳（堂内）



写真6 火生三昧（火渡りの儀）



写真7 本堂前の回向柱



写真8 娑婆尊の護符

## 2. 佐伯武平宛の昭和27年の手紙

大慶院の中川光忍住職が手紙やハガキを送った「佐伯武平」の家は代々神職を勤めており、芦峯寺の五社人家の一つと考えられる。享和元年（1801）以降の絵図と考えられる「芦峯寺高割山草高并御寄進高絵図」（個人蔵）には芦峯寺集落の宿坊家33軒と社人家5軒が記されているが、そこにも「武平」としてその名が記されている。手紙を受け取った佐伯武平氏（武森氏）は神官の資格は取持していなかったが、父親の武曲氏は神官として活躍した人物である。

昭和27年（1952）に佐伯武平氏へ宛てた手紙2通とハガキ1枚のうち、1番古い消印が昭和27年8月14日に書かれたものである（写真9）。



写真9 昭和27年8月14日の手紙

まず、初めの挨拶で「先般訪芦の際は色々御世話になり有難う御座いました」と記されていることから、この手紙が出される前に中川住職が芦峯寺へ訪れており、その時に佐伯武平氏がお世話をしたことがうかがえる。そして、その際立山寺の御住職佐伯秀胤師より御来越願ふ様に約束して参りましたので別紙の様なポスター迄送って宣傳してみますがその後立山寺へ再度御手紙にて御返書を願ってゐるのですが未だに通信なく途方にくれて居ります。計画もせねば小生の立場もなく困って居ります。就ては貴殿より立山寺にお伺いの上是非共御来越下さる様お話し下され、諾否の程至急御返書賜り度く御願ひ申し上げます。

とあり、この手紙の1番の目的は、芦峯寺へ訪れた際に芦峯寺の立山寺住職・佐伯秀胤氏に大慶院へお越しいただける約束をしているがその後返事がなく、困っているため、佐伯武平氏に立山寺に伺って大慶院へお越しいただけるか否かの返事をいただききたいというお願いである。「別紙の様なポスター迄送って宣傳してみます」や「計画もせねば小生の立場もなく困って居ります」とあるのは、手紙と一緒に大切に保管されていた「昭和27年」と記された「嬭婆尊開帳回向袋」（写真10）やパンフレット類から、昭和27年



写真10 昭和27年の嬭婆尊開帳回向袋

に行われた33年に一度の「大日嬭婆尊御開帳」のこととみられる。芦峯寺の立山寺の佐伯秀胤住職は芦峯寺泉蔵坊の子孫で、泉蔵坊家は明治期になって無住となっていた富山市梅沢町の円隆寺の住職となり、芦峯寺には越中立山寺を創立した家である。円隆寺住職であった佐伯秀胤氏は、立山講社の活動に関わった人物であり<sup>(5)</sup>、芦峯寺閻魔堂での行事を執り行っていた人でもある。明治36年（1903）生まれというから、昭和27年は49歳である。この後に届いた昭和27年8月26日のハガキには、「翌々日立山寺様より書面を戴き恐縮いたしました」と佐伯秀胤氏より返事があったことと、佐伯武平氏に9月3日に立山寺様（佐伯秀胤氏）

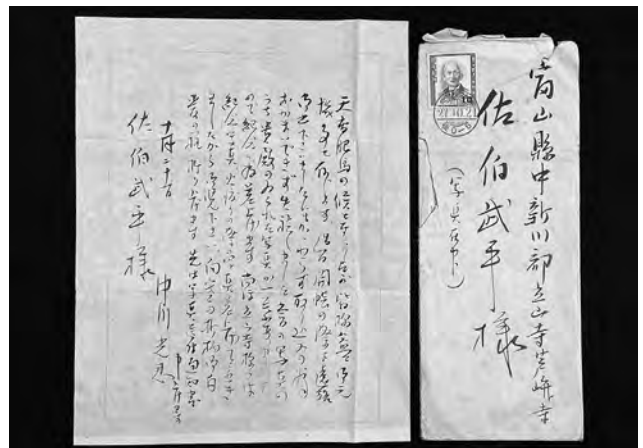


写真11 昭和27年10月21日の手紙

と一緒に参加してほしいと誘っている。

もう1通は、昭和27年10月21日の消印がある手紙である（写真11）。こちらには、「過日開帳の際は遠路御出で下さいましたにもかかわらず取り込みの為おかまいできず失礼しました。当方の写真のうち貴殿のみられた写真一葉ありましたので記念の為差上げます。尚ほ立山寺様には記念写真、火渡りの際の写真差上げて置きましたから御覧下さい」と記されている。一緒に送られてきた写真の裏にも、

新潟縣中魚沼郡中条村新座  
大慶院 中川光忍  
姥婆尊開帳式年祭

昭和二十七年九月四日

佐伯武森 七十五歳

と記されているので、佐伯武平氏も佐伯秀胤住職とともに昭和27年の「大日姥婆尊大開扉」に出席したようである（写真12）。

また、佐伯秀胤住職においては、昭和60年（1985）9月の十日町タイムス社の記事に、

御開扉記念事業は、越中立山寺（姥婆尊伝来寺院）から齊木秀胤大僧正を本山特使として招き七日は大般若大護摩修法、奉納芸能大会、八日は稚児行列、晋山式、火生三昧（火渡り）が行われる。

とあり、33年後の昭和60年9月7日と8日に行われた「大日姥婆尊大開扉」にも出席したのがわかっている<sup>(6)</sup>。

これらの手紙から、少なくとも昭和27年には芦峯寺の佐伯武平氏や佐伯秀胤氏と大慶院の中川光忍住職に関わりがあったことがうかがえるのである。



写真12 大慶院から送られたきた写真(昭和27年)



佐伯 武平(武森)氏

### 3. 佐伯武平宛の昭和31年の手紙

次に発見したのが、昭和31年（1956）の手紙2通とハガキ2枚である。

大慶院の中川光忍住職が、昭和31年7月16日に書いた手紙（下線は加筆、写真13）には、

昨秋末田村啓松様発起人となり当院信者のうちに立山講中が組織されました。講員四十数名ですが大体三年計画にて三年間のうちに講員全部抽籤にて登拝することになり今夏第一陣を送りたいと思っております。然し田村様も小生も其の他の講員も立山へ登山したことはあ利ませんので勝手が分らず困っております。就きましては立山登山の心得とでも申しませうか服装、雨具の種類、衣類の用意、食料等の携帯、履物の種類、其の他の持参物御きかせいただければ幸甚て存じ 御照会いたします。貴地または山麓へ泊る（十四、五人位）旅館等ありませうか。山上には山小屋がある由なれば立山寺へでも照会して便宜を計ってもらいます。

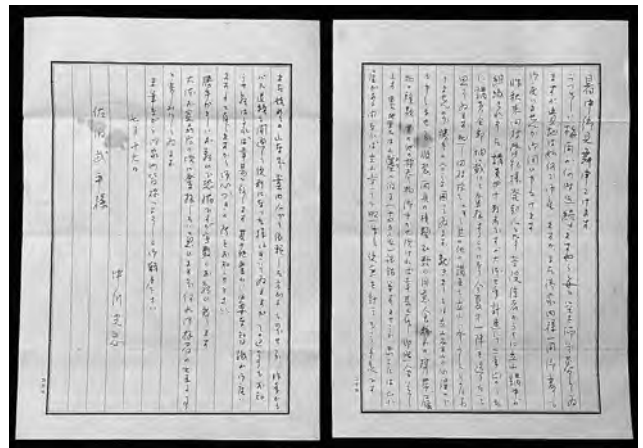


写真13 昭和31年7月16日の手紙

また初めての山なので案内人でも依頼した方が良いでしょう。昨年バス道路も開通して便利になった様に聞いてみますがその辺の事もお知らせ願はれば幸甚と存じます。其の他登山に必要な知識が御座います事と存じますから御心づきの所をお知らせ下さい。勝手がましいお願ひで恐縮ですが宜敷お願ひ致します。

と記されている。

大慶院のある新座地区の立山講については、平成29年（2017）度前期特別企画展「うば尊を祀る」展示解説書<sup>(7)</sup>でも紹介しているが、昭和50年代の立山講に参加した方から伺ったお話では、35年ほど前までは立山講があったという。さらに、次のようなお話も伺った（話者：昭和22年（1947）3月生まれ）。

自分が35歳くらいのときに、「立山講」で立山に参拝した。大慶院は山伏の寺で檀家がおらず、「講」というので毎月積み立てをしていた。

「立山講」は、立山（雄山）に参拝するのが目的の講であり、立山参拝は毎年やっていたと思う。この頃は、この辺りでは庚申講も盛んに行っていた。立山に出かける前に大慶院で宴会をした。8月20日前後に行っていたと思う。大型バス一台で、2泊3日で行っていた。参加者は、一軒1人で、40人くらい。「講中」というより、大慶院を中心とした仲間の集まりという感じだったので、個人の都合で参加・不参加があった。ほとんどが新座集落の人であったが、町の人もいたし、女性もいた。

まず室堂で一泊し、雄山に参拝し、ご来光を拝んだ。参加したところは70代の人が多かったので、山に登らず、室堂で待っているという人もいた。室堂まで下山し、ご飯を食べるときに「天神囃子」を唄ってからお土産と一緒に室堂でお札をもらったと思う（この辺りではお祝いがあると「天神囃子」を唄う）。2泊目は宇奈月でトロッコに乗ったりした。

帰ってくると、「はっばきぬぐ」といって宴会をした。「はっばき」（脚にぐるぐる巻いたもの）をぬぐという意味であった。

というのである。平成29、30年（2018）に行った調査時には詳細がわからなかったが、昭和31年7月の佐伯武平氏に宛てた手紙に「昨秋末田村啓松様発起人となり当院信者のうちに立山講中が組織されました」とあり、昭和30年（1955）の秋に講員40数名で立山講中が組織されたことがわかる。

そして、消印は見えないが、内容から昭和31年の8月のものだとみられるハガキには、

立山登山、今来は十四、五名にて十九日朝六時五十分当山着列車にて登拝する事に決定いたしました。何卒宜敷くお取り計ひ下され度お願い申し上げます。御山案内下さる由何より有難いことと田村様始め一同感謝いたしてあります。何れお拝眉の上万に御禮申上度く楽しみにしてあります。先は右御願ひ込申上ます。とあることから、8月19日の朝に立山へ到着する列車で向かうことを知らせており、先述した手紙の通り、

昭和31年の夏に第1陣が立山登拝にやってきている。そして、8月23日のハガキ(写真14)では、

今般立山登拝の節は御老体にもかかわらず、山上近わざわざ御案内下され有難く存じて居りましたのに結構なる御土産迄御恵与下され厚く御禮申上ます。十九日は皆、相当な疲れを感じて居りましたが、廿日は一同無事に、しかも元気で地獄谷の偉観を見物し下山いたしました。途中、宇奈月温泉に一泊いたし、廿一日夕刻一同恙なく帰宅いたしましたから、憚りながら御休心ください。

と記されており、8月19日、20日で立山登拝を行い、宇奈月温泉で一泊してから帰宅して旨を報告している。しかも、「御老体」と記されているが、佐伯武平氏はこの時79歳であったが山上の近くまで案内して行ったようである。

さらに、昭和31年10月29日の手紙(下線は加筆、写真15)には、立山登山の旨は本当に御厄介様に相成り深謝いたしていません。立山連峰には幾度か寒も見られてると存じます。今はなつかしい思い出で御座います。(中略)今朝田村啓松様宅へ御伺いし御書面の趣き申し伝いました処、登山より帰宅以来多忙に紛れ令状も差上げず失礼しているが記念盃は確かに三ヶ頂戴し(小生は一の越立山荘にて頂戴いたしました)帰宅して御本家へ一ヶ御貴殿より贈り物としてお届けし一ヶは自らの家宝として保存してみると申し大変恐縮してみました。早速御書面差上げる由申して居りました。

当院にては同封印刷物の様に開創一、一五〇年御遠忌を記念し茅葺家根を垂丹葺屋根に改築する様計画されました。当院の来歴姥婆尊の因縁等記し信仰を新たにしていきたい考へです。由緒に富

んだ芦峯寺の昔の盛歎を思い出す時感慨無量なものがあります。御ついで節立山寺御住職様へ一部差し上げて下さい。何卒御住職様へも宜敷くお伝へでされ度お願い申し上げます。

と記されている。お礼とともに、開創1,150年御遠忌を記念し、茅葺屋根の改築を計画していることと、因縁等を記して信仰を新たにしていきたいと述べている。この「当院の来歴姥婆尊の因縁等記し」とあるのが、第1章で紹介した大慶院発行の案内パンフレットとみられる。

おわりに

江戸時代の芦峯寺嬬尊は、「布橋灌頂会」を中心に女性からの信仰を集めており、加賀藩からの御普請所の一つでもあった。それが、明治初年の神仏判然令で大きく変化することとなる<sup>(8)</sup>。

明治2年(1869)3月、端裏書に「寺社奉行江(へ)」、包紙に「姥堂等仏閣御廃止之押」と記されている史料(芦峯寺一山会文書、富山県指定文化財)では、金沢藩より、立山権現を雄山神社と改め、芦峯寺・岩峯寺の衆徒を復飾させ神勤めを仰せ渡し、仏像や嬬堂等の建物を取り払うように命じられた。そして、同

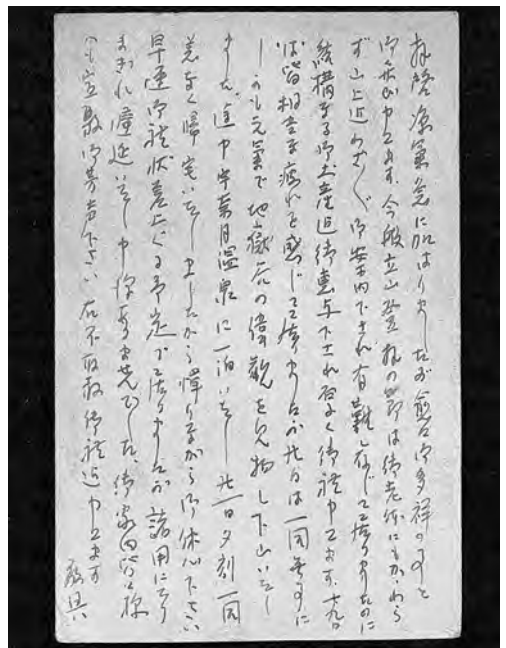


写真14 昭和31年8月23日消印のハガキ

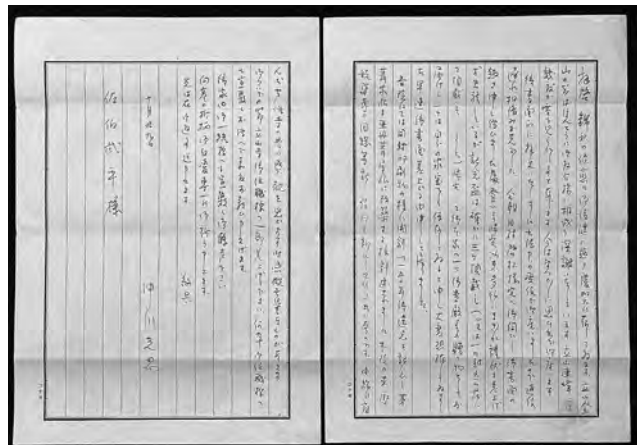


写真15 昭和31年10月29日の手紙

年3月28日に金沢藩の寺社奉行、多賀左近より立山芦峯社人中に出された文書では、衆徒らが復飾するにあたり、自らの手で媯堂、閻魔堂、帝釈堂、講堂を取り払うように命じられている。最終的には、講堂は祈願所として残っている。そして、閻魔堂も佐伯幸長氏が『立山信仰の源流と変遷』<sup>(9)</sup>で、「僅かに炎魔堂だけが残された。いや残されたのではない。芦峯に寺が無くなって、彼是と都合が悪いので、村の老人等の集いの場にして愚図々々している中に、取り払いが遅れ、廃仏毀釈の官風が消えたので、そのままになってきたのである」と述べており、また「集落に一番近いところにある」との理由で破却を免れたとも伝わっている。結局はこの後、媯堂は破却された。

その後、芦峯寺の媯尊については『立山信仰の源流と変遷』<sup>(10)</sup>に「明治維新の廃寺の際は本尊三体は開山堂の脇壇の左右に移され、一山によって奉祀されてきたが昭和十五年国幣社昇格の際、一時一山の手で善道坊に預けられたが、終戦後、更に炎魔堂に移されて・・・」とあり、本尊とされる媯尊3軀は、開山堂から閻魔堂へと移されたことがわかる。開山堂に移された後の詳しい史料はないが、『一山社年中議事録』（芦峯寺一山会蔵）の昭和15年（1940）10月14日の記録に、

開山堂内ニ安置シて有りシ旧娑堂本尊三体、御治国仏像二体、坐像不動明王一体、計六体村方へ寄附する事

とあり、芦峯寺一山会から村方へ寄附されたことにより、終戦後、閻魔堂へと移されたようである。昭和20年代後半からは、芦峯寺地区の婦人会（現在は、芦峯女性の会）が引き継ぎ、お祀りしている。

昭和50年代に大慶院の立山講に参加された方の話では、「立山講の立山登山は芦峯寺媯尊へお参りすることを目的としていたわけではなかった」という。大慶院の大日娑婆尊と芦峯寺との関わりについてはまだまだわからないことが多いが、少なくとも昭和27年には芦峯寺の佐伯武平氏や佐伯秀胤住職と大慶院の中川光忍住職に関わりがあり、昭和27年（1952）9月に行われた大慶院の「大日娑婆尊大開扉」にも招待されている。そして、昭和60年9月の「大日娑婆尊大開扉」にも佐伯秀胤住職は招待されているのである。さらに、大慶院で昭和30年（1955）秋に立山講中が結成されたことも知ることができた。両者の関係にはついては課題も残るが、今後は佐伯武平家についても調査していきたいと思う。

#### 【付記】

本稿は、平成29年度特別企画展「うば尊を祀る」の展示解説書をもとに、新たにわかったことを加筆したものである。

本稿作成にあたっては、青木睦美氏と佐伯哲也氏よりご協力いただきました。また、平成29年と30年の調査は、加藤基樹氏と行いました。ここに記して皆様に御礼申し上げます。

#### 【註】

- (1) 芦峯寺集落のうば尊は、「媯尊」と書く。「媯」の字は、佐伯幸長氏が『立山信仰の源流と変遷』で「娑と田を三個重ねた字は、芦峯の嶺の字と同様に、大辞典にも見当たらない。結局、立山衆徒独特の作り字であるらしい」と述べているように、芦峯寺集落以外では使用されていない独特な字である。
- (2) 現在は、芦峯寺閻魔堂に6軀、立山博物館常設展示室に8軀ある。すべて芦峯寺閻魔堂所蔵で、うち5軀が富山県指定文化財。
- (3) 平成29年度前期特別企画展「うば尊を祀る」展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成29年7月15日刊）。
- (4) 大慶院については、『新座の里』（新座新興会、平成3年3月刊）にも掲載されている。
- (5) 平成30年度後期特別企画展「立山の明治維新」展示解説書（富山県 [立山博物館]、平成30年9月15日刊）他、参照のこと。
- (6) 註（3）に同じ。
- (7) 註（3）に同じ。
- (8) 細木ひとみ「明治期の媯堂破却と媯尊への信仰」（平成30年度後期特別企画展「立山の明治維新」展示解説書所収、富山県 [立山博物館]、平成30年9月15日刊）。
- (9) 佐伯幸長『立山信仰の源流と変遷』（立山神道本院、昭和48年9月15日刊）。
- (10) 註（9）に同じ。



## 〈研究ノート〉立山曼荼羅における地蔵菩薩の図像について —立山山中の賽の河原・地獄谷を中心に—

石崎 康弘

### はじめに

地蔵菩薩は、奈良期に中国から伝わった『地蔵本願経』では、釈尊入滅後、弥勒菩薩が成仏するまでの無仏世界で、六道に迷い苦しむ人々の救済を、釈迦如来から委ねられたとされる。平安中期までは、他の仏の脇侍的な存在であったが、平安後期、戦乱・疫病などの深刻な社会不安の中、末法思想にもとづく浄土信仰が広まると、極楽往生が叶わぬ者は地獄に堕ちるとされたことで、人々は地獄の責め苦からの救済を、閻魔王と合体ともされる地蔵菩薩に強く求めるようになった。

立山は、修験者の行場の一つとなり、仏教における地獄の思想と日本古来の山中他界観とが結びついたことで、山中の地獄谷の殺伐とした景観が、地獄の世界に見立てられた。たとえば、立山地獄にふれた現存最古の文献である『法華験記』には「昔より伝へ言はく、日本国の人、罪を造れば、多く堕ちて立山の地獄にあり、云々といふ」とあり、都の貴族・僧侶のあいだで立山地獄が認識され、立山に行きさえすれば死んだ家族や友人に会うことができると信じられていたようである。そして平安末期には、歌謡集『梁塵秘抄』にみられるように、立山は日本各地の霊山・霊場とともに、修験の行場、あるいは観音霊場として知られていた。『今昔物語集』では観音菩薩とともに、立山地獄を舞台とした地蔵菩薩による亡者救済譚が登場する。このように、平安末期は立山地獄に堕ちた亡者の救済者は地蔵菩薩や観音菩薩であり、救済されて転生する先も阿弥陀如来の極楽浄土ではなく、帝釈天が住むとされる切利天であった。

鎌倉期以降、立山では、山中の浄土を阿弥陀如来の浄土とする思想が強く表れてくる。その一方で、山麓の芦峯寺に閻魔堂が現存するように、十王やうば尊が信奉をあつめ、その後の近世における立山信仰の形成に大きな役割を果たしていく。

そして江戸期には、加賀藩の庇護のもと、立山信仰は、立山山麓の芦峯寺と岩峯寺の衆徒によって、加賀藩領域内をはじめ、全国各地に布教されて広まっていく。その布教内容の中核をなしたのは立山の地獄信仰であり、それと不即不離とされたのが、平安期から水脈のごとく流れる地獄抜苦としての地蔵信仰であった。地蔵菩薩は立山の本地である阿弥陀如来や芦峯寺のうば尊とともに、立山衆徒に伝わる古文書や「立山曼荼羅」に描かれるとともに、立山山中・山麓には地蔵の石像が数多く祀られていった。

本稿では、まず立山信仰での地蔵信仰を研究する基礎資料とするために、「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩の場面を抽出し、整理を行う。次に立山地獄の原風景ともいえる、立山山中の賽の河原や地獄谷の実景を紹介する。そして立山地獄を舞台とした説話や絵画などとともに、「立山曼荼羅」に描かれた地蔵菩薩を紹介したい。

### 1 「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩の図像

#### 1-1 「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩一覧

「立山曼荼羅」は、現在52本の存在が確認されているが、地蔵菩薩の描かれ方は「立山曼荼羅」諸本で様々である。

下記の【表1】は「立山曼荼羅」諸本における地蔵菩薩が描かれた場面を、抽出したものである。なお、立山曼荼羅の分類および配列は、『新 総覧 立山曼荼羅』（富山県 [立山博物館] 発行、2022年）に依拠した。



表1 「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩一覧

I 芦峯寺集落の宿坊家に関する立山曼荼羅										
番号	制作年	資料名	所蔵者	幅曲	備考	地蔵菩薩の描かれた場面				
						賽の河原 (構成要素)	二十五 菩薩中	閻魔 堂前	施餓鬼 法要	その他
①芦峯寺の宿坊家と関わって伝わっている立山曼荼羅										
1		相真坊A本	個人(立山町)	5		○地蔵・子・石・卒塔婆	○	○	○	
2		相真坊B本	個人(立山町)	4		○地蔵・子・石	○	—	○	
3		大仙坊A本	大仙坊(立山町)	4	大仙坊の檀那場が尾張国	○地蔵・子・石	○	—	○	
4		大仙坊B本	大仙坊(立山町)	4	大仙坊の檀那場が尾張国	○地蔵・子(服)・石	—	—	○	
5		泉蔵坊本	円隆寺(富山市)	4	旧所蔵宿坊家の泉蔵坊の檀那場が尾張国	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼	○	○	○	
6		善道坊本	立山博物館	4	旧所蔵宿坊家の善道坊の檀那場が三河国	○地蔵・子・石	○	—	○	
7	安政5年 (1858)	宝泉坊本	個人(富山市)、立山博物館寄託	4	三河国西尾藩松平乗全の直筆。宝泉坊に寄進	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼2	○	○	○	
8	慶応2年 (1866)	吉祥坊本	立山博物館	4	三河国岡崎藩主本多忠民が発願・制作。「静寛院宮御寄附」の識札	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼2	○	○	○	
9		立山博物館本D (旧・越中書林本)	立山博物館	1		○地蔵・子(裸)・石・卒塔婆・鬼2	○	○	○	
10		立山町本	立山町	4	芦峯寺長寛坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼	—	○	○	
11		筒井家本	個人(立山町)	4	芦峯寺宝龍坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子(裸)・石・卒塔婆・鬼(金棒で子どもを刺し、血が滴る)	○	—	○	
12		龍光寺本	龍光寺(立山町)	4	芦峯寺日光坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子・卒塔婆	—	—	—	
13		稲沢家本	個人(立山町)、立山博物館寄託	3	芦峯寺教算坊及び福泉坊旧蔵との伝承あり	○地蔵・子(服)・石	—	—	○	
14		多賀坊本	個人(立山町)	1	岩峯寺多賀坊、芦峯寺吉祥坊おの婚姻関係あり	○地蔵・子・石	—	—	○	
15		佐伯家本	個人(立山町)、立山博物館借用	4	芦峯寺の百姓家に伝来	○地蔵・子・石・川	△ ※	—	○	※宝珠を持っているが錫杖は確認できず
②芦峯寺の宿坊家の檀那場と関係すると考えられる立山曼荼羅										
16		大江寺本	立山博物館、大江寺(三重県鳥羽市)旧蔵	1	・折り畳み本形式の巨大な一枚物	○地蔵・子(一人だけ服)・石	—	—	○	
17		金蔵院本	金蔵院(新潟県糸魚市)	4		○地蔵・子・石・卒塔婆・鬼	○	○	○	
18	安政2年 (1855)	最勝寺本	最勝寺所(愛知県知多郡阿久比町)、立山博物館寄託	1	知多郡寺本村の常光院僧侶・至圓制作	○地蔵・子・石・卒塔婆?	—	—	○	橋と地獄谷の坂のそれぞれに地蔵菩薩が1尊ずつ
19		坪井家A本	個人(愛知県名古屋)、立山博物館寄託	4	芦峯寺教蔵坊→龍淵→日光坊旧蔵か、画工の飛陽蘭江齋が修復・軸弔	○地蔵・子・石・謎の人物?	○	—	○	
20		坪井家B本	個人(愛知県名古屋市)	4	日光坊旧所蔵	○地蔵・子・石・鬼	—	○	○	
21		立山博物館F本 (富山県立図書館本)	立山博物館	4	・富山県立図書館→S18 富山県立図書館→R2 立山博物館 ・裏書に遠州敷智郡引馬城之南米津村の磐谷写	○地蔵・子・石・卒塔婆?・鬼	○	○	○	
③芦峯寺宿坊家との関係は不明だが「布橋灌頂会」が描かれている立山										
22		立山黒部貫光株式会社本	立山黒部貫光株式会社(富山市)、立山博物館寄託	3		○地蔵・子・石	△ ※	—	○	地獄谷の方に地蔵菩薩坐像あり ※錫杖は持っているが宝珠は確認できない

II 岩峯寺集落の宿坊家に関する立山曼荼羅										
番号	制作年	資料名	所蔵者	幅曲	備考	地藏菩薩の描かれた場面				
						賽の河原 (構成要素)	二十五 菩薩中	閻魔 堂前	施餓鬼 法要	その他
①岩峯寺の宿坊家に伝わっている立山曼荼羅										
23		玉林坊本	個人(富山市)	4		○地藏・子・石	—	—	○	
24		中道坊本	個人(立山町)、立山博物館寄託	4	岩峯寺中道坊	○地藏・子・石・鬼	—	—	○	
②岩峯寺の宿坊家の檀那場と関係すると考えられる立山曼荼羅										
25		立山博物館A本	立山博物館	2		—	—	—	—	地獄谷に身替り地藏
③岩峯寺の山絵図の構図と関係する立山曼荼羅										
26	文化3年(1806)	中嶋家本(旧市神社)	個人(滋賀県東近江市)、立山博物館寄託	1	北條左近平氏富写	—	—	—	—	地藏堂あり
27	天保2年(1831)又は天保7年(1836)	志鷹家本	個人(立山町)、立山博物館寄託	1	小松谷御坊正林寺(京都市)旧蔵	△子・石のみ	—	—	—	地藏堂あり
28	元治2年(1865)	立山博物館E本	立山博物館	1	摂津国嶋下郡坪井村の村田廣秀写	—	—	—	—	地獄谷に地藏堂あり
29		立山博物館G本(旧広川家本)	立山博物館。個人(新潟県糸魚川市)旧蔵	1		—	—	—	—	地獄谷に地藏堂あり
30		立山博物館B本	立山博物館	2		△みくりが池の湖岸に嬰兒(裸)	—	—	—	
31		立山博物館C本	立山博物館	1		—	—	—	—	
32	1835年か	飯野家本	個人(高岡市)	1		—	—	—	—	地獄谷に地藏堂のみ
④岩峯寺宿坊家との関係は不明だが、「岩峯寺」が詳細に描かれている立山曼荼羅										
33		専称寺本	立山博物館、専称寺(射水市)旧蔵。	3	地獄図・極楽図の2幅もあり	○地藏・子・石・鬼	—	—	—	
34		竹内家本	個人(滋賀県湖南市)、立山博物館寄託	4		○地藏・子・石・鬼	—	—	—	地獄谷に地藏菩薩あり、地藏堂も別にあり
35		桃原寺本	桃原寺(魚津市)	4	4幅のうち、3幅の軸裏に「桃原寺蔵/立山繪傳」、「桃原寺蔵/立山 米迎圖」「桃原寺蔵/立山 地獄圖」	○地藏・子(服)石・地藏堂	—	—	○	
36		西田家本	西田家(上市町)	4		○地藏・子・石・鬼	—	—	○	

Ⅲ 立山ゆかりの寺院に伝来する立山曼荼羅										
番号	制作年	資料名	所蔵者	幅曲	備考	地藏菩薩の描かれた場面				
						賽の河原 (構成要素)	二十五 菩薩中	閻魔 堂前	施餓鬼 法要	その他
37		来迎寺本	来迎寺所(富山市)	4	・近年行ったデジタル近赤外線撮影による科学調査で、一枚の折り畳み形式であったことが判明。 ・光明山撰取院来迎寺(見附来迎寺)	○地藏・子(服の子も)・石	-	-	○	
38		大徳寺本	慈興院大徳寺(魚津市)	4		○地藏・子(2種)・石・卒塔婆	-	-	○	
39		称念寺A本	称念寺(高岡市)	2		○地藏のみ 池に炎	-	-	-	
40	文化十年 (1813)	称念寺B本	称念寺(高岡市)	2		-	-	-	-	
41	天保14年 (1843)	称名庵本	立山博物館、称名庵(富山市) 旧蔵	1		-	-	-	-	地獄谷に地藏堂あり
Ⅳ 特徴のある立山曼荼羅										
42		伊藤家本	個人(小矢部市)	2		○地藏・子(裸)・石・鬼	-	-	○	
42		藤縄家本	個人(上市町)、立山博物館寄託	2		○地藏・子	-	-	-	山中に4地藏あり
44		村上家本	個人(富山市)	1		-	-	-	-	
45		福江家本	個人(小矢部市)	2		-	-	-	-	
46		大仙坊C本	大仙坊(立山町)	2	・大仙坊の檀那場が尾張国 ・それぞれの軸裏に「血ノ池地獄圖」、「賽乃河原地蔵尊」、それぞれの木箱蓋裏に「血乃池図登双幅」、「賽乃川原図登双幅」とあり。	○地藏・子ども(服)・石・鬼	-	-	-	
47		日光坊A本	個人(富山市)、立山博物館寄託	1	芦峯寺日光坊は尾張国を檀那場とする	-	○	○	-	
48		大仙坊D本 (布橋灌頂会来迎師院主之図)	大仙坊(立山町)	1	芦峯寺日光坊は尾張国を檀那場とする	-	-	-	-	
Ⅴ 明治期以降に制作された立山曼荼羅										
49		玉泉坊本	個人(立山町)、立山博物館寄託	1	芦峯寺玉泉坊	-	-	-	-	地獄谷が火炎谷
50		日光坊B本	個人(立山町)、立山博物館寄託	3	芦峯寺日光坊は尾張国を檀那場とする	-	-	-	-	
51		坂木家本	個人(立山町)、立山博物館寄託	4	福泉坊旧蔵であり、檀那場が尾張国	-	-	-	-	
52		四方神社本	四方神社(富山市)	2	屏風・二曲一双雙	-	-	-	-	

## 1-2 立山曼荼羅の地藏菩薩が描かれた場面

1-1で見たように、「立山曼荼羅」諸本の多くに、地藏菩薩は描かれている。ここでは「相真坊A本」をもとに、地藏菩薩が描かれる主な(1)~(3)の場面と地藏信仰と関係の深い(4)の場面を紹介したい。

### (1) 賽の河原の地藏菩薩

「立山曼荼羅」では、「賽の河原」は別山の下方、ちょうど玉殿窟と地獄を結ぶような位置に描かれることが多い。これは、立山山中の雷鳥沢と浄土沢の出会いに実在する賽の河原が意識されているからであろう。一般に賽の河原は、三途の川の河原もしくは死出の山路の裾野の河原にあり、幼くして亡くなり親を悲しませたり、孝行ができなかったりといった罪をおかした者が、この冥界に堕ちる場所である。亡者となった子どもたちはそこで娑婆の父母兄弟供養のためと石積みをして遊ぶが、日が暮れると地獄の鬼がやってきて、子どもたちがせっかく造った塔を崩してしまふ。地藏菩薩はそこに現れ、自分をこの世の親と思えと、子どもたちを鬼から守ってくれるのである。渡浩一氏は、「賽の河原」の図像は「河原・子どもの亡者・鬼・地藏・石積み(石塔)の5つを基本構成要素」としている。

「相真坊A本」【写真1】では、鬼は描かれておらず、地藏菩薩の足元には蓮弁と紫雲が描かれており、亡者となった子どもたちのもとに飛来する姿となっている。「賽の河原」の場面は、立山曼荼羅52本のうち34本に描かれており、大切なモチーフだったことが分かる。



【写真1】 賽の河原の地藏菩薩  
(「立山曼荼羅 相真坊A本」部分)

### (2) 阿弥陀如来に従う二十五菩薩の一尊として来迎する地藏菩薩

「立山曼荼羅」では、立山山中の地獄谷のあたりで、地獄に落ちた亡者に対する責め苦の様子が強調して描かれるが、それに相対するかのよう、その地獄谷からの対角線上に位置する立山連峰の雄山とその右手の浄土山【写真2】、あるいは雄山とその左手の大汝山の山間に、阿弥陀如来と二十五菩薩の来迎が描かれることが多い。そこには、阿弥陀如来が住む西方極楽浄土の様子自体は見られないものの、いわゆる阿弥陀聖衆来迎の図柄をもって立山浄土の場面としている。

来迎とは、念仏行者の臨終の際、阿弥陀如来が脇侍の観音菩薩や勢至菩薩とともに(これを阿弥陀三尊という)、または、その他の二十五菩薩とともに飛雲に乗り、楽器を演奏しながら死者を迎えにやってきて、極楽浄土へ連れて行くことである。「立山曼荼羅」諸本の来迎場面を見ていくと、阿弥陀如来や諸菩薩の来迎の描かれ方は3種類に大別され、①阿弥陀三尊のみ、②阿弥陀如来と二十五菩薩のみ、③一画面に①と②を個別に描くもの、などが見られる。②、③の来迎場面には、阿弥陀三尊の後ろの方に地藏菩薩が含まれている【写真3】ことがあり、「立山曼荼羅」52本のうち、15本(錫杖か如意宝珠を持たないが地藏菩薩と思われる2本を含む)に描かれている。

画中での来迎場面の配置状況については、「吉祥坊本」などでは阿弥陀如来と二十五菩薩が浄土山の背後から山間を縫って飛来する形で描かれている。これは他の「立山曼荼羅」にも多く見られる一般的な描き



【写真2】 雄山と浄土山



【写真3】 二十五菩薩中の地藏菩薩  
(「立山曼荼羅 相真坊A本」部分)

方である。一方、「大仙坊 A 本」などでは、雄山や大汝山の背後から阿弥陀三尊が、あるいは阿弥陀如来と二十五菩薩が、山間を縫って飛来する形で描かれている。

いずれの「立山曼荼羅」を見ても、阿弥陀如来と聖衆の来迎場面は、概ね雄山と浄土山の山間に描かれている。なぜかという、立山の自然現象と関係があり、立山の雄山山頂では、朝日が昇るとき、東が晴れていて、西に霧がかかっていると、霧中に自分の影とそれを取り巻く美しい輪が見えることがある。いわゆるブロッケン現象【写真4】であり、夏場は雄山と浄土山の山間あたりにこの不思議な自然現象がときどき見られる。おそらく、これがいつの頃からか極楽浄土からの阿弥陀如来の来迎に見立てられ、信仰されるようになったと考えられる。



【写真4】ブロッケン現象

### (3) 閻魔堂前の地藏菩薩坐像

「立山曼荼羅」諸本の中には、芦峯寺の閻魔堂前にかつて安置されていた地藏菩薩坐像を描いたもの【写真5】があり、女性救济儀式である布橋灌頂会に参列する人々を見守るように鎮座している。

現在、芦峯寺閻魔堂【写真6】にはこのような坐像は安置されていないが、観音寺（小矢部市）の銅造地藏菩薩半跏坐像（以下、地藏菩薩坐像）は、江戸時代まで芦峯寺閻魔堂に安置されていたとされる。この地藏菩薩坐像は、明治初年の神仏判然令にもとづく廃仏毀釈の影響で、まず小矢部市俱利伽羅の長楽寺へ移遷され、さらに明治5年（1872）に現在の観音寺に移遷された【写真7】。その際にこの像容を絵画にとどめ、招来するのに尽力した人々の名前がその周囲にびっしりと書き込まれた御影【写真8】が伝わっている。



【写真5】閻魔堂前の地藏菩薩坐像  
（「立山曼荼羅 相真坊 A 本」部分）

台座から光背までの総高が約2メートルの金銅仏像であり、像容は左手に宝珠、右手に錫杖を持ち、左足は踏み下げにしている。この像は、背面やその蓮華座蓮弁【写真9】などに多くの刻銘があり、その一部に、

信州松本町 立山講中  
願主 教蔵坊照界 立之  
請負 松本飯田町 葉鐘屋佐原市右衛門尉正孝  
皆時 文政八年乙酉七月吉祥日

御鑄物師大工職 信濃國上田住 小嶋大治郎 藤原弘孝  
謹制

とあり、これによると、芦峯寺教蔵坊の衆徒照界が願主となり、文政8年（1825）7月に信州松本町の立山講から寄進されたものであることがわかる。寄進者の所在地は、現在の糸魚川市から、長野県大町市や松本市、安曇野市などにまたがる約142村で、俗名1221人、戒名で1458人の合わせて2679人もの寄進者の名前が刻み込まれている。その分布は千国街道に沿っており、概ね教蔵坊の檀家の分布状況と合致している。銘文中の「立山講」は、立山信仰の結社ではなく、木綿



【写真6】芦峯寺閻魔堂



【写真7】銅造地藏菩薩半跏坐像



【写真8】立山請来地藏尊御影

業者の経済団体である。松本は当時、足袋の産地で、越中の新川木綿をたくさん買い入れ、それを足袋に加工して、江戸などへ出荷していた。薬罐屋佐原市右衛門尉正孝など松本の大商人たちが世話人となり、寄進を集めたと思われる。寄進の目的は、先祖・家族の供養、特に女性の戒名が多いことから女性が堕ちるとされた血の池地獄からの救済、さらには延命長寿なども考えられる。

この地藏菩薩坐像は、「立山曼荼羅」52本のうち、10本に描かれている。建立予定のものを「立山曼荼羅」に描き込む可能性もないではないが、基本的には文政8年（1825）以降に制作されたものと推測できる。

この地藏菩薩坐像を描いた「坪井家B本」【写真10】は、布橋灌頂会の様子など、他の立山信仰の内容が比較的正確に描かれているのに対し、地藏菩薩坐像は巨大で、閻魔堂の大きさをはるかに越えている。尾張国を檀那場とする日光坊の旧所蔵とされ、檀那場の人々に布橋灌頂会への参加を促すために、地藏菩薩の功德の大きさを視覚的にも強調したと考えられる。

#### （4）施餓鬼法要の場面

施餓鬼法要【写真11】は、餓鬼道で苦しむ衆生に食事を施して供養することで、またそのような法会を指す。日本では先祖への追善として、盂蘭盆会に行われることが多い。お盆には祖霊以外にもいわゆる無縁仏や供養されない精霊も訪れるため、戸外に精霊棚（施餓鬼棚）を儲けてそれらに施す習俗があり、これも御霊信仰に通じるものがある。地獄道、人道のみならず、餓鬼道も含む六道能化の地藏菩薩の功德を表すとされ、施餓鬼法要と地藏菩薩との関係は深いようである。

【写真12】は立山信仰とのつながりを示す鷹の違ひ羽の紋が見える眼目山立山寺（中新川郡上市町）所蔵の施餓鬼棚（現在は施食棚という呼称）だが、やはり地藏菩薩が棚上に祀られている。

「立山曼荼羅」では、「施餓鬼法要」と「賽の河原」の場面が隣接して描かれることが多い。

なお、「立山曼荼羅」では、釈迦十大弟子の目蓮が立山地獄の阿鼻地獄や血の池地獄に堕ちた母を救うという「目蓮救母説話」に関する一連の場面、具体的には、「目蓮の母が串刺しにされ炎で焼かれる」、「施餓鬼法要」、「血の池地獄」、そして「火の車」が描かれている。これらも隣接して描かれることが多い。

【写真13】は、芦峯寺善道坊に伝来したもので、毎年7月15日に芦峯寺で行われる大水陸会（大水施餓鬼法要会）への勸化を目的とするものとされる。ここでも、左側に「施餓鬼法要」、右側に「血の池地獄」や「賽の河原」など、いくつかの立山地獄の場面を配している。また、「施餓鬼法要」が「血の池地獄」付近に描かれている場合、如意輪観世音菩薩が描かれている場合がある。

「相真坊A本」は上記(1)~(4)がすべて描かれている。特色としては(2)の



【写真9】銅造地藏菩薩半跏坐像の蓮華座蓮弁



【写真10】巨大な地藏菩薩坐像（立山曼荼羅 坪井家B本）部分



【写真11】施餓鬼法要（立山曼荼羅 相真坊A本）部分



【写真12】立山寺の施食棚

「二十五菩薩中」【写真14】において、阿弥陀如来、他の菩薩たちが茶色で着色されているのに対して、地藏菩薩が控えめな佇まいの中にも、その法衣のみが赤色で着色され人目を引くようにされているのは、着目すべき点かと思われる。

以上、「立山曼荼羅」で地藏菩薩が描かれている場面を紹介してきた。福江充氏によると、「立山曼荼羅」は、立山連峰上空の天道や立山地獄谷の地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道・立山山麓の人道など、いわゆる六道の表現（六道絵）と、阿弥陀如来の表現といった2つのモチーフが描かれていることから、立山曼荼羅は「六道絵+阿弥陀聖衆来迎図」としても位置付けられる」と述べる。

地藏菩薩は本来、六道能化の菩薩であるから、苦しみの大きい三悪道を中心に、錫杖をついて六道を自由自在に巡り、迷い苦しむ人々のそばに駆けつけ救うと信じられ、「立山曼荼羅」においても、六道の一部である地獄道と人道の境界上にある「賽の河原」で幼くして亡くなった子どもたちを、人道の山麓・芦峯寺の閻魔堂前で地獄からの救済を求める人々を見守っている。また、阿弥陀如来聖衆来迎図のように、極楽浄土の方から聖衆の一尊として、最も苦しみの大きい地獄道に堕ちた亡者のもとに飛来する。「立山曼荼羅」には、阿弥陀如来や如意輪観世音、不動明王も多く描かれるが、他の諸尊よりも地藏菩薩は救済の舞台が広く、苦しみの只中にいる人々のそばに絶えず寄り添い、ときに身を捨ててまで、縁ある衆生を救うと言えるのではないか。



【写真13】「立山地獄」刷り物



【写真14】二十五菩薩中の地藏菩薩（前掲【写真3】部分拡大）

### 1-3 『新 綜覧 立山曼荼羅』の分類にみる立山曼荼羅と地藏菩薩

#### 1-3-1 地藏菩薩が描かれる場面本数

下の【表2】は、1-1の【表1】をもとに、分類ごとに地藏菩薩が描かれる「立山曼荼羅」の本数を整理したものである。

表2 『新 綜覧 立山曼荼羅』の分類にみる地藏菩薩が描かれる場面とその本数

分類項目	地藏菩薩が描かれた場面			
	賽の河原	二十五菩薩中	閻魔堂前	施餓鬼法要
I 芦峯寺集落の宿坊家に関する立山曼荼羅<22本>	22本/22本	14本※1 /22本	9本/22本	21本/22本
II 岩峯寺集落の宿坊家に関する立山曼荼羅<14本>	6本※2 /14本	0本/14本	0本/14本	4本/14本
III 立山ゆかりの寺院に伝来する立山曼荼羅<5本>	3本/5本	0本/5本	0本/5本	2本/5本
IV 特徴のある立山曼荼羅<7本>	3本/7本	1本/7本	1本/7本	1本/7本
V 明治期以降に制作された立山曼荼羅<4本>	0本/4本	0本/4本	0本/4本	0本/4本

※1 うち2本は、錫杖か宝珠のどちらかが判然としない地藏菩薩が描かれている。

※2 他に2本、地藏菩薩は描かれていないが、子と石のみが描かれるものがある。

### 1-3-2 芦峯寺と岩峯寺の「立山曼荼羅」にみる地藏菩薩

加賀藩は、芦峯寺・岩峯寺の衆徒に対し、立山に関するいくつかの宗教的権利を分与し、経済面で互いに競わせ、両者が協力して一大勢力とならないようにして力を削いだ。山の管理権を立山から遠い岩峯寺に、加賀領国内外での廻壇配札活動を行う権利を立山に近い芦峯寺に与えた。立山曼荼羅の展開には、加賀藩の立山衆徒に対する支配のあり方が、大きな影響を与えたと考えられる。以下に、両峯寺の立山曼荼羅の特徴を地藏菩薩の図像から紹介する。

#### (1) [芦峯寺関係の立山曼荼羅] (22本/52本中) にみる地藏菩薩

芦峯寺衆徒は立山に直接関わる権利を失い、加賀藩領国内外での廻壇配札活動を経済的な基盤とせざるをえなかった。領国外の檀那場の人々は、当然領国内の人々より、立山や立山信仰に対する知識が乏しく、そうした人々にも効果的に立山信仰を布教するために、芦峯寺では人目を引く説話画風の立山曼荼羅が作成されたものと思われる。とりわけ、女人禁制で登拝を許されぬ女性には、血の池、不産女・賽の河原などの地獄の場面を「立山曼荼羅」の図像を示しながら説き、芦峯寺における施餓鬼法要への代参と、布橋灌頂会への参加を勧めたものと思われる。

この[芦峯寺集落の宿坊家に関する立山曼荼羅] (以下、[芦峯寺関係の立山曼荼羅]) の最大の特徴は、芦峯寺で行われていた女人救済儀式である布橋灌頂会の様子が大きく描かれている点である。布橋灌頂会のように芦峯寺で行われたとされる施餓鬼法要もほぼすべて(21本)に描かれている。布橋灌頂会に関連して描かれる「閻魔堂前」(9本/22本)の地藏菩薩坐像と、「二十五菩薩中」(14本/22本)の地藏菩薩も、他の分類では[特徴ある立山曼荼羅]に属する「日光坊A本」1本に描かれるのみである。加えて、[芦峯寺関係の立山曼荼羅]は立山山中の地獄の場面や山中にて語られる説話や伝説などを大きく丁寧に描くという特徴があり、「賽の河原」はすべて(22本/22本)に描かれている。江戸後期において地藏信仰といえど賽の河原信仰というぐらい、賽の河原の幼くして亡くなった子どもたち、そしてその子どもたちを救うとされる地藏菩薩に寄せる庶民の思いがいかに大きかったかを示すのではなからうか。

また、一般的な地藏菩薩の描かれ方と異なり、異彩を放つものとして「最勝寺本」がある。地藏菩薩が布橋のたもとと地獄谷の坂の上に描かれるなど、通常とは異なる位置に描かれている。立山地獄の位置関係も実際とは大きく異なり、布橋灌頂会は他の地獄絵の画像が転用されている。他にも、劔岳の針山地獄が描かれ、浄土山には風神・雷神が描かれている。「最勝寺本」は、安政2年(1855)、知多郡寺本村の常光院の僧至円が描いたもので、完成後に現所蔵の最勝寺に奉納したとされ、僧至円がどのような地獄絵を参考とし、制作したのか興味深い。

このように、[芦峯寺関係の立山曼荼羅]には、岩峯寺集落を簡素に描く、または描かないことにより、一本に上記①～④の複数場面が描かれることが多い。

#### (2) [岩峯寺関係の立山曼荼羅] (14本/52本) にみる地藏菩薩

岩峯寺の衆徒は、夏の期間中、室堂に泊まり込んで、主峰雄山山頂の峰本社に奉仕し、登拝の男たちの世話をした。冬が訪れると下山し、主に越中国、隣国の加賀・越後・能登の国々に出開帳をして廻り、「立山曼荼羅」の絵解きをしたといわれる。この場合、主に加賀藩領国内であり、どちらかといえば地元の人々が立山を訪れることに対応して、山絵図風の「立山曼荼羅」が作成されたものと考えられる。

この[岩峯寺集落の宿坊家に関する立山曼荼羅] (以下、[岩峯寺関係の立山曼荼羅]) の特徴は次の(i)、



(ii)の通りである。(i)岩嶽寺の境内を丁寧に描くのに対して、芦嶽寺で行われていた布橋灌頂会は描かない。(ii)立山地獄や立山山中の説話・伝説なども大きく描くものは少なく、岩嶽寺衆徒が版權を持った「立山登山案内図」の構図を模写したようなものが多い。上記のように、山絵図としての色彩が強い「岩嶽寺関係の立山曼荼羅」には、「芦嶽寺関係立山曼荼羅」によく見られる、「二十五菩薩中」や「閻魔堂前」の地藏菩薩が描かれたものはない。基本的には山岳景観を描いた山絵図風の「岩嶽寺関係の立山曼荼羅」においても、「賽の河原」は14本中8本に描かれており、岩嶽寺衆徒の絵解きでも、聴く者の心をつかむ、外せない話材だったようである。後述する岩嶽寺延命院に伝わる「立山手引草」にも「賽の河原」の地藏菩薩が登場する。

ちなみに、描かれている8本のうち、「志鷹家本」では子どもたちと石のみ、「立山博物館B本」【写真16】にはみくりが池の岸辺に裸の子どもたちのみが描かれ、地藏菩薩は描かれていない。両本とも山絵図風の中に、山中に語り継がれる説話や伝説を織り交ぜたものである。このような作風に近いものとして「立山博物館A本」があり、これには地獄谷辺りに「身替り地藏」として炎に包まれる地藏菩薩が描かれている。これは『今昔物語集』などに見られる、女性の亡者の身代わりとなって地獄の業火に焼かれた地藏菩薩を想起させる。また、「施餓鬼法要」も、山絵図風で法会が描かれることの少ない「岩嶽寺関係の立山曼荼羅」でも、14本中の4本に描かれており、立山山中の管理権を与えられ、山中での施餓鬼法要への代参を勧めた岩嶽寺衆徒において、大切な法会だったことがうかがわれる。

総じて、「岩嶽寺関係の曼荼羅」は、絵解きで語られるような、説話、信仰上の観念としての地藏菩薩は描かれることは少ないものの、地獄谷や伽羅陀山の地藏堂や地藏の石像といった具体物や、「さいのかわら」、「じごく谷」、「ぢぞう堂」、「からだセン」（「立山博物館G本」）といった地名が明記されていることがあり、地藏霊場としての立山の原風景をとどめ、立山山中の名所や要所を紹介していたといえる。

### 1-3-3 「立山ゆかりの寺院に伝来する立山曼荼羅」（5本/52本）にみる地藏菩薩

立山ゆかりの寺院のうち、芦嶽寺と岩嶽寺以外に立山開山者である佐伯有頼や父親の佐伯有若を開基とする寺院に伝来する「立山曼荼羅」がある。布橋灌頂会が描かれている「来迎寺本」、「大徳寺本」には、布橋灌頂会と関連性のある「施餓鬼法要」と、「賽の河原」が描かれている。

称名庵は、称名滝の巖上から招来した如意輪観世音菩薩を奉じて開基したとされる（現在は廃寺）。その「称名庵本」には、地藏菩薩は描かれていないが、如意輪観世音菩薩が2か所に描かれている。

また、「称念寺A本」【写真17】は、布橋灌頂会の場面がなく、岩嶽寺集落が大きく描かれた山絵図風であるが、立山開山縁起や立山地獄、阿弥陀三尊像の来迎などが描かれている他、みくりが池と思われる池が燃えており、その近くには光背から光を放つ地藏菩薩が描かれている。以前は場面の名称を書いた短冊が貼られていたらしく、絵解きに使用されていたことが推察される。



【写真16】みくりが池岸辺の子どもたち  
（「立山曼荼羅 立山博物館B本」部分）



【写真17】池が燃えている様子  
（「立山曼荼羅 称念寺A本」部分）

### 1-3-4 [特徴のある立山曼荼羅] (5本/52本) にみる地藏菩薩

「大仙坊C本」【写真18】は、芦峯寺大仙坊に伝来する作品であり、「血の池地獄」と「賽の河原」だけを1幅ずつに描いている。それぞれの軸裏に「血ノ池地獄図」、「賽ノ河原地蔵尊」と墨書され、さらにそれぞれの木箱蓋裏にも「血乃池図登双幅」、「賽乃川原図登双幅」とある。

また、「日光坊A本」【写真19】は、布橋灌頂会の場面だけを描いたものである。加賀藩からの制札とともに、先述した地藏菩薩坐像が丁寧に描かれている。画面上段の「二十五菩薩中」にも、地藏菩薩が描かれており、この二尊の地藏菩薩が布橋灌頂会に参列する人々を見守っている。

上記の2本は、「立山曼荼羅」に描かれる図像の中から「賽の河原」、「布橋灌頂会」を強調して描いたと考えられる。大仙坊、日光坊ともに、尾張国を檀那場としており、江戸後期には尾張国が含まれる東海地方での檀那場形成、及び廻壇配札活動は非常に盛んであったという。檀那場を形成し、廻壇配札活動をすすめる際に、当然、その地域の人々の心をつかむモチーフが求められ、「大仙坊C本」のように、「賽の河原」の場面に特化したものが制作されたと考えられる。また、尾張国、そのお隣の三河国はそれぞれ知多木綿・三河木綿で知られる日本的な名産地であり、「日光坊A本」のように、「布橋灌頂会」に特化した立山曼荼羅を制作し、布橋灌頂会で使用する木綿の調達を有利にすすめようとしたのであろう。



【写真18】「立山曼荼羅 大仙坊C本」部分



【写真19】「立山曼荼羅 日光坊A本」部分

### 1-3-5 [明治期以降に制作された立山曼荼羅] (4本/52本) にみる地藏菩薩

明治期の神仏判然令による影響で、江戸時代に立山信仰の拠点であった立山衆徒らは神職に転じ、立山山中の仏像や宿坊の仏教的な文物を数多く手放した(芦峯寺閻魔堂前の地藏菩薩坐像が、観音寺に移遷されたことは先述した) という。そのため、「立山曼荼羅」の中にも仏教色を排除して神道色を強調していることから、4本とも地藏菩薩は描かれてはいない。

同様に、明治期以降の名称が記されており、「玉泉坊本」には伽羅陀山が「炎高山」とされ、その山の祭神の名が「火結神」と記されている。「炎高山」は「えんこうさん」と読み、上述した『今昔物語集』巻十七の女性の亡者が遺族に追善供養を頼んだ僧の名前が延好であり、興味深い。

## 2 「立山曼荼羅」に描かれた立山山中の実景と説話—立山曼荼羅の原風景—

「立山曼荼羅」の立山地獄とされた領域の実景と、その実景から生まれた説話や絵画などとともに、「立山曼荼羅」を紹介したい。

### 2-1 賽の河原の地藏菩薩

#### 2-1-1 賽の河原の実景と地藏石仏

立山山中の雷鳥沢と浄土沢の出合い、血の池の東北方500mほどの浄土川(祓堂川ともいう)の河原を、「賽の河原」と呼ぶ【写真20】。

この河原には保存堂【写真21】があり、六地藏が祀られている【写真22】。江戸期の『古代度々争論記』、「岩峯寺文書」所収の貞享3年



【写真20】賽の河原

(1686)の『立山寄附券記』、『和漢三才図会』にも、賽の河原の地藏堂が記されている。全国に数ある山中地獄には石仏や石塔などの石造物が並ぶところが多く、わけても賽の河原といわれるところには、尖帽子状の積石が点在する。

立山の賽の河原の場合は、昭和35～37年の富山県教育委員会による「立山歴史文化遺跡調査」時には、「浄土川のふちに六体の石地藏があり、その近くに十指で数えられるほどの積み石が見られる程度であった」と記され、その後、この六体の石地藏にコンクリート小堂が設えられた。しかし、浄土川の出水で倒壊し、今日の小堂は2代目であるという。昭和40年発行の佐伯立光著『立山史談』には、「数知れない程、小石を以て塔を積み地藏菩薩の石仏も点々として建立され……明治維新までは数百体も存知されていた」という。かつて浄土川に沿った室堂からの道があったらしく、また大走り・小走りといって、別山・真砂岳からの道もここに至っていたが、登山コースの変化によって次第に忘れられたようである。さらに浄土川の氾濫や周辺の山地からの雪崩で変容が著しく、昔日の面影はない。

『立山山上石造物・関連遺跡調査報告書(二)「地獄谷・賽の河原」』の「立山地獄谷・血の池地獄・賽の河原周辺石造物一覧」によると、賽の河原には6体の地藏石仏が所在するとある。



【写真21】 賽の河原の保存堂



【写真22】 賽の河原の地藏石仏

## 2-1-2 民俗学的視点からみる賽の河原

全国の死者の霊が籠ると信じられてきた霊山・霊場や、村境・峠・河原・湖畔・海岸などの境界的場所には、賽の河原と呼ばれる場所が少なくない。立山の地獄谷の他にも、有名などころでは、下北の恐山、津軽の川倉、下野の岩船山などが知られるが、地元の人たちだけに知られているような賽の河原は全国至る所に存在すると思われる。この賽の河原は一般的には地獄の一所と考えられがちだが、三途の川を渡る手前であることから地獄の外側であり、いわば「この世」と「あの世」の境界的な場所であるとされる。こういった境界的領域の石ころだらけの場所が賽の河原に擬せられ、地藏の石像が祀られていることが多い。

賽の河原および地藏菩薩は、境界にあってソトからくる悪霊などから、村などのウチを守る神である賽の神信仰との関連が指摘されている。たとえば、芦峯寺の布橋を渡る衆徒墓地が広がるように、墓地は「あの世」への入り口と考えられていた。実際、河原はしばしば墓地とされ、文献考証学的に賽の河原の語源とされてきた、賀茂川と桂川の合流する佐比の里は、古来、京の都の主要な葬地の一つであった。

また、地藏菩薩は子どもとの関係が深く、『今昔物語集』巻十七にみられる地藏説話では、地藏菩薩は「端嚴ナル小僧」の姿で地獄にも現世にも現れる。地藏菩薩が子どもの姿で現れるのは、女性や老人と並んで子どもを霊託の媒介者とするシャーマニズム的観念が日本古来から根強く、現世と他界を媒介する両義的存在としての機能を持つ子どもと、縁ある衆生を救うために現世と地獄を往来する地藏菩薩とが習合した姿と考えられる。

「立山曼荼羅」では、「賽の河原」が玉殿窟と地獄道との間に描かれている。これは「賽の河原」がこの世とあの世の「境」、地獄道や餓鬼道、畜生道といった悪道への入り口として、位置付けられていることを示している。民俗学的な意味における賽の河原と、立山山中の实景で地獄と浄土の境界に位置する賽の河原、さらには、「立山曼荼羅」の「賽の河原」に描かれる地藏菩薩と子どもたち、すべてが絶妙に融合し、賽の河原はあるべきところに描かれていると言えよう。

### 2-1-3 立山曼荼羅の河原に描かれる地藏菩薩

岩嶺寺延命院に伝わる「立山曼荼羅」の絵解きの種本（もしくは台本）とされる『立山手引草』では、

釈迦如来は、沙羅双樹の煙りとともに隠れさせ給ふ。弥勒菩薩は、未だこの世に出で給はず。然れば、今の我々は、釈迦の御説法に後れて生まれ、さらに、弥勒御出世よりも先に生まれたれば、誠に父に討たれ、母に放たれた孤児の如くなり。

とあり、釈迦入滅後、弥勒菩薩が現れるまでの無仏世界の人道に生きる我々も、悟りへと導く釈迦如来も弥勒菩薩もないのだから、父母のいない孤児と一緒にしていると述べている。

その上で、無仏世界の救い主である地藏菩薩の功德を述べていき、「賽の河原」では、

幼くして、二つや三つや四つ五つ、十にも足らぬ子供らが、墮ち行くところなり。石を一つ積んでは父のため、母のためにと供養をなすが、夕べになれば鬼来たりて、その塔を悉く打ち崩すなり。それ、罪の中にて最も重き「親不孝の罪」なりと。従つて、父母に代はりて、地藏子供たちを守るなり。

と語りかけてゆくが、「立山曼荼羅」では、このように、鬼が子どもたちに執拗な暴力をしたり、石積みを破壊したりする行為を生々しく描いたものは少ない。「立山曼荼羅」諸本での「賽の河原」は、管見の限りでは、地藏、子、石、卒塔婆、鬼の5要素で構成されるように見え、そのうち鬼が登場するものは、34本中、15本にすぎない。しかも、鬼が描かれる場合でも、子どもたちを呵責する恐ろしい鬼はあまり描かれず、描かれてもあまり恐ろしくないか、少し離れたところで子どもたちを見守るような鬼が描かれるものが多い。「賽の河原」の不可欠の要素は、地藏・子ども・石積みであり、鬼は二次的な存在と言えそうである。

しかし、「立山曼荼羅」諸本の中で1本だけ、[芦嶺寺関係の立山曼荼羅]に分類される「筒井家本」【写真23】では、鬼が金棒で子どもの頭をたたき、子どもの頭からは血が流れ、鬼の金棒から血が滴り落ちるといふ、恐ろしい「賽の河原」が描かれている。

渡氏によると、『西院河原地蔵和讃』をもとに創作された絵画に、鬼の呵責が明確に描かれたものがわずかながら存在する」という。

また、同氏は「この『西院河原地蔵和讃』の原型は近世初期に成立し、唱導・歌謡・芸能などの世界で唄われ広まっていったものと思われる。江戸も後期になると、賽の河原の思想はほとんど地藏信仰の中心となっているかのような盛観を呈し、地藏信仰といえは幼児の守護を祈願するもの、あるいは胎児の安産を祈るもののように考えられ、安産地藏・子安地藏・腹帯地藏等、子どもと縁の深い地藏信仰となっていく。このように、中世から近世にかけて、とりわけ賽の河原思想が庶民に広まっていった背景には、中世の末頃、イエ制度の民衆レベルでの成立を背景とした、子どもをイエの大切な後継者とみる子宝観念が一般的になり、親より先立ってしまつてイエを継げないという未報恩の罪をおかした罪人としての子どもの亡者が墮ちるところとして賽の河原信仰がうまれた」と述べている。

この「西院河原地蔵和讃」と同様のもので、立山の賽の河原の情景を歌った『立山西院川原地蔵和讃』が伝わっている。

歸命頂礼立山の西院の川原の物語り。きくにつけても哀れなり。二つや三つや四つ五つ、十にも足らぬ嬰兒が、さいの川原に集まりて、父恋し母恋し、恋し恋しと泣く声は此の世の声と事変わり、悲しき骨身に通すなり

これは先述した『立山手引草』とも重なり、おそらく、立山衆徒が各地の檀那場で、この和讃を唱導したものである。

たとえば、福江氏は、「芦嶺寺の宝泉坊衆徒である泰音が、江戸の檀那場での勧進布教活動について記録した『廻檀日記帳』には、「立山曼荼羅」の絵解きの話材として、「地藏尊（之御）咄し」という記述がある」と述べる。「宝泉坊本」には、地藏菩薩に関する先述した4場面のすべてが描かれており、絵解きをしながら



【写真23】「立山曼荼羅 筒井家本」部分

らときに『立山西院川原地蔵和讃』も唱えられたと考えられる。賽の河原信仰および地蔵信仰を人びとに広めるのに有効だったのは、おそらく芦峯寺衆徒が行ったような民衆唱導であろう。

また、前述の渡氏は、「鬼の呵責がなく、地蔵の加護と石積みのみが表現されれば、当然のこととして、賽の河原は地獄のイメージから遠くなる。そしてさらに、楽しげに遊ぶ子どもの図像が付加されれば、それは楽園的イメージの世界にすら近くなる」と述べ、京都市・東福寺退耕庵蔵の「洛陽四十八箇所地蔵巡礼図」の一部で幕末に描かれた「第二十九江岸院際河原地蔵」の図像などは、まさにその楽園的イメージの賽の河原の図像と指摘する。

「立山曼荼羅」に目を転じると、幕末の慶応2年（1866）に、先ほどの宝泉坊の泰音が所蔵していた「宝泉坊本」をもとに、三河国岡崎藩主本多忠民が制作し、吉祥坊に寄進したとされるのが、「吉祥坊本」【写真24】である。この「吉祥坊本」は、表の上部に和宮の寄附を示す「静寛院宮御寄附」の識札があり、幕府の老中として家茂や和宮と関係があった本多忠民が、未亡人となった和宮に対し、家茂に対する追善供養として作品への寄進話をもちかけたのではないと思われる伝本だが、「宝泉坊本」同様、地蔵菩薩に関する4場面のすべてが描かれている。「賽の河原」では、金棒を持って子どもたち3人を追いかける鬼と、泣きながら座り込む子どものそばで金棒をおさめる鬼が描かれている。鬼の姿や表情からは、先ほどの「筒井家本」のような生々しい鬼の呵責、子どもたちの悲痛は感じられず、どこか楽園のような、ほのぼのとしたものを感じさせる。昔は少なくなかった、わが子に先立たれた親の、亡き子の冥福を祈る気持ちの反映であり、檀那場の人々、とくに女性の心に寄り添うような絵画表現のように思える。



【写真24】「立山曼荼羅 吉祥坊本」部分

## 2-2 地獄谷・伽羅陀山の地蔵菩薩

### 2-2-1 地獄谷及び伽羅陀山の实景と地蔵石仏

立山地獄とは、中心をなす地獄谷と、先述した賽の河原、血の池地獄といわれた血の池、八寒地獄に比定されたみくりが池を界域とした。

地獄谷は現在、火山活動による亜硫酸ガス噴出を受け立ち入り禁止となっているが、昭和45年（1970）発行の富山県教育委員会編『立山文化遺跡調査報告書』には、「大正の初頃までは、この地獄谷の噴煙箇所には、必ず十数体のこれら大小の石仏石塔が集まり、広いこの地獄谷地域には一千本近くにも及ぶ石仏石塔が残存していたという」と見える。【写真25】

この地獄谷で最も高い山が標高2,398mの伽羅陀山【写真26】である。山名の伽羅陀山は、地蔵菩薩の浄土の意味であり、立山地獄に堕ちた亡者救済の中心とされていた。一名に炎高山、また延好山とも呼ばれるが、後述する『今昔物語集』の立山地獄の説話に登場する人物に由来するものだろう。

山頂には保存堂【写真27】があり、地蔵の石像などが安置されている。現在の保存堂はコンクリートブロックで三方の壁とし、前面に鉄筋格子を入れ、土間と屋根をコンクリート造として建てられ、周りに石を積み上げ、龕としている。保存堂は幾度



【写真25】地獄谷石造物群



【写真26】東から伽羅陀山を見る

かの倒壊や部材の散逸によって組み直され、現在の保存堂も先代のものとはほぼ同位置、同方向に建てられていたようである。北東側の奥大日岳を背に、地獄谷方向に開口し、先代の保存堂を調査した、昭和36年（1961）の立山町史蹟調査会編『立山文化遺跡調査』第一編では「堂の建方からみて奥大日岳の遥拝所とされた感がある」としている。この地の地蔵堂は、『立山寄附券記』には、貞享3年に「加羅多山堂」とその建立願主名が見え、地蔵堂下から出土したという遺物や地蔵の石像の保存状態の良さからも、貞享以前から小堂が建てられていたと考えられる。

そのかつての木造小堂の中央に安置されていたのが、【写真28】の石造地蔵菩薩立像である。南北朝時代の作と推定されている。緑泥片岩を用材とする総高46cm、最大幅19.2cm、最大奥行9.6cmの浮彫像である。鈍い尖頂をもつ舟形光背をバックに、幅広い（光背幅）二重蓮花座上に立つ厚肉の地蔵菩薩立像である。光背の上部を薄肉彫の頭光とする。像容は、法衣の上に袈裟を着し、左手を胸前において宝珠を、右手は腹前において錫杖を、それぞれ持す。像容をつとめて肉厚く、その分光背を薄くし、かつ背面から削り取って軽量化している。立山山上への運搬を意識した制作なのであろう。

前掲した『立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）「地獄谷・賽の河原」』によると、地獄谷では3体の地蔵の石像と笠塔婆塔身として6体、伽羅陀山では8体の地蔵の石像が所在する。笠塔婆塔身とは、角柱あるいは板状の仏塔である塔婆に、笠の屋根をのせたものであり、塔身には仏像のほか、種子や名号などが記され、側面に造立の願主、年号、縁起などが記録される。



【写真27】伽羅陀山保存堂



【写真28】伽羅陀山地蔵菩薩

## 2-2-2 「立山曼荼羅」の地獄谷・伽羅陀山に描かれた地蔵菩薩

山岳景観を描いた山絵図風の「岩峯寺関係の立山曼荼羅」にも、地獄谷と思われるところに地蔵菩薩が描かれているものがある。

立山博物館A本【写真29】は、岩峯寺中道坊との関りを有するものである。山絵図そのもののといった様相を帯びており、画中の登場人物や諸仏・諸堂舎・名所・峰々などに、金地に墨書で名称が付されている。地獄谷のあたりには、黒く焼けこげた地蔵らしきものが描かれ、「身替り地蔵」と書かれている。

『今昔物語集』の巻第十七「墮越中立山地獄蒙地蔵助語第二十七」は、修行僧延好が立山地獄に墮ちた女性の幽霊の依頼を受け、遺族に追善供養を営ませる話がでてくる。これは女性が生前、地蔵講に一、二度参詣したというわずかなばかりの縁で、地蔵菩薩が毎日地獄にやって来て、一日三回、自分の身代わりとなって地獄の責め苦を受けてくれ、身代わりとなって地獄の業火に焼かれたという内容である。この慈悲深い地蔵菩薩の姿を具象的に描いたのが米国・フリア美術館所蔵の『地蔵菩薩靈驗記絵巻』である。



【写真29】地獄谷の身替り地蔵（「立山曼荼羅立山博物館A本」部分）

また、前述した『立山手引草』にも、地獄谷の地蔵菩薩の功德が説かれており、

今、この地獄に立ち給ふ地蔵菩薩、毎日諸々の定に入罪人の代わりに地獄に入り給ふ故に、その御尊体は申すに及ばず、青蓮の玉顔まで焼けさせ給ふて立ち給ふ。地獄廻りの人々、この地蔵菩薩の慈悲深重にして、御肌を焦がし、賽銭までも焼けてあるを見ては、涙を流すこと、瀧の如くなれば、地獄の炎も消え、叫喚の声もしばらくは鎮まれば、大悲の

御恩を仰ぐなり。それ、世の中の有様を我が身に受け思ふに、五十年送りしこと、暁の夢見る間より早く来たれり。

「立山博物館A本」の「身替り地蔵」の図像とイメージがよく重なるところであり、平安末期の『今昔物語集』の本説話が語り伝えられ、岩峯寺衆徒にも影響を与えたものと考えられる。

しかしながら、この身代わりとなって地獄の業火に燃やされる地蔵菩薩という図像は、「立山曼荼羅」諸本の中に、意外にも「立山博物館A本」の他に、はっきりと認識できるものは見られない。

なお、立山博物館B本【写真30】と相真坊A本には、立山山中で白装束の亡者らしき女性が、僧侶らしき人物に何かを懇願しているような場面が描かれており、おそらく、同じ説話をモチーフにしたものと思われる。



【写真30】女性の亡者が僧延好に懇願する場面（「立山曼荼羅 立山博物館B本」部分）

## おわりに

本稿では、まず「立山曼荼羅」諸本に描かれた地蔵菩薩の場面を抽出し、『新 綜覧 立山曼荼羅』の分類・配列に依拠して整理を行った。

説話画風の「芦峯寺関係の立山曼荼羅」では、「賽の河原」はすべて（22本／22本）に描かれており、他の尊格と比較する必要はあるものの、芦峯寺衆徒が廻壇配札活動で絵解きをした際に、賽の河原の地蔵信仰を重視して唱導し、檀那場の多くの人々もその話を求めていたことがうかがわれた。

また、山絵図風の「岩峯寺関係の立山曼荼羅」には、信仰上の観念としての地蔵菩薩は描かれることが少ないとはいえ、子どもや石のみ描かれた2本を含め、「賽の河原」は半数以上（8本／14本）に描かれ、地蔵信仰に関わる地名も明記されるなど、立山山中の名所や要所として紹介され、地蔵霊場としての立山の原風景をとどめていると言える。

次に、立山地獄とされた領域の実景と、その実景から生まれた説話や絵画などともに、「立山曼荼羅」を紹介した。

「賽の河原」に関しては、1—1で作成した基礎資料をもとに、地蔵・子ども・石・卒塔婆・鬼の構成要素については、鬼が描かれるのは34本中15本に過ぎず、また、極端な鬼の呵責などが描かれるものは「筒井家本」1本のみであり、鬼は二次的な存在といえそうである。「賽の河原」の図像は、江戸初期にその図像が確立されていたと考えられる「熊野観心十界曼荼羅」の中央部分に描かれるし、独立した一幅の民衆宗教絵画としても残されている。それらの制作年代や図像を詳細に比較検討することで、「立山曼荼羅」の制作時期を知る一つの手がかりが得られるかもしれない。

今後、他の尊格が描かれる場面も抽出して地蔵菩薩の場面と比較検討したり、各地の檀那場の地蔵信仰に関わる絵画とその図像などを調査したりすることで、立山信仰での地蔵信仰を考察するための基礎資料の充実を図りたい。

## 【謝 辞】

渡浩一氏（明治大学国際日本学部）には、地蔵信仰の歴史、とくに賽の河原の図像について、研究成果を多分に援用させていただき、有益なご教示をいただきました。

また、福江充氏（北陸大学国際コミュニケーション学部）の著作から、多くの知見を得、参考とさせていただきます。

資料調査では、眼目山立山寺ご住職戸田光隆氏より、格別のご協力と写真撮影のご便宜をお借りいただきました。また、資料の掲載に当たって、大野泰秀氏、佐伯節子氏、佐伯宏氏、佐伯睦麿氏、塚原順隆氏、筒井志朗氏、坪井政明氏（五十音順）より、ご配慮をいただきました。

皆様のお名前を挙げて、深く感謝申し上げます。

## 【主要参考文献・文献】

- ・渡浩一『お地蔵さまの世界』（慶友社、2011年）
- ・渡浩一「幼き亡者たちの世界—〈賽の河原〉の図像をめぐる」（『生と死』の図像学）所収、風間書房、1999年）
- ・加藤基樹「立山における閻魔信仰—第一部「閻魔の眼光」の展示理念にかえて—」（平成28年度特別企画展解説書『立山×地獄展』）所収、富山県〔立山博物館〕、2016年）
- ・下坂守『日本の美術 第331号 参詣曼荼羅』（至文堂、1993年）
- ・多賀康晴「立山の地蔵信仰」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第23号』、富山県〔立山博物館〕、2016年）
- ・多賀康晴「立山の地蔵信仰（2）」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要 第24号』、富山県〔立山博物館〕、2017年）
- ・高野靖彦「近世における地獄表現と「立山地獄」—生きるための地獄が呼び覚まされた時代—」（平成28年度特別企画展解説書『立山×地獄展』）所収、富山県〔立山博物館〕、2016年）
- ・田村正彦「非日常性と立山地獄」（平成28年度特別企画展解説書『立山×地獄展』）所収、富山県〔立山博物館〕、2016年）
- ・濱田隆『日本の美術 2 第273号 来迎図』（至文堂、1989年）
- ・速水侑『地蔵信仰』（塙書房、1975年）
- ・福江充『立山曼荼羅—絵解きと信仰の世界』（法蔵館、2005年）
- ・福江充『立山曼荼羅の成立と縁起・登山案内図』（岩田書店、2018年）
- ・福江充『近世立山信仰の展開』（岩田書院、2002年）
- ・福江充「立山信仰資料の翻刻紹介『立山地獄谷伽羅陀山地蔵大菩薩』（大仙坊所蔵）（『人と自然の情報交流誌たてはく』第44号所収、2003年）
- ・松島健『日本の美術 4 第239号 地蔵菩薩像』（至文堂、1986年）
- ・真鍋広済『地蔵菩薩の研究』（三密堂書店、1960年発行、1987年重版発行）
- ・田中久夫『地蔵信仰と民俗』（図書出版、1989年）
- ・米原寛『立山信仰史研究の諸論点』（桂書房、2018年）
- ・『平成9年度 立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）地獄谷・賽の河原』（富山県〔立山博物館〕、1998年）
- ・『総覧 立山曼荼羅』（富山県〔立山博物館〕、2011年）
- ・『霊山立山 天空への祈り—修験から民衆登拝、布橋灌頂会まで—』（富山県〔立山博物館〕、2021年）
- ・『新 総覧 立山曼荼羅』（富山県〔立山博物館〕、2022年）

## 【使用写真一覧】

- ・写真1 賽の河原の地蔵菩薩（「立山曼荼羅 相真坊A本」部分、個人蔵）
- ・写真2 雄山と浄土山
- ・写真3 二十五菩薩中の地蔵菩薩（「立山曼荼羅相真坊A本」部分、個人蔵）
- ・写真4 ブロッキン現象（『探検！立山曼荼羅—親子で親しむ立山開山伝説』（富山県〔立山博物館〕、2002年）より転載）
- ・写真5 閻魔堂前の地蔵菩薩坐像（「立山曼荼羅 相真坊A本」部分、個人蔵）
- ・写真6 芦峯寺閻魔堂
- ・写真7 銅造地蔵菩薩半跏坐像（観音寺蔵）
- ・写真8 立山請来地蔵尊御影（観音寺蔵）
- ・写真9 銅造地蔵菩薩半跏像の蓮華座蓮弁（観音寺蔵）
- ・写真10 巨大な地蔵菩薩坐像（「立山曼荼羅 坪井家B本」部分、個人蔵）



- ・写真11 施餓鬼法要（「立山曼荼羅 相真坊A本」部分、個人蔵）
- ・写真12 立山寺の施食棚（立山寺蔵）
- ・写真13 「立山地獄」刷り物（当館蔵）
- ・写真14 前掲写真3の部分拡大（「立山曼荼羅 相真坊A本」部分、個人蔵）
- ・写真16 みくりが池岸辺の子どもたち（「立山曼荼羅 立山博物館B本」部分、当館蔵）
- ・写真17 池が燃えている様子（「立山曼荼羅 称念寺A本」部分、称念寺蔵）
- ・写真18 「立山曼荼羅 大仙坊C本」部分、大仙坊蔵）
- ・写真19 「立山曼荼羅 日光坊A本」部分、個人蔵）
- ・写真20 賽の河原（『平成9年度 立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）地獄谷・賽の河原』（富山県 [立山博物館]、1998年）より転載）
- ・写真21 賽の河原の保存堂（同上）
- ・写真22 賽の河原の地藏石仏（同上）
- ・写真23 「立山曼荼羅 筒井家本」部分、個人蔵
- ・写真24 「立山曼荼羅 吉祥坊本」部分、当館蔵
- ・写真25 地獄谷石造物群（『平成9年度 立山山上石造物・関連遺跡調査報告書（二）地獄谷・賽の河原（富山県 [立山博物館]、1998年）より転載）
- ・写真26 東から伽羅陀山を見る（同上）
- ・写真27 伽羅陀山保存堂（同上）
- ・写真28 伽羅陀山地蔵菩薩（同上）
- ・写真29 地獄谷の身替り地藏（「立山曼荼羅 立山博物館A本」部分、当館蔵）
- ・写真30 女性の亡者が僧延好に懇願する場面（「立山曼荼羅 立山博物館B本」部分、当館蔵）

## 編集後記

このたび、富山県〔立山博物館〕の『研究紀要』28号を発行いたしました。本号に掲載した論文等は、令和3年4月から令和4年3月までの研究成果を基にまとめたものです。

多くの皆様にご高覧いただき、広く活用していただければ幸いです。

### 富山県〔立山博物館〕研究紀要 第28号

編集・発行 富山県〔立山博物館〕  
〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺93-1  
TEL:076-481-1216 FAX:076-481-1144

印刷 藪下紙工印刷(株)  
〒935-0024 富山県氷見市窪1971-6  
TEL:0766-91-3338 FAX:0766-91-0517

発行日 2022年3月31日

